慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田史学会と『史学』のこれまで : 戦前期を中心として
Sub Title	The birth and development of the Mita Historical Society (三田史学会) and the Shigaku (『史学』) : especially before the Second World War
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.1/2 (2022. 9) ,p.27 (27)- 111 (111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2021年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告 : 『史学』一〇〇年の総括と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220900-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇二一年度三田史学会大会シンポジウム「『史学』一〇〇年の総括と展望」

三田史学会と『史学』のこれまで

―戦前期を中心として―

神崎忠昭

二〇二一年に三田史学会の『史学』は創刊一〇〇周年を迎えた。これまで三田史学会は節目となる年には過去を振り返ると同時に、今後の課題についても考えてきた。[1] 本稿は『史学』創刊一〇〇年記念として、慶應義塾において「歴史学」がどのように研究・教育され、「史学科」と、三田史学会および『史学』がどのように歩んできたかを説明することを目的とする。[2] そのためには、たいへん迂遠ではあるが、福沢諭吉（一八三五―一九〇一）と最初期の慶應義塾における「歴史学」の位置づけ、慶應義塾の大学としての改革、日本における「歴史学」の刷新についても概略的に触れるべきであろうと考えた。それらを踏まえて、戦前期を中心に「史学科」と三田史学会と『史学』について述べることとする（なお本稿は、以下において敬称をすべて省く）。

Ⅰ　福沢諭吉と最初期の慶應義塾における「歴史学」の位置づけ

最初期の慶應義塾における「歴史学」の位置づけを論じるには、やはり福澤諭吉から出発せざるを得ない。本稿は歴史学に関わるものに絞って、福澤の考えと著作について論じることとする。

（1）文明開化の先導者としての福澤諭吉と慶應義塾の創立

福澤は、後述のように、大坂の適塾で蘭学を学んでいたが、中津藩の命を受けて藩邸で蘭学を講ずるために江

戸に下った。[3] しかし居留地横浜でオランダ語では意思が通じないことを実感し、英学に転じた。[4] 思うように学べない苦労の中で、福澤は「万延元年遣米使節」のための咸臨丸の司令官木村摂津守喜毅（一八三〇―一九〇一）の「従僕」として一八六〇（安政七）年一月から同（万延元）年五月に[5]渡米した。帰国後、福澤は「翻訳方」として幕府に取り立てられ、一八六一（文久元）年一二月から六二（文久二）年一二月には「文久遣欧使節」の一員として渡欧し、ヨーロッパでさまざまな見聞を得た。さらに一八六七（慶応三）年一月から六月にアメリカに注文した軍艦を受け取る使節団の一員として再び渡米を果たした。

これらの知見を福澤はすぐに活かした。ヨーロッパからの帰国直後の一八六六（慶応二）年『西洋事情』「初編」を出版した。その内容は政治や、蒸気機関・電信機、ガス灯などの技術だけでなく、収税法、国債、紙幣などの経済面、学校、新聞、図書館などの文化面、さらに病院、養老院など、福祉面にまで及んでいる。福澤はすでに「窮理、地理、兵法、航海術等の諸學、日に闢け月に明に」なっているが、西洋の「政治風俗如何を詳に」しなければ「啻に實用に益なきのみならず、却て害を招んも亦計るべからず」[6]と指摘し、それまであまり理解されていなかった「事業」を取り上げた。西洋の技術や事件・人物については、江戸後期から多くの情報が伝えられていたが、福澤が『西洋事情』で論じたような面について論及されることは少なかった。『西洋事情』で注目された事業には福澤が後年に手掛けるものが多く見られるが、それだけ強く彼の印象に刻まれたのであろう。彼はこれらの未知の概念を、理解を深めるために英書にもあたって調べ、平易な言葉で解説した。『西洋事情』は大好評を博し、一八六八（明治元）年に「外編」三冊が、一八七〇（明治三）年に「二編」四冊が刊行された。

福澤はさらに次々と西洋を紹介する著作を世に問い、一八六六（慶應二）年には『西洋旅案内』を著したが、本書では為替や保険について日本で初めて言及されている。[7] 一八六八（明治元）年には『訓蒙窮理圖解』[8]という科学啓蒙書を刊行し、一八六九（明治二）年には世界地理の入門書『世界國盡』を刊行したが、これは二段に分けられ、下段に本文を置いて上段に七五調でより詳しい説明を付し、多くの図版が添えられている。[9] 福澤が読者の欲求を的確に捉えて、それにふさわしい表現を考案したことがよく分かる。

一八七二（明治五）年から一八七六（明治九）年にかけて福澤は『學問のすゝめ』計一七編を順次世に問うた。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」という有名な冒頭に続いて、彼は「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。唯學問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無學なる者は貧人となり下人となるなり」と断言し、「いろは四十七文字を習ひ、手紙の文言、帳合の仕方、[10]算盤の稽古、天秤の取扱」から始まり、地理学、究理学、歴史、経済学、修身学を学ぶよう「すゝめ」、「是等の學問をするに、何れも西洋の翻訳書を取調べ、大抵の事は日本の假名にて用を便じ、或は年少にして文才ある者へは横文字をも讀ませ、一科一學も實事を押へ、其事に就き其物に從ひ、近く物事の道理を求て今日の用を達すべきなり」と説く。[11]

これは「五箇条の御誓文」（一八六八年）の「第五条智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」[12]の大号令とも一致し、やはり大ベストセラーであった中村正直（一八三二―一八九一）翻訳のサミュエル・スマイルズ『西國立志編』[13]（一八七〇年）の主張とも重なるもので、この時代の精神と強く共鳴した。平易で魅力的な言葉で書かれたこれらの著作は大人気を博し、特に『學問のすゝめ』は洛陽の紙価を高め、海賊版を含めれば、福澤自身も「其發賣頗ル多ク毎編凡ソ二十萬トスルモ十七編合シテ三百四十萬册ハ國中ニ流布シタル筈ナリ」[14]と言うほどで、当時の人口が約三三〇〇万人[15]とされることを考えると、空前のベストセラーであった。福澤はチャンスを逃すことなく時代の最先端を積極的に突き進み、これらの著作によって西洋の「新知識」を伝える知識人と見なされ、文明開化の先導者となった。

これに先立って福澤は中津藩江戸藩邸内に一八五八（安政五）年私塾を開いて西洋の学問を講じていたが、一八六八（慶應三）年四月これを芝新銭座に移転して「慶應義塾」と改称し、その設立文書である「慶應義塾之記」によれば「洋学塾」とした。「今爰に會社を立て義塾を創め、同志諸氏相共に講究切磋し、以テ洋學に從事するや、事本と私にあらず、廣く之を世に公にし、士民を問はず苟も志あるものをして來學せしめんことを欲するなり」[16]と高らかに唱えている。当時、江戸／東京に洋学塾は一〇〇を超えて存在したが、慶應義塾は中村正直の同人社や近藤真琴（一八三一―八六）の攻玉社とならんで東都三塾の一つとして名声を博した。[17]さらに幕府が設置した開成所が維新によって閉鎖されると、「文物

暗黒の世」にあって慶應義塾は東京随一の教育機関として多くの俊英を惹きつけることになったのである。

一八七三（明治六）年、当時の日本を代表する洋学者一〇名によってわが国最初の学術結社である「明六社」が発足すると、就任は固辞したものの、福澤はその会長に推挙された[18]。さらに一八七九（明治一二）年には現在の日本学士院の前身である「東京学士会院」の初代会長に福澤は就任した。明六社には慶應義塾の第一期生で塾長を務めた古川正雄（一八三七―一八七七）をはじめとして、福澤の右腕である小幡篤次郎（一八四二―一九〇五）、やはり塾長を務めた藤野善蔵（一八四六―一八八五）など多くの福澤門下が参加し、東京学士会院にも小幡篤次郎や慶應義塾付属診療所主任を務める杉田玄端（一八一八―一八八九）が選ばれた[19]。福澤のみならず慶應義塾も当時の最高水準の教育機関と認められ、一八七三（明治六）年からは各地の要請に応えていくつも分校が設立された[20]。また慶應義塾は英学教師の供給源となり、各地の学校に約六〇〇人の教員を派遣し、東京大学の前身である開成学校や東京師範学校などの主たる学校にも多くの人材を送りこんでいる[21]。

（2）歴史家としての福澤諭吉の特質

福澤は八面六臂の大活躍で日本に文明開化を招来したが、自らの人生を振り返って「一身にして二生を経るが如し[22]」と述懐しているように、実際、彼の生涯は維新を境にちょうど二分されている。彼の個性には「江戸」と「明治」の二面性があり、歴史家としての特質にもそれが表れていよう。

『西洋事情』で「抑々各國の政治風俗を觀るにはその歴史を読むに若くものなし[23]」と述べているように、福澤は歴史を学ぶことを重視した。実際、「洋学塾」としての慶應義塾の最初期の教材には西洋の歴史書が並んでいる。たとえば『クヱケンボス氏合衆國史』『パルレイ氏萬國歴史』などが用いられている[24]。これらの影響は単に知識を得るというレベルにとどまらなかった。歴史家としての福澤諭吉の代表作は『文明論之概略』（一八七五年）だが、この著作において福澤はそれまでの歴史の方法を批判して「都べてこれまで日本に行はるゝ歴史は、唯王室の系圖を詮索するものか、或は君相有司の得失を論ずるものか、或は戰爭勝敗の話を記して講釋師の軍談に類するものか、大抵、これらの箇條より外ならず。（中略）亦見るに足らず。概していへば、日本國の歴史

はなくして、日本政府の歴史あるのみ。學者の不注意にして、國の一大缺典といふべし」[25]と述べ、フランソワ・ギゾー（一七八七―一八七四）『ヨーロッパ文明史』（一八二八年初版、一八四六年英訳版）やヘンリ・バックル（一八二一―一八六二）『イギリス文明史』（第一巻が一八五七年、第二巻が一八六一年に刊行）[26]の影響を受けて古今東西の文明の発達を概観した。そして啓蒙主義的な図式を用いて「文明」「半開」「野蛮」の三段階を設定し、「文明」の段階にはヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国があり、日本は「半開」の段階にあるとする。そして英国の植民地となったインドを「殷鑑」として挙げ、「英人が東印度の地方を支配するに其處置の無情殘刻なる實に云ふに忍びざるものあり」[27]とし、復古を排除し、進んだ西洋文明を摂取して、これを範として自国の文明の発達をはかることが急務であると説いた[28]。そして日本は人々の智恵と徳性を発揮させて、旧来の支配者と被支配者による分断を解消し、活発な経済活動を行って国を豊かにして自国の独立を守らなければならないとした。この著作は我が国の多くの人々の歴史観を一新し、後世にさまざまな影響を与えた[29]。

この歴史への傾きは、だが西洋との出会いによって突然生まれたのではなく、やはり彼の前半生において形成されたものでもあろう。そのためには彼が形成期に受けた教育についても検討する必要がある。福澤は福澤百助（一七九二―一八三六）の第五子・次男として大坂で生まれた。百助は中津藩奥平家家中の十三石二人扶持という微禄で回米方として大坂蔵屋敷で藩の借財を扱うに過ぎなかったが、「伊東東崖先生が大信心[30]」の篤学の士であり、多くの学者と交流し評価されていた。その学風は、友人であった中村栗園の悼詞によれば、「單に詩歌文章の浮文を玩ぶ文人流のそれではなく、孝悌仁義を重んじ、修身治國の道を重んじる儒の本流[31]」であったという。

福澤が生まれて一年半で父が急逝したため、福澤は大坂を去って中津で生活することになった。『福翁自傳』を読むと、福澤が中津での生活になじめず、さらに微禄ゆえの苦労もあって閉塞感を感じていたことが分かるが、一四、五歳になってようやく学問を始め白石照山の塾である晩香堂へ通ってさまざまな漢籍を読み漁った。福澤は『福翁自傳』において彼が影響された二つの学統に言及しているが、一つはこの照山を通じての亀井南冥（一七四三―一八一四）昭陽（一七七三―一八三六）父子のものである[32]。亀井父子は荻生徂徠（一六六六―一七二

八）に発する護園学派に属するが、この学派の特徴は歴史を学ぶことで「今」を相対化させて抽象的な政治談議を脱することができるとしたことで、[33]「政事」と「学問」の一致を説き学問における政治的実践を重んじた。照山は「龜井が大信心で、餘り詩を作ることなどは敎へずに寧ろ冷笑して居た」[34]という。もう一つは帆足万里（一七七八―一八五二）の学統である。万里は儒学から出発して独学で蘭学を修め、西洋科学を理解しようとして『窮理通』を著した。[35]万里は豊前に多くの門弟を有し中津藩でも講じ、福澤は兄三之助を通じてその影響を受けた。[36]三之助は「いま日本に翻訳書というものがあって、西洋のことを書いてあるけれども、真実に事を調べるにはその大本の蘭文の書を読まなければならぬ。それについては、きさまはその原書を読む気はないか」と蘭学の勉強を勧めたという。[37]これは前述の『訓蒙　窮理圖解』など福澤の初期の著作の方向性を指し示していよう。

学問を始めるのは遅かったが、福澤はすぐに力をつけ、『論語』『孟子』『詩経』『書経』さらに『史記』『左伝』『老子』『荘子』などの漢籍を修めた。特に春秋時代の歴史を論じる『左伝』は得意で、何度も読み返して面白いところは暗記し、この頃には先輩を凌いで「漢學者の前座ぐらゐ」になっていたと自ら述べている。[38]福澤が好んだ『左伝』は「春秋三伝」のうちでは歴史的記事に富んでおり、福澤は洋学を志す前から「歴史」を好んでいたのである。

一方で注意しなければならないのは、この「歴史」も含む「文学」という概念で、「文学」は現在とは概念範囲が異なっていた。福澤のいう「文学」とは、たとえば「慶應義塾之記」において、外国との接触によって「我邦の形勢終に一變し、世の士君子皆彼國の事情に通ずるの要務たるを知り、因て百般の學科一時に興り、各其學を首唱し、生徒を敎育し、此こに至りて始て洋學の名起れり。是豈文學の一大進歩ならずや」（傍点は筆者による）[39]と述べているように、「文学」とは「学問一般」であり、父百助におけるのと同じように福澤の青年期の日本で主流であった「士大夫が実践すべき学問」であった。西洋的な文脈で言えば、政治を担う人々である古代ギリシア・ローマの「自由人」が学ぶべき「自由学芸／リベラルアーツ」に近いと言えるであろう。

一方で西洋においても近代科学が勃興するにつれて、さまざまな概念、たとえばhistoryやliteratureの概念が変わったことが指摘されている。[40]近代日本の「文学」

の概念も、さらにこの外国の影響を受けて大きなニュアンスの変化があった。[41] 一八七五（明治八）年には「文学とはサイヤンスなり、百科の学を論ずるの名なり、詩文抔を云ふには非ず」と主張される一方で、[42] 明治二〇年代以降になって、坪内雄蔵（逍遥）（一八五九―一九三五）や長谷川辰之助（二葉亭四迷）（一八六四―一九〇九）らの活動によって、いわゆる日本の近代「文学」が誕生し、文学とは審美的な側面を持つ芸術作品と見なされるようになったという。福澤は一八七八（明治一一）年頃から漢詩に自らの思いを託すようになったが、[43] 一方で慶應義塾において一八八三（明治一六）年に漢詩の社中が組織されると、福澤は「今單に文學會と云はゞ、或は之を支那風に解釋して風月に唫じ詩文を弄する會ならんと思ふ者なしとも云ふ可らず。是れ余の最も恐るゝ所なり」[44] して、これを禁止した。[45] これは今でいう「文学」を私的には認めるが、西洋の学問を学ぶ場である慶應義塾においては認めないということかもしれない。

さらに適塾での福澤の勉学の方法も江戸時代的要素が強い。大村益次郎（一八二四―一八六九）をはじめとする多くの俊英を輩出した適塾での生活は、福澤の生き生きとした筆致によって伝説と化しているが、そこでの教育にはいくつもの特徴と課題があったことが見てとれる。第一に、備える洋書や辞書が少なかったことである。英書はなく、オランダ語の窮理書・医書が十数冊あるのみで、「ゾーフ」と呼ばれた蘭和辞典の写本も一冊しかなく、それが置かれていた「ゾーフ部屋」から持ち出し禁止で、使用をめぐって塾生の奪い合いが生じていたという。[46]

また教育方法としては「会読（輪講）」が重視された。オランダ語力を身につけると、塾生は「会読」を行うが、塾の蔵書の一部をそれぞれ写して辞書を参照しながら準備し、数行ずつ講じるものであった。[47] この会読という方法は、江戸後期の儒学において採用されたもので、「素読（音読と暗誦）」「講釈（先生による講義）」とは異なり、少人数が議論を闘わせる読書会で、多くの利点を有し、[48] のちに「debate」に「討論」という訳語を当てたとされる福澤に影響を与えたともいわれる。[49]

（3）初期の慶應義塾での教育

前述のように、福澤は中津藩の命を受けて江戸藩邸で洋学を講ずるが、初期の「福澤塾」の教育には適塾と同じような傾向と課題があった。蘭学から急遽英学に転じたという制約に加え、教育方法をどのようにすべきか、

学生の規律をどのように維持するか、福澤は苦労した。一八六六（慶応二）年頃の福澤塾は、最初期の門弟の一人である馬場辰猪（一八五〇―八八）の回想によれば、築地鉄砲洲にあった奥平家の中屋敷である「大きな大名屋敷の長屋の中の一部」で「二間きり」しかなく、「定まった教師がいなかった」し、「互に教へあわなければならなかった」。「小さい文典を読みをはると、その上のことを教へることのできる者は誰もゐなかつた」。また藩の費用で学びに来る者が多かったため塾生は不規律で、馬場辰猪はすぐに退転して大坂に向かった。[50] のちに三菱財閥を取り仕切る荘田平五郎（一八四七―一九二二）も「福澤塾は不規律亂暴であるという評判」のために最初は他塾に入ったと述べている。[51]

教科書の確保にも苦労していたようで、それを得るため、福澤は近くに住む蘭学の桂川家七代目当主国興（甫周）（一八二六―一八八一）の知遇を得て洋書を借用した。甫周の娘である今泉みね（一八五五―一九三七）の回想によると、福澤は一番質素な身なりだが、それに頓着せず、つねに本のことばかり心にかけて、桂川家から洋書を借りると、他の人は一と月以上かかるのに、数日で筆写して返したという。[52]

三度目の洋行の際、紀州藩や仙台藩などのためにアメリカで書籍を購入して謹慎処分を受けたが、福澤は自身や慶應義塾のためにも辞書や英書を大量に準備した。[53] これ以降、慶應義塾は一人ずつに教科書を渡すことができるようになったという。同時に素行不良者を退学させるなどの措置もとり、馬場辰猪は「學校も慶應義塾と呼ばれてゐた」頃に復学したが、「英語の勉強法が非常な進歩をなした」と証言している。[54]

一方で、授業方式は「慶應義塾新議」（一八六九（明治二）年）によれば、「社中に入り先ず西洋のいろはを覺え、理學初歩歟又は文法書を讀む、此間三ケ月を費す。三ケ月終て地理書又は窮理書一冊を讀む、此間六ケ月を費す。六ケ月終て歴史一冊を讀む、此間六カ月を費す」[55] となっており、洋書の講読が中心であったが、「慶應義塾」となっても「会読」方式によっていた。その具体的な様子は、塾長も務めた門野幾之進（一八五六―一九三八）によれば、「教師といふのは、つまり幾らか本の讀める方の人が、寺子屋のやうに塾でも矢張り疊の敷いてあるところに坐つて、寺子屋の机のやうなものを前に置いて座つてゐる。さうすると、塾生が勝手次第にこの先生は教へ方が上手だとか何とかいふわけで、そんな先生

のところには澤山寄つて來る[56]」。会読は「或る級では七人か十人ある、その七人か十人の人が教場へ出て籤を引く、竹の筒が教場に置いてあつて、振出すと番號が出る、その籤を引いて今日の當番が決まる。（中略）さうすると、籤の順に生徒が坐つて先生はアンパイアで眞ン中に坐る。何等は何、何等は何といふやうに本は決まつてゐる、その本のこゝからこゝまで今日は會讀しますといふと、その本の一節を一番の人が讀む。さうすると、後の六人なり七人なりが讀んだ人に向つて、これはどういふ意味だ、こつちはどういふ意味だと根掘り葉掘り質問する。それに對してその人が答へる。間違つてゐると次の人の說を聞く、その人も間違つてゐる、さうすると合ふところまでゆく。三番目の人が正しく解釋すると、一番はじめの人と二番目の人に黑點をつけて三番目の人に白點をつける。皆がわからないときは皆が黑點で、それは斯うだと、そこではじめて先生が解釋する」形式で、「この會讀は一種の試驗」であったという[57]。

また福澤の講義スタイルも興味深い。新錢座時代の思い出として、門野幾之進は「先生はたゞ本だけによつて講釋するのではなく、例へば（箱館戰爭で敗れた）榎本釜次郎（武揚）が殺されるか殺されぬかといふ問題がある時、これは如何したものだらうなどといふやうな時事問題を掲げて、いろいろ解說するという風であつたから、生徒も演說を聽くやうな心地で聽いてゐたでありました（カッコ内は筆者による）[58]」と伝え、明治元年に入塾し教員も務めた永田健助（一八四五―一九〇九）によれば、福澤はギゾーの文明史およびバックルの文明史を講義する際に「單に原書の意味を解釋說明するのみならず、其所論を時勢に當てはめて眼前の實例を引照」したもので、「例えば封建制度を講ずる場合には、日本の封建治下に於ける君臣の關係は西洋のマスターとスレーブの關係と同樣のもので、今の士族などいふものはスレーブのやうなものであると封建の主從關係を罵倒」し、「バックルの文明史の講義は氣焰萬丈痛快切なる說を吐かれた」という[59]。田中萃一郎（一八七三―一九二三）も幼稚舍[60]時代に福澤の「日本外史」の特別講義を受けているが、「保元亂後のことを敍した條に特減死一等、拔其臂筋、流于大島、爲朝筋力雖減、用箭加長とあるその講義の際、先生が臂の筋を拔かれた爲朝が長い箭を使うようになった抔と云ふ、そんな馬鹿氣たことがあるものかと痛罵せられた」と回想している[61]。このように情熱的で、多くの塾生に深い刻印を押した福澤の講義は、西洋を指向して合

理性を追求はしたが、江戸時代から続く傾向をなお強く有していたのである。

競うように勉強したので「錬磨」されたであろうが、会読による学習に満足しない塾生もいた。福澤の甥で塾長を務め、のちに実業の世界に転じた中上川彦次郎（一八五四―一九〇一）は「この忙がしい世の中に、一週間僅僅二・三・頁を學んで居るが如き悠暢たる勉強振りでは、到底迅速なる知識の進歩は測り難い。今後は宜しく會讀法を廢して、先生の講義を聽くに如くはないといふ發議をした」が、多数決で敗れた。中上川は「地理や歴史の一通りを學ぶのは宜いが、繰り返し々々何時迄も斯様なるものを勉強して居ても仕方がない」と述べたという。[62]

また慶應義塾の英語は訳読を主眼とした上に、蘭学の影響もあり、独特の発音で知られていた。[63] 慶應義塾で学び、のちに東京文理科大学学長となる三宅米吉（一八六〇―一九二九）が千葉師範学校で英語教師を務めていたとき（一八八〇（明治一三）年頃）、授業で「ジス・イズ・ア・スチュール」と言ったのを、たまたま参観に来ていた校長でやはり慶應義塾出身の歴史家那珂道世（一八五一―一九〇八）が「それはスチョールではないか」と訂正したが、のちによく見たらそれは「School」だったという笑うに笑えない逸話さえある。[64]

さらに西洋の知識が次第に広まっていくにつれて、慶應義塾で高く評価して取り上げてきた「教科書」の質にも気づくようになる。福澤自身が一八七七（明治一〇）年三田演説会において、慶應義塾の学問の貢献を肯定的に論じる一方で、ウェーランド（英氏）の経済論などを「初は之を讀むこと頗る困難なりしかども、再三再四復讀して漸く其義を解するに及び、毎章毎句、耳目に新ならざるものなく、絶妙の文法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るゝに」至ったが、明治になって「世の文化益進み、西哲の新説は日に開き、舶來の新書は月に多く」なると、「前年の田舎魂を驚破したる英氏の經濟脩身論等を取て之を見れば、此は是れ彼の國學校生徒の讀本にして、「パーレー」の歴史類は童兒の爲に出板したるもの」[65]だと分かったと述べている。

最初期の弟子で、のちに早稲田大学と深く関わる矢野文雄（竜渓）（一八五一―一九三一）は当時を回想して、当時の「義塾教授の精神は只達者に譯讀を教ゆるの一方針に止まりしが如し」、（中略）訳読の力に応じて昇級するため「斯くして譯讀の力は上達するも昇級の速やかなる者は一冊の書を讀み了ること尠なく此級より彼級に速

に移るが故に只譯讀の力ありと云ふまでにて書籍中の事柄をば切れ〳〵に知り得るに過ぎず」[66]と述べている。大学部第一回卒業生の川合貞一（一八七〇―一九五五）も、大学創立五〇年の際に「大學部設置以前の慶應義塾といふものは、唯、英書を教へたといふだけであつて、専門の智識といふものは何一つ與へられなかつたと云っていい」とさえ吐露している。[67]

また塾外にも同じような見方は広まっていたようで、一八八二（明治一五）年に来日し、一八九〇（明治二三）年まで帝国大学で行政法などを教えたカール・ラートゲン（一八五五―一九二一）は帰国後に「ほとんどすべての私立学校の出来はひじょうに憐れむべきもの」と評し、その註に慶應義塾を挙げ「私の念頭にある典型的な例が、ひじょうに有名な東京の慶應義塾である。一五歳の少年たちに対する「経済」講義、国際法、国民経済は、教員が暗記した「テキストブック」を読み上げることからなっており、何も説明をしない。これは今なお日本において一般的に残っている方法で、ある点では古い中国の実践に、ある点ではアメリカの模範によっている。この学校は一八八二―八三年には約一〇〇〇人の学生がいたが、一八八五―八六年には三〇〇人しかいなかった。だが、一八八七―八八年にはまた約九〇〇人になっていた。この種の学校の学生の入退学は年間を通して絶えずなされている。また教員は最上級の学生から募られている」と記している。[68]

時代はリベラルアーツにとどまらず、一歩進んだ専門的な知を求めていた。発音などの実用面だけでなく、慶應義塾の学問水準そのものが問われる惧れがあったのである。

（4）慶應義塾の危機

優れた教育機関として名声を誇っていた慶應義塾は、状況の変化によっても次第に苦境に陥っていく。一つは学生減の問題で、慶應義塾への入学者は一八七一（明治四）年には三七七名にのぼったが、一八七七（明治一〇年）には一〇五名に減り、一八七八（明治一一）年に在学生は二三三名で最低を記録し、[69]経営危機に陥ったのである。

その理由は複合的であったが、まず第一は塾生の多くが出身していた士族の没落である。一八六九（明治二）年六月版籍奉還が行われ、旧藩主の家禄はそれまでの石高の一〇分の一とされ、武士は一括して士族とされた。

士族の教育機会を確保するため藩による給費制度があったが、一八七二（明治五）年に府県による「公費生」制度に切り替えられると、私塾で学ぶ者に対する公費給付が廃止された。慶應義塾を含む多くの私塾は当局に上申書を提出し、私塾にも公費給付を適用してほしいと求めたが、聴きいれられなかった。[70]

さらに一八七一（明治四）年の廃藩置県によって士族を支える藩という体制そのものが消え去り、一八七三（明治六）年には徴兵制によって士族の存在理由が失われた。一八七六（明治九）年には秩禄処分によって士族の財政的基盤はさらに崩れて下層士族が窮乏化し、いくつもの反乱を惹き起こした。これは一八七七（明治一〇）年の西南戦争において頂点に達するが、西郷隆盛（一八二八―一八七七）と福澤が互いに高く評価していたため、[71]慶應義塾には薩摩からの塾生が多く、退学して帰郷する者も続出し、慶應義塾の打撃は大きかった。[72]

福澤は、以前から出版などによって得た収益を慶應義塾の拡張費や経常費として投入していたが、[73]さらに個人で赤字を補填する始末となった。福澤は政府や諸方面に資金援助を求めるも、それも叶わなかった。[74]福澤は人件費の削減などを検討した末に廃校を決断したが、中上川彦次郎をはじめとする門弟たちが反対した。一八八〇（明治一三）年一一月彼らは「慶應義塾維持法案」をつくって慶應義塾を財政的に助け、慶應義塾の存続へ努力することとし、卒業生や篤志家に訴えて、総額四万円以上の寄付申し込みを得た。これらの門弟たちの献身がなければ慶應義塾は存続せず、今日の姿はなかったであろう。

慶應義塾を取り巻く政治環境も一変した。維新以来、福澤は「三田の文部卿」との異名を得るほど文部行政などに影響力を有し、[75]明治政府要路の人々の諮問に与っていたが、明治一四（一八八一）年一〇月の政変によって参議大隈重信（一八三八―一九二二）が政権から追放されると、矢野文雄（統計院幹事兼太政官大書記官）など大隈派と目された福澤の弟子たちも排除された。この一連の事件において福澤がどれだけ重要な役割を果たしたかについては今もさまざまな議論がなされているが、本稿では立ち入らないこととする。[76]いずれにせよ、これによって塾員の官吏としての進路は狭まった。

また士族身分が兵役を担うのではなく、前述のように、国民全体への兵役義務が敷かれることとなった。私立学校在学者に兵役免除は認められていなかったが、私立学

校唯一の特例として慶應義塾の一部の学生に対しては徴兵免役がなされていた。だが一八八三（明治一六）年に、この徴兵令免除が不適用となり、その結果として学生総数五八八名のうち約一〇〇名が退学する事態が生じた。福澤は政府に大きく譲歩して再考を求めるも叶わなかった。[77] その際の政府の決定を伝える記録が残っているが、慶應義塾が「廃滅」したとしても「必シモ之ヲ患フルニ足ラザルナリ」とあるという。[78]

同じ頃に教育制度そのものも見直されつつあった。自由主義的な一八七九（明治一二）年の「第一次教育令」に代わって一八八〇（明治一三）年「第二次教育令」が公布されると、文部省および府県の権限が強化され、就学の義務を課す一方で、学校の設置基準等を定め、次第に教育の内容や教員の資格などについて介入するようになった。一八八四（明治一七）年には文部省達「中学校通則」によって「教員中少なくとも三人は中学師範学科の卒業証書又は大学科の卒業証書を有する者を充てること」が求められた。[79] 一八七二（明治五）年の段階で慶應義塾は「中学校」と位置づけられ、このとき「師範学科」はなかった。[80] 塾員が教職に新たに就くことは難しく、多くの教育系の人材を全国の中学校などに送っていた慶應義塾にとってさらなる打撃となった。

この一連の政策転換は単に福沢を危険視した結果だけではなく、近代日本の建設にふさわしい行政や教育の制度を求めてのことでもあったろう。維新直後には幕臣あるいは陪臣さえも出身を問われず登用され、福澤門下もこのような流れに乗って頭角を現した。また有為な人材を養成するために西洋式の学校も設置されたが、教育方針が定まらなかった。明治政府は西洋の知識を得るために外国人教員を雇用したが、中にはいかがわしい人物もいたようである。[81] 本格的な近代化のためには、危機感に動かされて手探りで試行するのではなく、諸制度の抜本的な改革が必要となっていた。

日本の教育制度は、伊藤博文の主導の下で一新されることになる。[82] 慶應義塾に特に関わる高等教育については、すでに一八六九（明治二）年に洋学を担当する大学南校が設立され、一八七七（明治一〇）年に官立洋学校の東京開成学校と東京医学校が統合されて文部省管轄の官立「東京大学」が設立されていた。新たに一八八六（明治一九）年に「教育令」に代わって「帝国大学令」を含む一連の「学校令」が公布され、教育への国家の関与がさらに強化された。官学に対する一連の奨励優遇策が採ら

れ、その学問水準が一挙に向上することになる。

まず政治法制から軍事外交、経済産業から教育学術など多岐の分野にわたって多くの外国人教師が雇用された。明治政府が雇用した外国人の総数はなかなか確定できないが、八〇〇名を下らないとされる[83]。待遇も大臣並みの高給で優遇される者もおり、一八七四（明治七）年の政府雇い外国人の月給統計によると、八〇〇円（太政大臣給相当）以上が一〇名、一〇〇円―二〇〇円が総数（五二四名）の三五％、二〇〇円―三〇〇円および一〇〇円未満が各一八％になっており、外国人経費がもっとも高かった工部省では、外国人技師への俸給支出七六万六八八八円は同省経常経費の三三・七％に上るという[84]。一方、一八七二（明治五）年に慶應義塾はアメリカ長老派宣教師カロザスとグードマンを雇い入れて英語を教授させ、その後も二十余名の外国人教師を採用しているが、たとえば「高給」とされたカロザスの月給でも一二五円であった[85]。国家の資金力にはとうてい太刀打ちできなかったのである。

また伊藤は立憲国家としての日本の行政を担う人材の養成機関として帝国大学法科大学を設立し、「国制知」を日本に定着させようとした[86]。法科大学卒業者には、高級官僚への任用上の特権が与えられ、一八八七（明治二〇）年の勅令「文官試験試補及見習規則」によって、帝国大学卒業者以外の官僚志望者については卒業大学による受験資格の制限が定められた。さらに帝国大学の卒業者にはすべての国家試験について、試験免除の特権が与えられた[87]。

海外留学についても、破格の待遇が用意されていた。一八七二（明治）五年の「学制」施行にともなって能力主義による選抜が行われ、国家による留学の一元的管理が進んだ[88]。官選留学生は初等と上等の二種類に分けられ、前者は中学卒業者より一五〇人、後者は大学卒業者より三〇人以内を選抜することとした。初等留学生は五年間、上等留学生は三年間、それぞれ本人の希望と教師の見込みに従って、官より命ぜられた学科を修得することとし、初等留学生には年間八〇〇円から一、〇〇〇円、上等留学生には同じく一、五〇〇円から一、八〇〇円が往復旅費とともに支給された[89]。これ以降一八七五（明治八）年の「文部省貸費留学生規則」、一八八二（明治一五）年の「官費海外留学生規則」など制度は若干変更されるが、官立高等教育諸機関の教員および学生・卒業生に対する手厚い支援は続き、官費留学はほぼ彼らによって独占さ

れた。[90]

経済的にも、帝国大学の学生には優遇措置が設けられた。帝国大学の授業料は一八八五（明治一八）年に月額一円から二円五〇銭に一挙に引き上げられて問題となったが、[91]一八八五（明治一八）年から一八八六（明治一九）年にかけての慶應義塾の授業料が毎月一円七五銭で、塾費が内塾生が二五銭、通学生が一〇銭、寄宿舎費にあたる月俸が二円五〇銭から三円で、書籍費が一〇銭であったことを考えると、[92]ほぼ変わらない水準であった。だが帝国大学生へは奨学金提供が呼びかけられ、一八八六（明治一九）年だけで官民あわせて学生約一四〇名近くへの貸費・給費の奨学金提供の申し出があったという。[93]慶應義塾の学費は割高だったといえよう。

さらに帝国大学を卒業すれば官僚などの道が約束されていた。官僚の地位は極めて高く、一八九二（明治二五）年に福井県知事になった牧野伸顕（一八六一―一九四九）の回想によれば、地元民の扱いは旧幕時代の殿様そのままで県内視察の際には土下座して迎えられたという。俸給は、一八九一（明治二四）年で、高等官ではない判任官でさえ最高は九〇〇円であった。当時は一坪二五円で相当な家が建ったという。[94]また権限の乱用による収入も多かったようである。[95]日本経済がまだ発展しておらず、有望な勤め先が少ない時代にあって官僚や軍人はエリートで、一九〇三（明治三六）年の『人事興信録』に掲載されたエリートのうち官僚は一九・五％を占めるという。[96]その後官僚の給与水準は相対的に低下するが、官学への進学はそのようなエリートへの道を拓いてくれるのである。

多くの若者が官学を目指した。その人気は、当時の受験雑誌の傾向からも見てとれる。「進学案内書」と総称される受験雑誌は一八八三（明治一六）年に初めて出版されるが、明治三〇年代にはさまざまな種類の案内書が登場した。上京にあたっての注意など、さまざまな情報が記載されていたが、私立学校には不十分なものも多いとし、帝国大学を最優先に志向するよう直截に強調し、高級官僚となる可能性と出身学校の関係を記す主張もあった。[97]ドライに学校は選択されていたのである。

池田成彬（一八六七―一九五〇）はのちに三田派の財界人を代表することになる人物だが、「帝大に行くつもり」で父の友人でその時の帝国大学総長だった渡辺洪基（一九四八―一九〇一）に相談すると「英書を読む力を養わなければならない。だからまず慶應義塾にいって英

書を読む力を養って、それからここの大学の選科に入れ」と助言されて慶應義塾に入学したという。[98] 渡辺洪基は福澤に師事した人物だが、彼も慶應義塾を「受験予備校」のように扱っていた。

洋学校をはじめとする私塾の多くが転機を迎え、東都三塾のひとつである同人社は不振のため一八八九（明治二二）年に予備校化し、一八九一（明治二四）年の中村正直の死後に廃校に追い込まれた。[99] もうひとつの攻玉社は存続するが、海軍兵学校の予備校化した。[100] また「仏学元祖」と謳われた村上英俊（一八一一―一八九〇）も、彼の許で修めたフランス語が実際にはフランス人に通じないという評判が広まって零落し、晩年はかつての教え子たちの支援に頼っていたという。[101] かつての名教師や名門塾が輝きを失いつつあった。

Ⅱ　慶應義塾の大学としての改革

（1）福沢諭吉からの慶應義塾の独立

一八八〇（明治一三）年「慶應義塾維持法案」によって慶應義塾の存続が決議され、翌一八八一（明治一四）年には「慶應義塾仮憲法」が制定された。これによって、それまで慶應義塾は福澤個人のものであったが、その後

も慶應義塾の基本方針をめぐって福澤と、新しく慶應義塾運営の中心となる小幡篤次郎、小泉信吉（一八四九―一八九四）、門野幾之進、鎌田栄吉[102]らの間に対立がみられることもあったものの、門弟らの意見が次第に力を得ていくことになる。[103] 一方で福澤は慶應義塾との関係をなるべく薄くしておく方がよいと考えていたという。[104] 一八八七（明治二〇）年、彼の生前には実現しなかったが、福澤は慶應義塾の学校敷地の名義を自分から慶應義塾に移すと発表したほどである。[105]

この頃から福澤は言論人・起業家としての活動をさらに精力的に展開していく。福澤は一八八〇（明治一三）年に交詢社を設立し、一八八二（明治一五）年に『時事新報』[106]を創刊した。『時事新報』は、福沢の名声にも支えられてたちまち東京の最有力紙の一つに発展し、福沢はみずから論説を執筆あるいはチェックし、本紙に掲載された彼の多くの主張は世論や政府政策の動向に大きな影響を及ぼした。一八八二（明治一五）年以降、福澤の執筆活動は『時事新報』上でなされることになる。

一方で、商機を見るに敏な福澤は若い頃から事業を試みていたが、銀行、鉄道、電気、保険など多くの新規事業に投資し、横浜正金銀行や丸善などの設立に深く関わ

った。[107] のちに「電力王」と呼ばれる娘婿福澤桃介（一八六八―一九三八）の事業は、ある意味では福澤の事業に対する先見の明と人脈を反映していよう。[108] そして福澤は多くの門弟を民間事業に送りこんだ。代表的な例としては岩崎弥太郎に請われて一八七四（明治七）年に三菱に入社した荘田平五郎、[109] 明治生命を設立した阿部泰蔵（一八四九―一九二四）、井上馨の推挽で一八九一（明治二四）年に三井に入った中上川彦次郎[110] などがおり、枚挙に暇がない。特に中上川は、破綻の淵にあった三井を建て直して銀行業務を改革し、多くの福澤門下を三井家の事業に迎え入れて彼らに飛躍の機会を与えた。[111]

（2）大学部設立

一八八九（明治二二）年一月、大学部設置のため「慶應義塾資本金」の募集が開始された。さらに八月には「慶應義塾規約」が制定され、そして同年一〇月にそれに基づいて最初の評議員会が開催されて慶應義塾に法人としての体制が正式につくられた。[112] 翌一八九〇（明治二三）年一月には「大学部」が発足し、文学・理財・法律の三科を設置した。そして従来の正科・別科を普通部とし、研究教育の高度化を図り、外国人教員をアメリカより招聘することとした。

これ以前にも福澤は日本在住の宣教師などに講義を依頼しており、前述のカロザスをはじめとして、その数は二五名にのぼっていた。[113] 特に聖公会の宣教師アーサー・ロイド（一八五二―一九一一）[114] は大きな役割を果たし、イングランドの福音宣教協会に教員派遣を求めたり、一時期は慶應義塾の英語教育全体を統括していた。[115] だが、ユニテリアン派の宣教師アーサー・ナップ（一八四一―一九二一）との競争に敗れたようなかたちで一時慶應義塾を去っていた。[116]

官立に負けない専門的な教育を行える人材を求めて、福澤はハーバード大学総長チャールズ・W・エリオット（一八三四―一九二六）と折衝し、三名の招聘に成功した。[117] 文学科（以下、文科）[118] にはウィリアム・リスカム（一八四八―一八九三）が着任し、一八九〇（明治二三）年から一八九三（明治二六）年に修辞学と英文学を講義した。理財科にはギャレット・ドロッパーズ（一八六〇―一九二七）が招かれ、一八九〇（明治二三）年から一八九八（明治三一）年に経済学主任教員として活躍した。法律科ではジョン・ヘンリ・ウィグモア（一八六三―一九四三）が教鞭をとり、一八九〇（明治二三）年から一八九

二（明治二五）年に法律科主任教員として教育にあたった。彼らの年俸は当初二三〇〇円で、それまでのロイドやカロザスなどへの報酬を考えれば、大きな決断を有した事業だったろう。この布陣によって「大学部」を設置し、慶應義塾は新たな一歩を踏み出した。一方、「當時大學部の教師は殆ど外來の講師」[119]で、このときの日本人教員のうち、大学部発足以前から慶應義塾で教員をしていたのは文科の門野幾之進（論理学）、理財科の小幡篤次郎（作文）、森下岩楠（日本作文）、真中直道（経済学）、永田健助（商業地理）の五名に過ぎなかった。[120]

新しく船出したこれらの三学科のうちで健闘したのは理財科だった。その理由としては、何よりも教育内容が当時の日本では得られないような高度な水準であったことが挙げられる。ドロッパーズは自らカリキュラムの構成から主要科目の講義まで行い、教育に精力を傾けた。[121]彼が離任すると、エノック・ヴィッカーズ（一八六九―一九五七）がアメリカより着任し、一八九八（明治三一）年から一九一〇（明治四三）年に第二代経済学主任教員として活動し、「経済学原理」、「近世経済史」、「財政学」など主要な科目のほとんどを一人で教えた。[122]この約二〇年間の継続的な教育が理財科の名声の基礎となった。その当時、東京帝国大学では経済学・経営学を専門的には教えておらず、この分野では高度な教育を受けられるのが東京圏では慶應義塾の他に高等商業学校（一橋大学の前身）しかなかったことも大きかっただろう。[123]

一方、法律科と文科は不振だった。一つには、それぞれの初代主任教員のウィグモアとリスカムの在任期間が短かったことが影響しただろう。ウィグモアは約三年間で離任し、リスカムも病気のため一八九三年に帰国を余儀なくされた。[124]高度な教育が定着するには時間が足らなかったといえよう。法律科についていえば、法律についての専門的教育の伝統が途絶え、[125]さらに①授業料が高額で、他の私立法律学校の約三倍相当であったこと、②文部省による「特別認可学校規則（明治二一年五月五日、文部省令第三号）」の適用を受けられず、司法官や行政官への官途を閉ざされ、代言人（弁護士）資格試験の道しかなかったこと、③入学試験がひじょうに難しく、外部からの受験者に不利であったとされ、法律科開設後一〇年間の総卒業生が三〇名に過ぎず、やはり私学であった明治法律学校の単年度の卒業生が約三〇〇名だったことを考えると、人気がなかったとされる。[126]

文科はさらに困難を極めた。リスカムが帰国したのち

は、前述のロイドが再び中心となり、そののちは幕末に開港を迫ったペリー提督の従孫でハーヴァード大学講師などを務めたトーマス・サージェント・ペリー（一八四五―一九二八）が主任教師を務めた。だが前述のように、卒業後の進路に事欠いていた上に、「文科」の教育内容は学生の求めるものと一致していなかった。ペリーには四名しか学生がおらず、「ほかの連中は経済学の勉強以外、何事も気に入らない」と嘆いたという。[127] 林毅陸は一八九二（明治二五年）に「正科」を卒業したが、同期卒業者二七名中で唯一大学部に進んだ者で、大学部は「物好きの行く所となつていたやうである」[128]と回顧している。

理財科などの改革に一定の効果はみられていたが、一八九六（明治二九）年に大学部廃止の議論が起こった。「慶應義塾独自の幼稚舎[129]（五年）プラス普通部（普通科三年・高等科二年）という、いわばリベラルアーツ的な教育課程を置いて発展してきたこの学校の卒業生のほとんどが、そのまま実業の世界に出て行き、新たに開設された大学部に進学して法律学・理財学・文学の専門教育を受け、専門的な職業に突こうとする者が一向に増えなかったためである」[130]。国家試験とはあまり関係がない民間分野に進む学生が多かった慶應義塾では、ある程度スキルを学び、人脈を築ければ「卒業証書」は重要ではなかったといえよう。「電力の鬼」と呼ばれて戦後の電力業界の基礎をすえた松永安左衛門（一八七五―一九七一）[131]のように、中途退学した者も多かったようである。第四期の評議員会は、中上川彦次郎の発議によって、大学部の廃止と、高等部の拡充を図るとして福澤に提案した。だが福澤の反対を受けて、[132]逆に大学部の維持拡張が決まり寄付を募ることとなった。[133]

いくつもの改革案が模索される中で、[134]慶應義塾の教育を立て直すためになされた試みの一つが留学生派遣である。学校財政のみならず、教員の確保が大きな課題であったためである。国家が強化しつつあった設置基準をクリアするだけでなく、前述のように、この頃には慶應義塾の学問そのものが問われていた。国費を背景として帝国大学は急速に声望を高めており、優れた教員を確保するため、留学生を外国に派遣して「新知識」を学ばせる必要があったのである。

最初期の福澤門下の留学生としては、中津藩士で幕臣の列に加わって一八六六（慶應二）年イギリスに留学した福澤英之助（一八四七―一九〇〇）、土佐藩の留学生として一八七〇（明治三）年に渡英した馬場辰猪や、や

はり草創期の教員を務め旧中津藩主奥平昌邁の留学に随行して一九七一（明治四）年に渡米した小幡甚三郎（一八四六―七三）[135]が挙げられよう。だが福澤と慶應義塾に強く関わるということになると、中上川彦次郎が、やはり塾長を務めることになる小泉信吉[136]とともに一八七四（明治七）年イギリスに留学したのを嚆矢とする。中上川が熱心に洋行を希望し、福澤に懇願した結果という。[137]留学資金は、小泉は出身であった紀州徳川家の支給により、中上川彦次郎は叔父である福澤の援助によった。さらに福澤の長男一太郎（一八六三―一九三八）[138]と次男捨次郎（一八六五―一九二六）[139]が一八八三（明治一六）年にアメリカ合衆国に留学した。一太郎はコーネル大学などで、捨次郎はマサチューセッツ工科大学で学んだが、彼らの留学費用は慶應義塾によるのではなく、福澤個人によって賄われていた。

次いで池田成彬が挙げられるが、彼の場合は慶應義塾の派遣であるかは微妙である。慶應義塾からハーバード大学へ留学生を送ることになった時、理財科では池田が候補に挙げられた。慶應義塾以外でも英国人などに学んだ池田は英語に堪能で、新任教員のドロッパーズにも評価されていたからである。奨学金があるということで彼は一八九〇（明治二三）年渡米したが、日米で齟齬があり、結局池田の父が保証人となって義塾から借金する形で留学費用を賄うことになったためである。[140]

一八九八（明治三一）年四月鎌田栄吉が塾長になり、同年九月福澤が脳溢血で倒れた。一度は奇跡的な回復を見せたものの、一九〇一（明治三四）年二月二度目の発病により福澤はその文明開化の先導者として歩んだ生涯の幕を閉じ、慶應義塾の基本方針は鎌田らに委ねられることになる。鎌田はすでに一八九六（明治二九）年から一年半ほど外遊し、欧米各国の教育・行政などを視察しており、留学生派遣が喫緊の課題であると考えていた。義塾財政の問題は長年の懸案であったが、このため年会費で寄付を募る維持会が発足した。[141]鎌田は有力な資産家から多額の資金を得る従来の形のみならず、英国の郵便制度からヒントを得て、一口五〇銭という少額で寄付を集めることにこだわった。福澤亡き後、慶應義塾をより多くの塾員で支えることこそ大切であると考えていたのである。[142]

これらの浄財に基づき「大学教育に最も困難を感ずるは適任の教師を得るの一事にして、本塾大学の如きも、始めは専ら外国人の外、世間の学者に依頼して用を弁じ

たれど、何時までも此有様に満足するを得ず」[143]として、一八九九（明治三二）年六名の外国留学生を派遣した。文科出身の川合貞一と気賀勘重（一九七三―一九四四：教員としては理財科で教鞭をとった）と法学科出身の神戸寅次郎（一八六五―一九三九）がドイツに、理財科出身の名取和作（一八七二―一九五九）と堀江帰一（一八七六―一九二七）がアメリカに先に出発し、六か月後に法学科出身の青木徹二（一九七三―一九三〇）がドイツに渡った。彼らの留学費用の捻出をめぐっても苦労があったようで、それぞれ名取和作と堀江帰一には四〇〇〇円、神戸寅次郎には三〇〇〇円、経済的に余裕があった川合貞一と気賀勘重には一〇〇〇円を支給した。しかし[144]金額的には、官費留学に遠く及ばなかったという。これは日本の私学の最初の試みで、「塾派遣留学制度」は、限られた財源によりながら一九三七（昭和一二）年までに総数六七名の留学生を送り出すことになる。[145]

一方で、この頃、すなわち日清戦争前後から日本の産業構造は変化しつつあり、[146]新しい状況に応じたスキルを備えた人材の必要性が高まっていた。しかし帝国大学だけではその需要に対応できず、また前述の受験雑誌にみられるように進学熱も高まっていた。尋常中学校の卒業者数は、一八九二（明治二五）年には七九二人であったものが、一八九五（明治二八）年には一五八一人、一八九七（明治三〇）年に二四五八人、一八九八（明治三二）年に四一七五人と激増した。高等教育機関への進学希望者も大幅に伸び、高等学校を例に取れば、入学志願者に対する合格者の比率は、一八九五（明治二八）年六六％、一八九六（明治二九）年五六％、一八九七（明治三〇）年四五％と低下し、以後も四〇％台で推移するという。また従来のように「士族」だけでなく、「平民」[147]も社会的上昇を目指して教育への志向も高めていた。

このような状況で、一八九八（明治三一）年慶應義塾大学部に「政治科」が新設され、さらに従来と異なり大学部卒業をもって「慶應義塾卒業」としたことで大学部在学者数は増え、慶應義塾は一九〇二（明治三五）年度以降は財政に剰余金が生じ、全体としての大学部の黒字経営が実現した。[148]前述の中上川彦次郎の三井系など、福澤が築いた三田人脈が実業界で強かったのも大きく影響したであろう。理財科は「わが国の実業界に、最も多くの人材を供給したのは、本校に敵するものなく、その実業界に於ける勢力は、実に帝大の遠く及び所ではない」[149]とされていたのである。しかし文科は在籍者がいないた

め、一九〇一（明治三四）年から一九〇四（明治三七）年にかけて一時廃止されることもあり、[150]打開が強く求められていた。

国家の関与がないままに、すでに帝国大学以外の、官立公立私立を問わず、数多く学校群が存在していたが、[151]新しい状況に応じて帝国大学を含めた学制改革が求められた。このような状況で新たな帝国大学などの官立学校の整備が進められたが、[152]議論を私学に限定すれば、一九〇三（明治三六）年に「専門学校令」が発布され、当時「専門学校」と呼ばれた「高等の学術技芸に関する教育を施す」学校の整備が図られた。この法令は帝国大学・高等学校（旧制）・高等師範学校以外のすべての高等教育機関を対象とし、入学資格は「中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スルモノト検セラレタル者」、修業年限は「三箇年以上」、「専門学科ニ於テハ予科、研究科及別科ヲ置クコトヲ得」などからなる一二条の勅令だが、「専門学校」の設置廃止は文部大臣の許可を必要とするとし、[153]国家の統制と監督の下に置くものであった。[154]同時に公布された「公立私立専門学校規定」は、認可を得るための諸条件として、適切な校地・校舎・教具などの物的条件とともに、教員資格、備えるべき書類や帳簿、学則に規定すべき事項などを細かく定めていた。これらの規定がどれほど厳格に適用されたかは定かではないといわれるが、実態において多くの私学が専任教員を有さず時間講師に依存していた。また「中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業シタル者」という入学者の卒業資格なども、基準を達成するのが厳しかったとされる。[155]

文部省の認可を受けるにあたり、「専門学校令」によって慶應義塾も大学部（三年制）に二年制の予科を設置し、[156]従来からの「リベラルアーツ」の伝統を生かしつつ、次第に大学部を中心とする一貫教育体制をつくっていく。[157]だが教員の基礎資格は帝国大学の「学士」と規定されており、[158]教員を集めることは喫緊の問題であったろう。のちに史学科の科目を担当する者たちに限定すれば、この頃に四名が予科教員として採用されている。史学科の主要教員となる占部百太郎（一八六九―一九四五）と阿部秀助（一八七六―一九二五）、哲学科の教員で長く「歴史哲学」を講じた船田三郎（一八八一―一九五〇）と文科の教員で一九二二年と二三年に史学科で「仏文学」の科目を担当した廣瀬哲士（一八八三―一九五二）である。

彼らの採用状況は若干たどることができる。占部は一

八九五（明治二八）年に文科を卒業し『時事新報』などのジャーナリズムの世界と、慶應義塾の教務係や商業学校さらに後述の『慶應義塾學報』編集主任などを行き来したのち、慶應義塾の教員に復職し、図書館長や理事も務めた慶應義塾生え抜きの人物で、一九〇六（明治三九）年に予科で「日本作文」を、一九〇七（明治四〇）年から「歴史」を担当した。[159] 阿部秀助は東京帝国大学学士でリースの女婿としても知られるが、福田徳三の紹介により慶應義塾に奉職し一九〇七（明治四〇）年より予科で「地理」と「歴史」を担当した。[160] 船田は一九〇七（明治四〇）年に予科でドイツ語と論理学を教え始めている。[161] 廣瀬は帝国大学仏文科卒業後に慶應義塾に奉職し一九三四（昭和九）年三月に退職して実業畑に転じた人物だが、一九〇七（明治四〇）年より予科でフランス語を担当した。廣瀬が慶應義塾退職後に回顧した記事[162]によると、彼は一九〇七（明治四〇）年の夏に初めて慶應義塾のキャンパスを訪れ、予科主任[163]の気賀勘重にその日初めて会い、「聊かも運動をせず、一人の競争者もなく、来ないかと云はれたまま、參りますと答えて、明治四十年の私の就職は、極めて簡單に決定した」と述べている。当時は「学士」が少なく、やはり有力な仲介者はいただろうが、売り手市場であったことが伺える。

高等教育を受けた人材の要請がさらに高まり、早稲田大学をはじめとする私立学校が次々と「大学」と称していくなかで、一九一七（大正六）年に学制改革を目的として「臨時教育会議」が設置された。第一次世界大戦下における欧米諸国の教育競争を直接の契機とし、大戦後における日本の国際的地位の向上と、国内外における社会・思想問題に対して国体の精華の宣揚を目的とし、小学教育、高等普通教育、大学教育および専門教育、師範教育、視学制度、女子教育、実業教育、通俗教育、学位制度の九項目について諮詢された。官僚や帝国大学関係者が委員の多数を占めたが、塾長の鎌田栄吉や日本女子大の成瀬仁蔵（一八五八―一九一九）などの私学関係者や、荘田平五郎などの財界人、のちには早稲田大学の平沼淑郎（一八六四―一九三八）なども委員として審議に加わって答申がなされ、これに基づいて一九一八（大正七）年「大学令」が公布された。[164]

高等教育に関しては、一八八六（明治一九）年の「帝国大学令」以降、法制上での大学は官立の帝国大学に限られ、有力私学で大学に準ずる内容・設備をもつ高等教育機関は「大学」を呼称しながらも、法制上は一九〇三

（明治三六）年の専門学校令による専門学校と位置づけられていた。だが、この「大学令」および「高等学校令」によって、従来の官立綜合大学である帝国大学のほかに官立の単科大学や公立・私立の各大学が認可された。私立大学は財団法人に限定し、その設立廃止は勅裁を得て文部大臣が認可するとし、大学の修業年限は三年（医学部のみ四年）、大学予科は三年または二年とした。入学資格は、大学予科・高等学校高等科を終えたものとし、大学予科の入学資格は中学校四年修了以上とした。また私立大学教員の採用には文部大臣の認可を要するとした。[165]

「大学令」の設置認可の条件は、同時に出された「大学設立認可内規」などによって「専門学校令」下においてよりも厳しくされ、基本財産や供託金、設備、専任教員の確保、基準にかなう入学者、高等学校（旧制）と同一基準による予科の設置など難問が課せられた。[166] 教員の基礎資格は帝国大学の「学士」と規定されていたが、戦前期を通して、帝大教授になるためには、二～三年の海外留学が必須として組み込まれていた。帝国大学の「学士」全員が、海外留学の機会に与れたわけではないことを考慮すれば、二～三年の海外留学は、帝大「学士」という条件より上位の教授就任要件だったと考えられるという。[167]

最初の六名の留学生たちに続いて、田中萃一郎らも海外に派遣され、のちには前述の占部らの四名の予科教員も慶應義塾によって留学の機会を与えられ本科教員となった。「学士」ではなかった占部は先に一九一一（明治四四）年八月から一九一三（大正二）年三月に留学して一九一一（明治四四）年に文科教員となっている。一方「学士」であった阿部は一九一〇（明治四三）年に理財科の教員となり一九一〇（明四三）年から一九一二（明治四五）年七月に留学し、広瀬は一九〇九年に理財科でフランス語を、一九一〇（明治四三）年に文科でもフランス語を教え、一九一九（大正八）年四月から一九二〇（大正九）年七月に留学し、船田は一九一四（大正三）年に文科で「歴史哲学」を教授し始め、一九二二（大正一一）年七月から一九二四（大正一三）年五月に留学している。維持会などを通じて寄付を募り、留学生派遣により教員の確保も進んでいた慶應義塾は早稲田大学とともに比較的余裕をもって設置のハードルをクリアできたとされる。[168]

いずれにせよ、慶應義塾は塾生と塾員・教員の情熱に支えられ、社会の要請に応えながら、政府の規定などの

困難を乗り越えて存続し発展したことは確かである。

Ⅲ　日本における歴史学の刷新

慶應義塾の史学科を論じるためには、帝国大学における歴史学の刷新についても論じなければならないが、本稿はすでにかなりの分量になっている上に、本論の趣旨から外れるため、この問題については簡単に触れるにとどめたい。

特筆すべきは、一八八七年にドイツ実証史学の祖であるレオポルト・ランケ（一七九五―一八八六）の系譜に連なるルードヴィッヒ・リース（一八六一―一九二八）[169]が帝国大学に招聘されて一八八七（明治二〇）年から一九〇二（明治三五）年にかけて帝国大学で教鞭を執ったことである。リースは日本におけるアカデミー史学の基礎をすえ、史料の重要性を教え研究の基礎となる史料編纂の重要性を説いて、ランケ流の文献実証的な歴史学研究法を導入した。さらに一八八九（明治二二）年一一月に史学会を漢学者重野安繹（一八二七―一九一〇）らとともに設立し[170]、西洋の学会誌にならって『史學會雑誌』を創刊して、実証的論文、書評、短信、彙報などを収録するという大きな貢献をなした。

リースに対する評価をめぐっては、たとえばリースの英語はドイツ語の癖が強くて理解が大変であったと言われることもある。だが日本史学の三上参次（一八六五―一九三九）の回想によれば、「当番が先生の書いた原稿を蒟蒻版[171]に刷り、それをもらって予め読んで置いて聴くのであったから割合に分かりよかった」とも振り返っている[172]。リースの演習は史料の批判的な利用により未知の事実を判定する方法を提示するなど、それまで日本には知られていなかった史学研究法を示し[173]、また日本には研究の基礎となる西洋の史料集がないことを考慮して日本史、東洋史、東西交流史を勧めることもあったという。実際、一八八八（明治二一）年の演習で取り扱われた島原の乱の研究では、日本側の史料だけでなく、オランダ商館やキリスト教会関係などヨーロッパ側の史料を集め、それらを比較検討しながら蜂起の経過から鎮圧の過程に至るまでを再構成し、成果は論文として学生の磯田良（一八六七―一九二四）に『史學會雑誌』に発表させている。この論考において磯田は従軍者の覚書や「平戸和蘭商館主の書状」なども史料として使用している[174]。

また慶應義塾図書館には数冊のリースの著作が所蔵されており、今回二冊に目を通した。一冊はルネサンス期

のイタリア戦争から、宗教改革、重商主義、啓蒙主義、フランス革命、自由主義、社会主義、ナショナリズムを扱った概説で講義ノートに基づく。[175] もう一冊は英国国制史を論じたもので、リースがドイツでイングランドの選挙制度についての博士論文を提出したように、このテーマは彼の専門分野である。[176] 前者の著作は概説的で「事件史」的な叙述だが、比較的客観的で、フランス革命などの記述には「参考文献」としてであろう、E・バークなどの研究が挙げられている。[177] フランス革命の時期の記述において「シュレジエンのリネン産業は年間九〇〇万円相当の商品を輸出していた」と円貨で示し、[178] グラン・サン・ベルナール峠については「海抜二四七二mで、飛騨の針ノ木峠と同じくらいだ」[179] と説明しており、日本の国情を踏まえ配慮に富んだ著作と考えられる。[180] また自由主義、社会主義、ナショナリズムを論じた第二四章は、それらを好意的に叙述しているように見える。[181] 後者の著作は、西暦六〇〇年から当時までを六つの時期に区分して編年的に英国国制史を説明したもので、詳細なものである。当時の日本の学問水準を考えるならば、否定的に捉えるべきではないだろう。

当時の学生らはリースが教える西洋の歴史学の方法論に大いに期待したのだろう。日本史学の辻善之助（一八七七―一九五五）は最初から史学を志望していたが、博言学科を志望して英語の代わりにドイツ語を学んだ。そのためドイツ語がよくできたというが、[182] これはリースの講義に備えたためであったかもしれない。[183] また東洋史の白鳥庫吉（一八六五―一九四二）が晩年に病床にあったときも、リースの講義ノートが常に枕元に置いてあったと孫が証言しているほどである。[184] 多くの弟子に強く影響を与えて敬慕され、晩年にリースの経済状況が悪いと聞くと弟子たちは訪れて援助をした。

Ⅳ　慶應義塾の史学科の成立

（1）田中萃一郎

そのリースは慶應義塾の文科で一八九一（明治二四）年から二年間「歴史」の教鞭をとった。初年度は二年生に週三時間ずつ、二年目にはさらに一年生を加えて計六時間、万国史を講じたというが、[185] 日本史に関するリースの質問に唯一答えられたのが田中萃一郎で、[186] 彼が慶應義塾にリース的な歴史学を導入したとしばしば語られる。田中には他にも伝説がいくつもあり、西脇順三郎（一八九四―一九八二）は「先生のお宅には実に沢山書物があ

るのに驚いた。（中略）私は学者ということに興味をもったのは全く田中先生からであった[187]」と懐旧している。毎晩田中は本屋に通って多数の書籍を購入して当時の金額で年間三〇〇〇円を費やし、本を大量に抱えて学内を歩くため、歩き方が「蟹の横歩き」と揶揄されることもあったほどである[188]。図書館予算が少なかった時期[189]において蔵書家の教員あるい関係者が逝去すると、その蔵書が慶應義塾に遺贈されることはよく行われたが、田中の死後一三七六〇冊の蔵書が図書館に寄贈されている[190]。その田中萃一郎を、直弟子の松本信廣（一八九七―一九八一）は「慶應義塾の史学科をつくった人物」と述べている。それはどのような意味においてなのだろうか。田中の歴史観などについて検討する必要があろう。

だが、その前に大学部において「歴史」という教科がどのように当時教えられていたかに触れなければならない。福澤諭吉の長男である福澤一太郎が短期間担当したこともあったが、華々しく伝えられるリースの二年間のちは、リースの愛弟子で、前述の「島原の乱」を『史學會雜誌』に掲載した磯田良が一八九一（明治二四）年から一八九三（明治二六）年まで文科で担当した[191]。磯田はのちに東京高師教授となって中等教育用の教科書をいくつも執筆する人物だが、当時はまだ弱冠二四歳の青年であった。続いて、記録上では家永豊吉（一八六二―一九三六）が一八九一（明治二四）年から一九〇〇（明治三三）まで文科で歴史を講じたことになっている。家永はその生涯が詳らかになっていない面も多いが、一八九〇（明治二三）年にアメリカ合衆国のジョンズ・ホプキンス大学で「日本における立憲政治の発展」という論文で博士号を得て、早稲田大学などで講義をしていた人物である[192]。彼には『万国史綱　上下』という歴史学に関わる著作[193]があるが、その共著者として元良勇次郎（一八五八―一九一二）の名前が記載されている。元良もジョンズ・ホプキンス大学で学位を取得し、一八九〇（明治二三）年に帝国大学文科大学教授となるが、心理学者として名を成した人物であり、『万国史綱』も普通の西洋史の概説書である。英語力を評価された人選で、歴史学についての深い見識はなかったかもしれない[194]。田中は「確か三十一（一九九八）年頃から豫科で *Fischer, Outlines of Universal History.* か何かを講ずることに改めて、本科の歴史を廃することになった。その後三十七（千九百四）年に文學科（文科）を復興した時、第一學年に國史の一科を置いたが、これも一ケ年で休講することになつ

た（カッコ内は筆者による）」と振り返っている。[195]「歴史」が高く評価されていた慶應義塾の初期とは異なり、当時はこのような状況に陥っていたのである。

では田中萃一郎の生涯を簡単に述べてみよう。[196]彼は一八七三（明治六）年伊豆の素封家に生まれた。父鳥雄は政友会の代議士を二期務めたという。一八八四（明治一七）年田中は幼稚舎に入学し、一八九〇（明治二三）年大学部に進み、一八九二（明治二五）年に第一回の学生として大学部文科を卒業した。一時帰郷して教員を務めたが「間居して書を讀む而も唯時間を消するのみ得る處なし。家君見て曰く郷土偉人の傳記なりと編集せよと」[197]言われて『近古伊豆人物志』（一八九八年）を著したが、本格的に歴史学に専心すべく上京した。動機の一つは日清戦争と「其後につゞく三国干渉、列強の中国に於る勢力範囲の分割と極東の危急を告げる状勢」[198]であったという。そして一八九九（明治三二）年予科ならび普通部教員となり、一九〇五（明治三八）年五月から留学することになった。

田中の留学をめぐって、ほとんど同じ時期に留学を命じられた堀切善兵衛（一八八二―一九四六）は「歴史などというものは、小学校か中学校で教えればいい学問で、大学で研究するものではないと考え」、「貧乏な慶應義塾に財布の底をはたかせて、歴史のような詰らない学問を勉強させるために欧州三界まで留学生を出すとは何事か」と力み、歓送会の席上で「経済学のような高尚で、しかもむつかしい学問を私のような浅学菲才の青二才にさせ、歴史のような安易で、しかも、あまり実際の役に立たない学問を学才優れた先輩の田中さんのような人にやらせるとは、どうも腑に落ちない」とまくし立てた。それに対して、田中は「堀切君が歴史の重要性をお認めにならないとは驚き入った次第である。同君の専攻される経済学に取っても、歴史が如何に重要であるか。ドイツその他の経済学界で、歴史学派が勢力を得つつあることをどう御覧になるか」と論駁したという。[199]

逆風も吹く船出を経て、田中はイギリス、ドイツ、フランスで研鑽に努め、ライプツィヒ大学でカール・ランプレヒト（一八五六―一九一五）に師事した。そして一九〇七（明治四〇）年一二月に帰国後、慶應義塾大学部文科教授に就任している。また学内では一九一〇（明治四三）年から一九一五（大正四）年まで「大学部予科主任」、一九一六（大正五）年に「大学部予科教務主任」、一九一七（大正六）年から一九二一（大正一〇）年まで

「大学部予科主任」、重複しながら一九二〇（大正九年）より「大学予科主任」という重責を十数年にわたって果たしていたが、一九二三（大正一二）年保養先にて五一歳の若さで急逝した。

田中萃一郎には多くの著作があるが、[200] 政治学・政治評論と、歴史学という二つのタイプに大別できる。歴史学に関しては短い論文が多く、まとまった著作としては二〇代で書き上げた『東邦近世史』（上巻は一九〇〇年、下巻は一九〇二年）とドーソン『蒙古史』の翻訳（一九〇九年）の二点がある。研究をまとめる意向はあったが、急逝ゆえに叶わなかったと伝えられる。それらの歴史学に関する論考には、歴史研究法に関するものがいくつかある。ではまず彼の歴史方法論について取り上げてみよう。

田中については、前述のようにリースの影響を強く受けたとされる。リースの名がはっきりと示されているのは、今回調べられた限りでは『東邦近世史』の「自序」においてである。「世界史の東洋に於ける開展の顚末を知るは最も今日の時勢に於て必要なるものあらむ。撰者の目的は即ち其大を本邦一般人士に紹介せんとするにあり。而も撰者もと史才と史筆とを具備せず手腕志望と相一致する能わず主題の一致なくんば科學的に歴史の研究なす能わずてふドクトル、リース先生の講義を回想する毎に本書に對して憮然たり」[201] という箇所である。田中は「科学的に歴史に取り組め」というリースの教えに沿えなかったのではなかったかと恐れているのである。

彼の歴史研究法を見てみると、確かにそこにはリースの刻印がはっきりと表れている。留学前の一八九九年に著した「歴史新教授法の一例」において、田中は、教育の「良果を収め得可きは獨逸のSeminariumに行はるゝ事久しく今や歐米と云はず至る處に行はるゝ史料研究的教授法なり」という。そして「余輩が本題の初に於て史料研究的教授法と云ひしは即ち學生に以上の史料の一種若くは數種を與へ之に對して自家獨創の研究によりて批評を加へしめ而して之に付きて學生相互の間に論難する處あらしめ幷に教師よりも注意を與ふるにあり」とし、続いてリウィウスの史料に基づいた課題をアメリカのシェルドンという人物の教科書に基づいて出している。[202] これは帝国大学においてリースが行った方法と同じと言ってよいだろう。「史学研究法」の講義は「毎週四時間でありそのうち二時間を筆記に他の二時間を原書の講述にあてられた」と一九一六年に卒業した鈴木錠之助（一八

八九―一九二四）がその様子を伝えている。[203]

学生数が少なかったため、当時の講義について弟子の間崎万里（一八八八―一九六四）は「史学科の最初の教授は田中萃一郎先生と阿部秀助先生が主で、他は借りもので他科と合併で授業を受けた。他科の中でも政治科との合併が一番多かった。史学科自身も上下合併授業であったが、政治科の二年制の科目は上下合併授業で、今年は二年、三年、来年は三年二年と授業を繰り返し行った。林（毅陸）先生の欧州近世外交史の如きはその一例であった。史学科はいわば寄生虫のような存在であったから僕の前年の人と後の人とでは科目の違う事があった。（中略）今の選択科目制ではなかったが、頗る融通性があった。その代り採った科目はみな必修になった。（中略）（田中は）史学科では史学研究法と東洋史を支邦の白文でよませ、政治科では主たる科目である最近列国政治史を講じていられた[204]（カッコ内は筆者による）」と述べている。「史学研究法」では漢籍や、前述のような洋書をそのときの状況や学生に合わせて取り上げていたのであろう。

しかし、これゆえに田中が単なるランケ的な実証主義者と断じるのは性急だろう。彼はつねに貪欲に本を集め

読み、新たな動向を摂取しようとしているからである。田中に大学部で列国政治史とドイツ語を教わった小泉信三（一八八八―一九六六）は、田中のドイツ語力について「自修に依て得たものらしく、本を讀むのを聞いてゐると其發音は何國語にも似てゐなかつた、強いて云へば一番日本語に近かつたらう。否な發音許りではない。熟字、譯解などにも可なり自己流があつたと思ふ」と評しているが、一方で「一頁乃至數頁に書かれてある事の意味を（少々誇張すれば）一瞥して摑まれるのには實に驚かされた」と述べている。[205] これについては間崎も「先生は書物の消化も早かつた」[206]と証言している。

事実、田中が書評などに取り上げた研究は何か国語にも及ぶ。たとえば、ボリス・チチェーリン（一八二八―一九〇四）のロシア語による政治学史を紹介し、[207]「欧文史籍便覧」ではライプツィヒ大学で得た情報を伝えようとしている。[208] 同じく一九一〇（明治四三）年には、この年に刊行されたグスタフ・ヴォルフ（一八六五―一九四〇）の『近世史研究案内 *Einführung in das Studium der neueren Geschichte*』の紹介も行っている。[209] 現在と異なって洋書の入手に時間がかかることを考えれば驚くべき速さであり、また内容もよく消化しているように見

える。さらに田中は多くの中国などの研究、たとえば劉知幾（六六一―七二一）の『史通』なども読み高く評価した。歴史方法論において、エルンスト・ベルンハイム（一八五〇―一九四二）などの西洋の歴史方法論を用いながらも、独自の歴史方法論を模索していたのである。これは同時代の坪井九馬三（一八五九―一九三六）の『史學研究法』（一九〇三年）[210]などとは大きく異なったアプローチだという。

田中が目指したのは、一つには東洋に立脚した視点と言っていいだろう。その点で興味深いのが田中が二十歳代で著した『東邦近世史』である。内容もさることながら、まず『東邦近世史』に付せられた三点の序文、すなわち鎌田栄吉、井上哲次郎、那珂通世による序文、また副島種臣の題字が鍵であると考える。鎌田のものは、当時予科及び普通部の教員となっていた田中にとっては、いわば上司にあたる人物によるものであり、小規模であった慶應義塾ではさほど不思議ではなく、内容も特に取り上げるべき点もないように見える。だがのちの両者の関係を考えると、すでに田中が鎌田に高く評価されていたことを示していよう。

井上哲次郎の序文をめぐっては、その経緯が若干わかる。かつての同級生で先に慶應義塾に奉職していた川合貞一は、田中が「故郷で書き上げた「東邦近世史」の原稿が大體出来上がつたといふので、それをもつて東京へ来た。話の具合では、何でも井上哲次郎氏に會いにきたといふやうなことでした」[211]と振り返っている。松本信廣も「故郷に於て此資料を纏められ、その原稿をたづさえ、卅一年四月頃上京され、当時の著名な学者井上哲次郎に之を見せ、同氏を初め、那珂通世、鎌田栄吉の序文、副島種臣の題字を添えて『東邦近世史』上・下巻（卅三年六月、卅五年一二月）として丸善より刊行された」と述べている。[212]

このことは井上側の記録によっても裏付けられる。序文を送った経緯について、井上は「序」において「頃ろ田中萃一郎君偶々余が寓居を訪ひ、其著東邦近世史を示して曰く、請ふ爲めに序を作れと」と求められたと述べている。[213]井上哲次郎はこの時期の日記『巽軒日記』を残しているが、明治三三（一九〇〇）年三月二三日には「松平直亮、上田万年、田中萃一郎来訪す」[214]とあり、同年四月一五日「辻善之助、平山勝治、田中萃一郎、斎藤木、川島庄一郎来訪す」、同年四月一六日「川島庄一郎に筆記を送り、田中萃一郎に序文を送る」[215]と記している。

これらは序文執筆依頼に関わるものであろう。田中が『巽軒日記』に登場するのは、あとは明治三三年八月五日「田中萃一郎、小室龍之助、境野哲来訪す」[216]と、明治三五年一二月一四日「村上龍英、田中萃一郎、清水金右衛門来訪す」[217]だが、これは日付から考えて、それぞれ上梓された上巻と下巻を進呈に行った際であろう。この時期の日記にはこれ以外には登場せず、どうやら田中と井上のあいだには特別な交流はなかったように見える。[218]

ではなぜ田中は、敢えて井上に序文を願ったのだろうか。これについては当時井上哲次郎がどのような人物と見なされていたかを考慮に入れる必要があろう。井上哲次郎は「日本主義を唱えて、キリスト教を排斥」するなど右翼的な政治イデオローグとして理解されることが多かったが、最近は評価が変わってきているようである。[219]同時代的に考えると、井上哲次郎は最高の知識人と見なされていた。たとえば田中萃一郎がのちに史学科に招聘した山路弥吉（愛山）（一八六四―一九一七）は一八九三（明治二六）年に「天下の人、指を學者に屈すれば必ず井上哲次郎君を稱し、必ず高橋五郎君[220]を稱す。吾人は幸にして國民之友紙上において二君の論爭を拜見するを得たり。井上君拉甸語、伊太利亜語、以斯班牙語を引證せらるれば高橋君一々其出處を論ぜらる。無學の拙者共には御兩君の博學ありと見えて何とも申上様なし。（中略）二君の博學は感服の至りなれども博學だけにては餘り難有くもなし。勿論こはくもなし」と、批判的ながら、ラテン語、イタリア語、スペイン語を駆使する井上哲次郎に対する当時の評価の一端を伝えている。[221]さらに井上は「東洋思想史」という構想を立て、西洋の哲学を前提とした上で、西洋人にはできないようなインド・中国・日本の思想を総合した「東洋」の思想史を展開しようとした。結局、「東洋思想史」は刊行されなかったものの、一八八三（明治一六）年頃の講義ノートはいくつも現存し、ノートというかたちで流布していたとされる。[222]

井上は『近世東邦史』の「序」において「東洋史の研究は困難中の困難なるものなり。是れ東洋史に關しては整備せる史籍の極めて僅少なるが爲めなり。（中略）抑々東洋史の研究に缺くべからざるは、支那の史料を利用すること是れなり。此事たる西洋の學者に取りては、至難の事業たらざるを得ざるが故に、我邦人自ら進んで、東洋史の研究を遂げ、以て學界の缺陷を補ふの任に當らざるべからずなり。果たして然らば東洋史の研究、豈に

啻に我邦人に裨益すといふのみならんや」と述べ、東洋史研究の意義を推賞し、さらに「余其の内容如何を見るに、支那、印度、安南、緬甸等より南洋諸島の歴史に至るまで、略々之れを略述して其要領を得たり。世の東洋史を研究せんと欲するもの、先ず此書を讀まば、其梗概を一瞥するを得ん」と評価している。[225] 漢籍だけでなく、やはり洋書を駆使して東洋の歴史を叙述しようとした田中萃一郎にとって、井上哲次郎は一つの目指すべき理想であったように見えるが、その井上に評価されたのである。

もう一つの那珂通世の序文も興味深い。那珂は当時を代表する東洋史家で、代表作の『支那通史』（一八八八―一八九〇年）は漢文で書かれた宋代までの中国通史ではあるが、東西交渉史については漢籍だけでなく欧米文献を用いた点で画期的な内容とされる。那珂はさらに一八九四（明治二七）年に歴史教育を「国史」「東洋史」「西洋史」に三区分すべきという提案を行っていた。その「東洋史」とは「支那を中心として東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くもの」というが、「中国の史書を主軸に日本・朝鮮の古典を批判的に分析して、東アジアの国際関係の歴史を明らかにし、さらに中央アジア、インド、イスラム圏をも含めた全アジア史の体系を構築しようとする」雄大な構想を抱いていたのである。[224]

那珂は『支那通史』の続編を書こうとしたが、「資治通鑑」や正史である「元史」の史料としての質に疑いを持ち、いわゆる『元朝秘史』の存在を知り、独学したモンゴル語の知識を駆使して、晩年はその訳業に没頭し、一九〇七（明治四〇）年一月『成吉思汗実録』として翻訳を完成させた。[225] 那珂も慶應義塾出身で、田中を号によって「我友田中金嶺」[226] と呼んでおり、二人にはかねてより交流があったと推測できよう。[227] 田中の歴史分野におけるもう一つの代表的業績であるドーソン『蒙古史』の翻訳（一九〇九年）について、松本信廣は、田中は那珂の「意図をつぎ、四十二年にドーソンの「蒙古史」の訳述を刊行した」と記している。[228] 強い影響関係があったのであろう。

さらに興味深いのは、那珂通世の校閲、桑原隲藏（一八七一―一九三一）の編著で一八九八年『中等東洋史』が刊行されていたことである。桑原はその序において東洋史を定義して「東方亞細亞に於ける民族の盛衰邦國の興亡を明にする一般歴史にして、西洋史と相並んで、世界史の一半を構成する者なり」と述べている。[229] これは

『近世東邦史』と通底する構想と考えられる。だが桑原の『中等東洋史』も漢籍だけでなく欧書も利用して、それまで試みられてこなかった「東洋史」を論じることを目指しているが、一方で紀年法としては「皇紀」を採用し、西域やモンゴルとの関係を若干論述するにとどまり中国史が中心であった。それに対して田中の『近世東邦史』は、紀年法として「西紀」を採用して、一四九八年「欧人通商の初期」から一九〇〇年頃までの東洋の形勢を論じ、中国だけでなく、日本、インド、インドシナ、南洋を対象とし、使用した和漢籍、新聞雑誌、欧文書籍を「引用竝參考図書」として明記している。これにはリースが伝えた西洋の歴史方法論も影響していよう。訂正第二版扉裏の「撰者識」[230]（明治三六年六月一一日付）を読むと批判も厳しかったようだが、田中にとっては渾身の野心作であったろう。

また重要であると筆者が考えるのは刊行者の「東邦協会」である。東邦協会とは「明治二十四（一八九一）年五月に設立され、その目的は、「小は以て移住貿易航海の業に參稽の材料を与へ、大は以て域内の経綸及び国家王道の実践に万一の補益を為し、終に東洋人種全体の将来に向つて木鐸たるの端を啓く」にあり、事業としては規約に、東洋諸邦および南洋諸島に関する地理・貿易・兵制・植民・国交・近世史・統計を講究する」[231]団体で、当時の名簿を見ると田中自身も会員であった[232]。那珂は「東邦近世史序」（一九九〇（明治三三）年六月付）において「大陸で異変があると聞く。対岸の火災のように見ることはできない。大陸において日本は一定の利権を得たが、かの地は多く、利は遺されている。だが東洋に出ると外国人に先制されている。それは彼らが東洋の事情をよく知っているからである。一方、我々は通じていない。本書を使うならば、東洋事情に通じることができるであろう」という趣旨を漢文で述べている[233]。実際、東邦協会は『東邦近世史』下巻について「最近五十年間に於ける東南洋の政變を組織的に敍述せるもの、實に經濟家、軍人、學者必讀の書なり」[234]と広告して、同時期の一九〇〇（明治三三）年九月には『東邦小鑑』[235]という東洋および南洋に関する地理・政治・制度についてのマニュアルも出版している。『東洋近世史』ではなく『東邦近世史』という書名であるのは、東邦協会の後援を得て会頭の副島種臣による題字を戴いたためであり、日清戦争から日露戦争にかけての状況を抜きにしては考えられないだろう。

先に述べたように、田中が歴史学を志した「動機の一つは日清戦争と「其後につゞく三国干渉、列強の中国に於る勢力範囲の分割と極東の危急を告げる状勢」[236]であり、田中も「時代の子」だった。戦後になって、松本信廣は田中の歴史観について「「歴史は重に戦争と商業との記録なり」（再販岩波文庫版による）という書き出しは、文化史の盛んになった今日吾々の意表をつくものがあるが、列強の帝国主義がアジア、大洋洲を席捲していた当時日本人として氏の如き史観を抱くことは無理ではなかった」[237]と述べている。

田中は西欧からの歴史学に強く影響され、考証は必須と考えながらも、単なる実証では飽き足らなかったのであろう。「史学の考証というのは必要であるが、あまりこまかいことばかり研究していると世間の人が興味を感じない、史学は死学となって詰らぬものであるという批難をうける。私の見る所に依ると即ち人類の進化の大法を研究してその間に法則を認めていく」と述べ、国家の重要性を強調したとされる。歴史がなければ政治に根がなく、また政治がなければ歴史に果実が無いと説き、「国家を主として人事の変遷を研究していくのが史学の本分」であり、歴史家であると共に政治学者でもあらんとした[238]。一九〇八（明治四一）年に理財科を卒業した三辺金蔵（一八八〇―一九六二）によれば、田中萃一郎は教科書であるSchwillのHistory of Modern Europeを非常な速さで訳し、追いついていくのが困難で、「欧州最近の情勢まで私たちに知らせようとして、その時々のニュースをノートにとらせられた」といい[239]、福澤諭吉の講義をどこか彷彿とさせる。

前述のように、明治の最初期には「文学」に政治が含まれていたが、東京大学の「政治学及理財学科」が一八八五（明治一八）年に文学部から法学部に移されたように[240]、この頃に文学の概念は変わろうとしていた。文科卒業の林毅陸が大学部政治科の教授となったように、田中は政治文学の両科に教授を兼ね、一九一九（大正八）年推されて法学博士となり、一九二一（大正一〇）年に国家学を東京商科大学に講じている[241]。それゆえ慶應義塾大学法学部政治学科は田中萃一郎を「政治学科創設の教授の一人」とし、英国憲政史を専門とする卜部百太郎もそのように見なしている[242]。

そして田中は政治に理解が深く、関心も強かった。川合貞一は「おそらく先考の鳥雄さんが、政友会で有力な地位を占めていた関係で、政友会に知己が多かった[243]」と

述べている。また前述の堀切善兵衛は田中が予科主任を務めている頃に理財科主任を務め、のちに代議士となったが、田中は「一面非常に學究的な方であり、又一面非常に政治好き」と評し、第二次西園寺内閣で慶應義塾出身の山本達雄が大蔵大臣になると、その幕下の代議士が要るということで堀切が出馬することになった。だが地方政界の実情を知り止めようとしたが、田中に奮起するよう奨められて決意し、その後も選挙（選挙区は福島）のたびに応援演説に来てくれたと回想している。[244] 当時の慶應義塾の塾長や教員には政治家となる者が多く、塾長経験者だけをとっても門野幾之進（衆議院議員・貴族院勅選議員）、鎌田栄吉（貴族院勅選議員）、林毅陸（衆議院議員）がいるが、晩年の弟子である今宮新（一九〇〇―一九八二）は「もしなお幾ばくの長寿を保たれたならば、その学問の完成はいうまでもなく、或は勅選議員として、または代議士として、その政治的理想を実現する機会にめぐまれたものと思われる。先生もまた父君の後をうけて、後年は議政檀上に於ける活躍を期するところがあったかも知れないのである」[245] と述べている。

このような田中は多くの政治論考を著し新聞雑誌に寄稿したが、議論のために議論する傾向が無いではなく

「直學逆世」と評され、[246]「偽悪的傾向」があったという。[247] 林陸毅も、田中は「社会各般の問題に對して一家透徹の識見を抱き、観察鋭利、論斷明快、其の所信に向つて邁進するや、千萬人と雖も吾れ行かんの概があつた」[248] と述べている。一九二〇（大正九）年に出版された『普選運動と病的思想』（三洋堂、一九二〇年）において、田中は激しく普通選挙に反対し、社会主義などを「病的思想」として痛罵している。田中が急逝すると、ある新聞記者が「「先生は上杉博士のやうな國家主義であつたんですね？」と半ば肯定的な質問をした」[249] という。上杉慎吉（一八七八―一八二九）はドイツに留学し天皇主権説を主張して、晩年には軍部と結び、右翼団体の有力な保護者となった人物だが、彼に比せられることもあったようである。

だが田中は教え子に対して「普選反對にしても「これは自分一個の考へで、學生諸君が普選主義であることは一向構うはない」と云ふ調子であった。此點に於て博士は、あくまで自由主義の人であって、私共の敬服に堪へぬ所である」[250] というが、死去直後の『三田評論』三一五号（一九二三年）に寄せられた教え子たちの追悼文には田中の政治面における発言に関して弁明しているものが

いくつか見られる。「著作目録」によれば、一九一二（明治四五）年頃から政治時評が増えており、一九二二（大正一一）年からは『實業』に多くの政治評論を掲載している。[251] 小泉信三も没後一七回忌の『三田評論』において「博士が雑誌『實業』の主筆などになられた事に對しても少くとも私一個は同様の遺憾の念を禁じ得ない。『實業』に掲げられた田中博士の諸種の文章は、断じて博士の學殖と識見を持たざるものであつた。『實業』經營者[252]が博士を其主筆に迎へた動機の何であつたかを私は知らぬ。併し若し其人がよく故博士を知る人であつたならば、何故に博士をすゝめて其本領の研究に其力を傾注せしむことに心を用ゐなかつたか[253]」と惜しんでいる。

また田中の「台湾人同化論」などを読むと、そこには強い進歩史観、国家意識が感じられる。田中は、台湾の人々の民族主義を否定し、当地での学校教育を改良しなければならず、「偏狭なる愛國心を懐抱するものは到底異民族を抱擁してより大なる日本國民を陶冶するの資格なきものなり」として、「より大なる大和民族の陶冶」を望むとしている。[254] 弟子の松本芳夫（一八九三―一九八二）は、田中は「ぼくの解するところではドイツ流の保守的國家主義者」ではなかった。先生の中心思想は「やはり塾の傳統的思想であるイギリス流の自由思想であつたやうに思う[255]」と評価しているが、これは上杉慎吉のように「國家主義」思想を奉じてはいないが、二〇世紀的な意味の「自由思想」ではなく、自由貿易帝国主義を唱えてアロー号戦争などを主導したパーマストン（一七八四―一八六五）のような一九世紀的「自由思想」を説いていたというのかもしれない。

三田史学会が発足した際の「慶應義塾と史學の研究法―三田史學會發會記念講演―」において、田中は「歴史を蔑視した啓蒙主義、唯理主義、實理主義の行はれた慶應義塾に於て史學の研究の起こらなかつたことは固より怪しむことを要せぬ[256]」と述べている。これは一見すると、啓蒙主義歴史家の代表者である福沢諭吉を暗に批判しているようにも見える。だが以上のことを踏まえると、田中萃一郎の歴史へのアプローチは、方法論的には福澤などのやり方に満足していないが、主張においては福沢諭吉の系譜上にあったといえるのではないだろうか。

一方で、小泉信三は、田中は授業中は素っ気なく「自分はしやべる。聽く度い者は聽くが好い」という趣きだったが、自ら教員室に出入りするようになると「同僚の間では最も戯謔を喜び、最もよく笑ふ人」であることを

発見したと述べているが、[257]今宮新も「教室ではこわい先生も、個人的に接すると実に親切で穏やかな先生であった。眼鏡の中から細い目をさらに細めて、冗談も言えば、ひやかしもする本当にやさしい先生であった。この接触によって先生は門下生を指導し、門下生は先生の人格学殖にふれて、多くの学生が先生の下に集ったのである。先生の趣味は書籍の蒐集と門下生の指導にあったと言っても過言ではないだろう」[258]と懐かしんでいる。他にも、田中の毅然さと同時に優しさを回想している者が多い。

間崎万里は、田中は「健啖よく談ぜられた」[259]と証言している。田中は自らの主張においては頑なで「博士の歴史観は、時流を抽んでてをり、當代流行の歴史哲学よりも寧ろ舊式の史観に同情を持つてをつたが之を學生に強ふると云ふ様なことは曾つてなかつた」[260]という。田中は学生たちとともに多くの史書を読んだ。間崎万里は授業において「ランプレヒトの what is history?（日本における文化史なるものの流行する端緒）、バックルの英國文明史、メーンの古代法、クーランジュの古代市邦論、ヘーゲルの歴史哲學、チェスタトンの文學上のヴィクトリヤ時代」などを相前後して講ぜられたとし、[261]鈴木錠之助とは「チイグラア（Ziegler）教授の第十九世紀獨逸思潮史」を講読している。[262]昼休みには史学科の学生を集めてベルンハイムの *Einleitung*（『歴史とは何ぞや』の原著）の講読を行ったともいう。[263]

松本信廣は「本科進学当時に、なにか新設課目の希望はないかと質問され、人類学をという自分の希望をいれ、移川子之蔵氏（一八八四―一九四七）が講師として委嘱された。（中略）塾に推薦されたのは同郷の池田成彬氏であったらしい[264]（カッコ内は筆者による）」というように、歴史学へのさまざまなアプローチを認めていたようである。前述の「歴史新教授法の一例」では、「史料とは歴史家が其研究に際して使用する根本の材料なり」として、「要するに之によりて以て過去に對する吾人の智識を推究し得可き過去の遺物は皆史料なり」と、文書だけによる歴史学を退けている。[265]

また記録された名称には差異があるが、「史学科旅行」が行われていた。一九一二（大正元）年一〇月が第一回で、[266]「春秋の三田史学会旅行も伊木さん（後述）を中心として各地の古文書を採訪研究する主目的をもっており、会員達の親交を深めるに功献した」という。[267]これは一九八〇年代まで実施されたという。筆者は一九七七年の入学だが、すでに史学科にはひじょうに多数の学生

が在籍していた時代で、西洋史学専攻の学生であった筆者には記憶がない。ただ『史学』の記述などを見ると、専攻に関係なく教員は参加していたようで、また西洋史学専攻の恩師たちからも史学科旅行の思い出を聞いたことがある。

そして「凡そ史學に志したものはたとひ東洋史なり西洋史なり國史なりの一科を専攻するにもせよ、必ず常に自分は廣く歴史を研究するものだといふ決心を持つてゐなければならない。汝の専門は何であるかと問はれたならばいつでも唯だ歴史を研究してゐると答へるだけである、敢て東洋史だ西洋史だ國史だとは言はない」というのが田中の持論だったという。[268] 学生は個々の専攻に属するのではなく「史学科一本だけであり、国史も、東洋史も、西洋史も学修しなければならず、しかもそれらはすべて必修であり、選択を許されなかった。（中略）史学科が今日のように三専攻に分かれたのは、新大学令によって文学科（文科）が文学部（一九二〇年）になってから（カッコ内は筆者による）」[269] で、専攻制移行時（一九二八年）にも史学科は三専攻に分たれることに抵抗したという。[270] 現在、文学部で、他専攻の科目を専攻内規で卒業条件科目としている専攻は他にはない。史学科を一体のものとして構想したのは田中萃一郎の歴史方法論と連動したものであり、現在に至る慶應義塾の史学科の在り方をよく規定しているといえよう。

（2）史学科の成立

田中萃一郎は「学風」という意味での慶應義塾の史学科をつくっただけではない。「人的な構成」という意味でもつくったといえる。前述のように、学制の改定に応じて、私学は専任教員の確保ならびに教員資格などの条件を考慮しなくてはいけなくなっていた。一九一八（大正七）年の「大学令」によって条件は厳しくなり、優れた帝国大学の「学士」を見出して採用するだけでなく、慶應義塾出身者を養成し、帝国大学の「学士」と同等程度の資格を得させるため二～三年の海外留学の機会を教員に与えなければならなかった。この仕組みに田中は強い影響力を有したのである。

田中は一八九九（明治三二）年予科ならび普通部教員となり、一九〇五（明治三八）年からイギリス、ドイツ、フランスに留学し、一九〇七（明治四〇）年に帰国後に慶應義塾大学部文科教員に就任した。そして機を同じくして文科に史学科設置の動きがあり、一九〇八（明治四

一）年の第七期評議員会で決議され、一九一〇（明治四三）年度から、文科は文学・哲学・史学の三専攻の編成となっている。[271] これが田中一人のイニシアティブであったかは定かではないが、この一九〇五（明治三八）年の時点で大学部において「史」という科目を担当しているのは、他には理財科に属し経済史および経済学を担当し、学生たちに大きな刺激を与えていた福田徳三[272]（一九七四―一九三〇）と、政治科に属して外交史を担当する林毅陸である。田中が文科の「歴史」部門を背負い、再建を指導したのであろう。

慶應義塾の「歴史」を立て直そうとする際に、田中が招いた最初の二人の教員が山路愛山と幸田成友（一八七三―一九五四）である。このうち愛山は明治・大正時代のジャーナリストで、人権運動と平民の啓蒙のために多くの歴史書を残したが、現在入手が比較的容易な著作の中では『豊臣秀吉』『徳川家康』などの人物史が多い。愛山は民友社に入社して『国民新聞』の記者となったこともあり、徳富猪一郎（蘇峰）（一八六三―一九五七）的な歴史家と見なされがちである。しかし、彼の著作を読むと、田中萃一郎との類似点も見られるように考える。愛山は北村門太郎（透谷）（一八六八―一八九四）との「人生相渉論争」で有名となったが、この論争は一八九三（明治二六）年の『頼襄を論ず』において「文学は事業である」と主張した愛山に対して、透谷が「文学は虚業である」とし、愛山を反動と批判して「純文学／美文学」を主張したことから始まった。[273] 愛山は、たとえば「吾人が文章は事業なりと曰ひしは文章は即ち思想の活動なるが故なり。思想一たび活動すれば世に影響するが故なり。苟も寸毫も世に影響なからんか、言換ゆれば此世を一層善くし、此世を一層幸福に進むることに於て寸功なかつせば彼は詩人にも文人にも非るなり」[274] と述べており、これは福澤らの伝統的な「文学」観と近いといえるだろう。

慶應義塾での愛山の講義は「他科にも公開したので聴講者も多かった。（中略）考古学や民族学のまだない時代に、日本民族原初の由来を、古文献伝説の上に求めて考証し、異色ある示唆多き講義であった」[275] という。やはり文科出身で愛山の講義を聴いた小沢愛圀（一八八七―一九七八）は「当時の独立評論主筆、山路愛山先生の日本史も、官僚軍閥の栄えつつあった時代にあって、まったく自由な態度の研究で、約半世紀を過ぎた終戦後に於て初めて聴くを許され得るような内容の講義であった」[276]

と振り返っている。小沢の記憶は時系列的に若干合わないこともあるが、愛山の講義が強い印象を与えたことは確かであろう。

また講義ではなく「三田史學講演大會」での講演だが、「近世史之虚談」と題して愛山は「近世史とは時代に近き歴史の謂にしてそは多く虚談なり。されば次期時代になれる前代の歴史は多く信ずるに足らずとの前提より其例證として源平盛衰記に現はれたる清盛、徳川時代になれる史上の石田三成の如きは共に其肯綮を得たるものに非ずと述べ、維新史を引きて一々其例を擧げ、要するに近世史なるものは文書に依らずして多く古老の言により て編みたるものなれば虚談たるを免れず、是れ個人の記憶心象なるものは目擊せる事實と大に相違する所のものなるに依ればなりと論じ、所詮信頼すべき史實の編輯は時代を達觀せる眞正の史家に俟つの外なしと結ばれたり」[277]とし、史料吟味の重要性をやはり説いている。

愛山は一九〇七（明治四〇）年に『現代金権史』を発表しているが、これは明治期日本の資本主義の発展について、その時々の事件を織り交ぜながら社会的経済的要因、さらに財閥などにも触れて、独自の歴史的展望を提示している。西洋的な歴史研究法を習得はしていないが、単なる時代遅れの「史論」とは片づけられないように考える。[278]さらに慶應義塾は多くの政商を輩出したが、それは福澤の志ではないとし、『現代金権史』で一貫して「福澤先生」と呼び、福澤の影響を強く受けたと愛山は述べている。[279]だが愛山の在任は二年間で終わる。

これ以降、田中は帝国大学の学士たちを教員に選ぶようになる。最初の学士が幸田成友である。幸田は一八九六（明治二九）年に帝国大学を卒業し、同大学院に入学してリースに師事した。きわめて優秀で学問に対して真摯であったが、[280]大学のキャリア的には不遇だったようである。[281]一九〇二（明治三五）年から『大阪市史』編纂主任となって八年間活動し、その成果である『大阪市史』は模範的な市史と今日でも評価されている。一九〇九（明治四二）年幸田成友は京都帝国大学講師を嘱託されたが、翌年慶應義塾大学部教員に就任した。翌一九一〇（明治四四）年には「学士」で史料編纂所所員であった伊木寿一（一八八三―一九七〇）が「古文書学」の講師として招かれた。伊木は「時間講師」であったが、準専任のような位置にあり、「史学科旅行」などを行い、[282]戦後まで長く同科目を担当した。[283]翌一九一一（明治四五）年には理財科の福田徳三が「日本経済史」、政治科の林

毅陸が「外交史」、松本彦次郎（一八八〇―一九五八）が「時代史」「名著研究」を担当した。松本彦次郎も「学士」で、慶應義塾の大学部教員を経て、その後六高教授、昭和六年東京文理科大教授となる人物で、鎌倉新仏教を専門とした。田中が西洋史と東洋史を担当し、塾内の専任者の助力を得て、日本史では実力ある若手「学士」を起用するというよく考えられた布陣と言えよう。

政治に対する関心が強い田中は、また学内の政治に通じていた。川合貞一は「学校内の「ポリチーク」でも田中君に聞くとよくわかる政治に關して非常に關心を有していた」[284]と述べている。「塾の教務の中最も事件が多く、治めるに難しいのは予科主任の職と目されるが、行政手腕に富む先生はよく之を乗切り、長年月に及んだ。一九一七（大正六）年に予科の向軍治氏が辞職を勧告されたが、学生たちはその留任を求めた」[285]。向軍治（一八六五―一九四三）はドイツ語教員だが、放言癖があり、たびたび筆禍・舌禍事件を起こしたことでも知られる。福澤が「向さん何も遠慮する所はない思ひ切ってやりなさい。遣り損なった處が多寡の知れた塾だ。國家を潰されては困るが塾位は何日潰しても差支はない」と言ったというほどの人物である[286]。向にたいする処分撤回を求める松本信廣らの予科生たちに対し、田中は「もう処分は決まったので、留任させられない。留任を求めるならば、自分の不信任を求めよと決然とした態度を示して断った」という[287]。

田中の実力は広く認められ、名取和作は「鎌田先生が亡くなられて[288]、その後を福澤一太郎さんが塾長をして居つて、誰か塾長を拵へなければならぬという際に田中君が隨一の候補者になつた。田中君は性格も良いし抱負もあり技量もあり塾長として立派な人だから一つ塾長にしようといふのでサウンドして見た。所が田中君は直情徑行の人で思つたことは遠慮なく言ふ。それだから妙な所に敵があつた。これは田中君を塾長にしては慶應義塾がゴタ〳〵する。塾がゴタ〳〵することは避けた方がいゝといふので、それで林君を塾長にした」と述べているほどである[289]。

田中の学内での地位は給与にも見てとれる。一九一二（明治四五）年度の給与が分かっているが、傾向として、慶應義塾によって海外留学に派遣された者が、塾内で高い役職を占めていることもあって、高給を得ており、また予科よりも本科を担当する者が待遇がよい。その給与表によれば田中は年間給与として二〇二八円を得て、全

教員のうちで八位を占めている。外国人教員五名を除くと、法律科主任を務める神戸寅次郎の二二九二円、気賀勘重の二二二八円に次いで日本人三位である。理財科主任の堀江帰一は一九八二円で田中に次ぐ九位、文科主任と普通部主任を兼ねる川合貞一は一八〇〇円で一〇位、政治科主任の林毅陸は一六二〇円で一二位であった。もちろん担当時間数や単位時間当たりの給与なども考慮しなければいけないが、前に触れた阿部秀助の八二〇円、船田三郎の八一二円、廣瀬哲士の六三六円の倍以上となっている。[290]

この田中の力の源泉は、予科主任として一〇年以上にわたってその運営を取り仕切っていたことにあろう。この時期に大学部の学生数が増加しつつあり、本科と予科を合わせた大学部の学生数が一九〇三（明治三六）年の六八二名から、一九二六（大正一五）年には五九八五名と八倍以上に増加した。本科と予科を区別すると、一九〇三（明治三六）年では「大学部本科」全体で二四九名、予科が四三三人であり、一九二六（大正一五）年では「大学部本科」全体で二八四九名、予科が三一三六名だった。本科が拡張し予科が占める割合は下がったもの、なお予科は大きな比率を占めていたのである。[291] 世間での評価において慶應では理財科に対する評価が図抜けており、学生数も多かったが、予科はそれと拮抗する数を有し、慶應義塾の経営において大きな比率を占めていた。

また当時の規定によれば、教学部門の管理運営組織が確立した一九一七（大正六）年以降、予科の人事について、予科主任は「教員の任免に関しては塾長に稟議するものとす」るとあるが、予科の「教員会議が教員の任免について諮詢を受ける」ことはなかった。大学部本科それぞれの教授会を構成する教員には教員人事権を認めたが、大学部予科およびその他の付属機関では現職教員に教員人事権を認めず、塾長と主任の間で教員の任免手続きが完結していたとされる。[292] 一八九八（明治三一）年以来塾長の任にある鎌田栄吉とは、田中は若い頃から自らの著作に序を依頼できるほど親密であった。鎌田との連携によって、田中は、予科と普通部などにかなりの人事権を行使できたと考えられよう。

一九〇三（明治三六）年と一九一二（明治四五）年の予科教員は専任教員百パーセントで、時間講師の採用は避けられていたとされるが、[293] 次第に時間講師も任用されたのであろう。松本信廣は、田中が予科主任として赤門など出身の英才を多く登用したとし、その可能性として

哲学の安倍能成（一八八三―一九六六）、小山鞆絵（一八八四―一九七六）、伊藤吉之助（一八八五―一九六一）などを挙げている。[294] のちに文部大臣も務めた哲学者安倍能成は一九一六（大正五）年から一九二〇（大正九）年に予科及び本科で講じ、東北帝国大学教授となる小山鞆絵は一九一七（大正六）年から一九一九（大正八）年にやはり予科及び本科で講じている。東京帝国大学教授となる伊藤吉之助はもっとも長く一九一七（大正六）年から、少なくとも記録が確かな一九四三（昭和一八）年まで予科及び本科で授業を担当した。伊藤は、普通部で一九二一（大正一〇）年から一九二二（大正一一）年に歴史を教えていた飯田忠純と共訳で、チーグレル（Theobald Ziegler）『独逸思潮史』（国民図書、一九二六年―一九二七年）を上梓している。これは鈴木錠之助が田中と講読した本である。

また史学科の教員には、時間講師として前述の移川子之蔵がいる。彼はハーバード大学で博士号を取得し、一九一九（大正八）年から一九二五（大正一四）年に慶應義塾で「人類学」を「外講師」[295]として講じたのち、台北帝大教授となった。田中が急逝した翌年である一九二四（大正一三）年には日本における西洋文化史の創始者である大類伸（一八八四―一九七五）や民俗学の祖である柳田國男（一八七五―一九六二）などが招かれ、特に後者は五年間にわたって教え続けた。その後も、多くのすぐれた研究者が時間講師として招かれて、史学科に刺激を与えていくことになる。[296] 他にも、前述の松本彦次郎、東京商科大学に転じた川上多助（一八八四―一九五九）、[297] のちに京城帝国大学に転じた松本重彦（一八八八―一九四九以降）[298] などもいるが、専任であるか時間講師であるかはっきりとは分からなかった。

時間講師以外にも、田中が採用・養成した教員にはいくつかのタイプがあるようである。一つは帝国大学卒業者で最初は予科教員として採用され、その後に史学科教員となって定着するタイプである。その初期の事例は橋本増吉（一八八〇―一九五六）である。橋本は帝国大学の白鳥庫吉の弟子で、阿部秀助が留学に行く際、後任として一九一〇（明治四三）年予科で「経済地理」を担当する教員として慶應義塾に奉職し、一九一二（明治四五）年史学科の講師を兼ねた。橋本は慶應義塾の教員として定着し、田中亡き後の史学科において重きをなした。[299] 阿部秀助は文科で講義を行ったが、前述のように福田徳三によって採用され理財科に属したので、厳密にいえば

田中が養成したとは言えないだろう。

もう一つは帝国大学出身者で、慶應に採用されたが、のちに転出するタイプである。このタイプは多くいるが、代表的な例が加藤繁（一八八〇―一九四六）である。加藤の採用及び経歴については、『加藤繁先生小傳』[300]に記述があり、一九一七（大正六）年「慶應義塾には当時予科に空席があり、予科長の田中萃一郎が頻りに適任者を物色していたが、福田徳三がこれを聞き、内田銀蔵と諮って、推薦した」結果であり、加藤は講師として予科で漢文を、学部の史学科で支那古代史を講じた。学生時代に教えを受けた書家の西川寧（一九〇二―一九八九）も、田中萃一郎が加藤繁の『古田制の研究』（一九一七年）を推賞したと加藤繁から聞いている。[301]最初加藤は慶應義塾と宮内属を兼任したが、一九一八（大正七）年慶應義塾大学部講師の専任となり、一九一九（大正八）年に大学令が改正されると翌年五月教授になっている。一九二五（大正一四）年東京帝国大学文学部講師となり、一九二七（昭和二）年に福田徳三の推薦によって『唐宋時代に於ける金銀の研究』で学士院賞・恩賜賞を受賞し、一九二八（昭和三）年東京帝国大学助教授就任とともに慶應義塾大学教授を辞任したが、その後も講師として出講し続けた。『史学』の字様は加藤繁の選定によるとされるが、松本信廣は「加藤繁さんに選定をお願いした所、氏は当時の予科学生西川寧君に依頼し、北魏張猛龍の碑文拓本から選ばれた」と述べている。[302]草創期を築いた幸田成友も、慶應義塾での講義を後年まで長く担当しているが、一九二二（大正一一）年から東京商科大学助教授兼予科教授となっているので、このようなタイプに含むことができるかもしれない。当時、東京の私学から地方の帝国大学などへの転出は多かった。官学の威信が高く評価されていた上に、東京帝国大学に重点的に投資されていたため、地方の帝国大学は教員スタッフ確保のために優遇措置を講じ、留学の機会を早めたり、俸給を一、二号高くすることが行われていたという。[303]

また慶應義塾出身者で教員となったタイプがある。予科教員となり予科に留まった者としては、たとえば竹内左馬次郎がいる。彼は大学部文科二回生で、卒業後は故郷岡山に戻って私立中学閑谷黌に勤めるが、台湾総督府国語学校を経て、その後慶應義塾予科教員となり、[304]一九〇八（明治四一）年から一九二六（大正一五）年まで教鞭を執った。他にも幾人もの事例を見ることができる。

もう一つが慶應義塾出身で、留学などの機会を与えら

れたタイプである。たとえば前述の卜部百太郎で、彼は留学の機会が与えられて本科の教授となった。さらに草創期の学生たちの多くがこのタイプに属する。初期の史学科の学生数は少なく、松本芳夫の回想によれば、第一回（一九一三年）から第五回（一九一九年）までの五年間は毎年卒業生は一名ずつしかおらず、教員の方が多かったという。[305] だが、そのうち第二回生の間崎万里、第四回生の鈴木錠之助、第五回生の松本芳夫が学校に残り、その下にも松本信廣や日本史の今宮新がいた。そのうち間崎万里は一九一四（大正三）年に普通部教員、一九一八（大正七）年予科教員となり、一九二三（大正一二）年より史学科で教え初め、一九二五（大正一四）年九月から一九二八（昭和三）年三月に留学し、翌一九二九（昭和四）年より教授となっている。[306] 松本芳夫は一九一九（大正八）年に商工学校教員、一九二三（大正一二）年に予科教員となって、一九二八（昭和三）年から一九三〇（昭和五）年一二月に留学の機会を与えられ、この一九三〇（昭和五）年に文学部助教授となっている。[307] 松本信廣は一九二〇（大正九）年普通部教員となり、一九二四（大正一三）年から一九二八（昭和三）年九月留学し、一九二九（昭和四）年に文学部助教授となっている。[308]

今宮新は一九二三（大正一二）年に商工学校教員、一九二六（大正一五）年予科教員となり、一九三一（昭和六）年五月より一九三三（昭和八）年八月まで留学し、この一九三三（昭和八）年に文学部助教授となっている。[309] 前述の橋本増吉は史学科で重要な役割を果たしたが、留学の機会はなかったようである。

もっとも、留学も必ずしも順調にはいかなかったようである。間崎は「文科は科目が多く学生は少ないので、経費が多くかかるというので留学生の如きも自費で行っている者を後から留学生に直すという風で、僕の行くときには、横から勢力のある学生の人が割り込んで来て、年次を後らし、旅費の如きも一部自弁する様な始末であった」[310] と述べている。それでも、このようにして養成された間崎、松本芳夫、松本信廣は三田史学科の「三羽烏」と呼ばれ、[311] 前述の間崎以下の四名全員が戦後に文学部長を務めることになる。

日本の総人口は一九二五（大正一四）年時点で五九七三七〇〇〇人と明治初期から比べると倍増し、[312] 前述のように進学熱も高まるという状況において、専門学校令が公布された一九〇三（明治三六）年には四四名であった「慶應義塾大学」卒業生数は、一九二六（大正一五）年

には八〇八名に急増している。[313] このような好条件を背景にして、史学科の学生数も増加している。これは最初期の卒業生である間崎の発言でたどることができる。田中没後十七年の追悼会（一九四〇年）において「大正二（一九一三）年に初めて卒業生を出して以来十一年を經過致して居りますが、當時は毎年史學科に新入學生があるといふ譯には參りませず二三年缺けた年がありますが、それでも先生（一九二三年没）御在世中に合計一九名の卒業生を出して居ります。ところがその中三名が亡くなつて居りますので、今日まで生存して居りますものは十六名でありますが、その中十名は塾内に勤務致して居りまして、一人は教務の方に、他は全員教員をやつて居ります（カッコ内は筆者による）」とし、田中没後の十七年間に「卒業生を出すこと十五回、その数は九十名」で、「卒業生の総数は前後を通じまして二十四回、百九名」になるとしている。そして卒業生のさまざまな進路を挙げたのちに「今日塾内で教師及び事務員として勤務致して居ります者が二十四名に達するのであります。それでありますから先ず出身者の四分の一は塾内に於て直接塾の爲に盡しておるのであります」[314]と述べている。

新たに生まれた助手制度なども用いて、塾外の俊英を招くと同時に自前の教員養成をしながら史学科は成立・成長していったのである。

V　三田史学会と『史学』

（1）明治期日本における「学会」の始まり

これまで述べてきたように、慶應義塾は長い歴史を有するがゆえに、その歩みをたどると、たびたび現在とは異なる概念に出会うことがある。三田史学会に関しても、同じような面があるように思える。

『精選版 日本国語大辞典』で「学会」を調べると「①学術研究の機関。アカデミー。②互いに学習するための組織や会合。研修会。③学術研究の推進、学者相互の連絡などのために組織された、専門研究者の団体。または、その会合」[315]とあり、これらの語釈は大学関係者にとって耳慣れたものであろう。

その起源を問えば、学会は「アカデミー（academy）」「サロン（salon）」など西洋の「ヴォランタリ・ソサイエティ voluntary society」に発するといえよう。これらは一五世紀頃から俗人の識字率が向上し、知的活動の余裕が増すにつれて生まれたもので、「学芸の共同体 la République des Lettres」を形成した。この表現はフラ

ンスの思想家ピエール・ベール（一六四七―一七〇六）によるもので、彼は書評誌*Nouvelles de la république des lettres*（一六八四―一七一八）を創刊し、さまざまな権威を批判して宗教的寛容と思想の自由を説いた。[316] この動きに代表されるように、世俗的（secular）親密（intimate）愛好的（amateur）な性格を有し、教会とは離れた自由な議論の場を提供するいくつもの団体が創られ、活版印刷という革命にも助けられて、そこでは国際的な交流が行われるようになっていた。啓蒙主義に代表される一七世紀西洋の特徴の一つである。

だが、もし学会を「世俗的（secular）親密（intimate）愛好的（amateur）な性格を有し、自由な議論の場」とするならば、これは西洋に限られた現象ではなく、江戸期の日本にも見られたといえよう。たとえば木村蒹葭堂[317]（一七三六―一八〇二）の活動や交流を挙げることができる。また福澤諭吉が影響を受けた幕末の儒者たちの直接あるいは書面を通じた交流も、実態において近かったといえよう。それゆえに文明開化によって導入された「学会」に、多くの伝統的な知識人も入ることができたのであろう。

一方で、科学が進展するにつれて、科学の発展が国力に影響を与えると見なされるようになった。そのためフランス財務総監ジャン・バティスト・コルベール（一六一九―一六八三）の政策にみられるように、国家を背景とするアカデミーが形成されるようになる。一六六〇年にロンドンで設立された「王立学会（the Royal Society）」や一六六六年に設立された「フランス科学アカデミー（l'Académie des sciences）」はそれらの最古の試みの一つである。[318] 権力の関与は増し、学会は自由な議論と、有用性と統制という二極に引っ張られていた。

日本における最初の学会が何であるかは議論の分かれるところであろう。もし福澤諭吉も参加した一八七三（明治六）年の「明六社」とするならば、その発起人が森有礼（一八四七―一八八九）であるように、国家主導の近代化のための機関であったかもしれない。そうでなく、政府の意向をそれほど反映しない学会としては、一八七七（明治一〇）年に創設された「東京数学会社」があろう。幕末・明治期の洋算家神田孝平（一八三〇―一八九八）と和算家柳楢悦（一八三二―一八九一）を初代総代として、洋算家だけでなく和算家など当時の数学関係者をほとんど含んだ組織である。機関誌『東京数学会社雑誌』を発行したが、しばらくして和算関係者の多く

が脱退し、その後は大学関係者が中心となったという。[319]近代化を目的とする明治以降の学問世界にとって、この動きはある意味では避けがたかったかもしれない。

東京数学会社の経緯が示すように、学会は次第に大学関係者が主となり、特に帝国大学学士の交流組織となっていく。自然科学系が先行し、たとえば一八七九（明治一二）年には「東京化学会」や「東京大学生物学会」などが設立された。[320]一八八一（明治一四）年に東京大学の卒業生等が設立した「東京薬学会」もそうであった。[321]ついで人文社会系の学会が続き、明治一七年に「哲学会」が、明治一六年に「法学協会」が、明治二〇年に「国家学会」が東京大学関係者を中心に設立され、それぞれ機関誌『哲学会雑誌』『法学協会雑誌』『国家学会雑誌』を創刊している。[322]

歴史学についていえば、一八八九（明治二二）年一一月に史学会が設立され、学術雑誌『史學會雑誌』が創刊されたのを最初とする。これは前述のようにリースの提案に対して、重野安繹が賛同して始まったものである。西洋において歴史学単独の学会が設立されたのはそれほど古くなく、英国の「王立歴史学会（the Royal Historical Society）」は一八六八年に設立、「アメリカ歴史学会（the American Historical Association）」は一八八四年に設立されたばかりであった。[323]また歴史専門の学術雑誌についても一八五九年に *Die Historische Zeitschrift*、一八七六年に *la Revue historique*、一八八六年に *the English Historical Review*、一八九五年に *the American Historical Review* などが創刊されたに過ぎなかった。史学会と『史學會雑誌』の試みは先進的だったといえよう。

史学会は、東京大学の歴史研究教育部門がいくつもの系譜からなっていたように、東京大学の卒業生だけで構成されていたわけではなかった。漢学者の重野安繹が初代会長に就任したように、帝国大学設立以前に教育を受けた漢学者や国学者も多く名を連ねている。たとえ『史學會雑誌』第一三号の「史學會規則摘要」によれば「入會ヲ請フ者ハ會員ノ紹介ヲ以テ其本籍住所姓名年齢職業ヲ書記ニ屆ケ置クベシ○入會ハ會員ノ無名投票ヲ行ヒ出席會員ノ過半數ヲ得ルに非サレハ之ヲ許サス」[324]とあり、同号に付せられた「史學會職員會員姓名錄」には「博士」や「学士」だけでなく、多くの和漢学者や、田口卯吉（一八五五―一九〇五）や高瀬真卿（一八五三―一九二四）らの在野系の歴史家の名も見いだすことができる。その意味で、当時の日本の歴史学界全体を代表する横断

的な団体だったといえよう。

（2）慶應義塾における「学会」と雑誌

①「維持会」と『慶應義塾學報』『三田評論』など

同時に、三田史学会が慶應義塾固有の条件に大きく左右されていた面も否定できない。慶應義塾には、いくつもの先行する「学会 society/association」が存在していたからである。大別すると、慶應義塾と塾員・塾生を結ぶ団体である「維持会」の系列と、学生団体としての「学会」の系列である。いずれも慶應義塾の構成員を「社中」と捉える考え方に基づき、それぞれが『慶應義塾學報』や『三田評論』、『三田学会雑誌』などの雑誌を刊行した。これらに触れるのも迂遠ではあるが、『史学』が創刊される以前は、これらの雑誌にも歴史学関係の論考が掲載されていたことなどから、触れざるを得ないと考える。

時系列的に考えて、それら「学会」の共通の原型の一つと考えられるのが大学部設立以前の一八八三（明治一六）年にできた「文学会」であろう。これは福澤的な「文学」概念に基づいたもので、先輩の講演を聞くことを目的として、それをのちにまとめて『文学会雑誌』として第一巻を一八八三（明治一六）年四月、第二巻を同年六月に発行した。福澤諭吉、小幡篤次郎らを講師とし、内容も文学、経済学、植物学等にわたっていたという。[325]

一八九八（明治三一）年三月寄付金を元本とする基本金の利子収入によって大学部の教育を充実することを目指し、慶應義塾基本金の募集が行われた。[326] そして、募金活動に資するため『慶應義塾學報』が創刊された。その趣旨は「其精神抱負を世間に發揚するが爲にして所載の事項は福澤先生を始めとして同社先輩の論説談話又は内外學術教育の新設等を掲げ之に附するに本塾學事の景況塾員の消息移動等を以て毎月一回發兌して廣く世間に公にする事となしたり」とし、学ぶことは在学期間に留まるものではなく生涯にわたるものであるという福澤の考えに基づくとともに、当時はなかなか知りえなかった最新の外国事情や、塾外からも高名な学者の寄稿が掲載された。[327]『時事新報』は外信が多く高級紙と目されたというが、同じような戦略が伺える。さらに塾員の名簿や消息が伝えられ、また寄付者の氏名と金額も細かく記載されている。

前述のように、福澤の没後、慶應義塾は一九〇一（明治三四）年「慶應義塾維持会」を結成して、廃校の瀬戸

際を脱した。卒業生である塾員とのコミュニケーションを密にして財政支援を募り、また維持会員たちに何らかのメリットを与えるものとして、門野幾之進の発案により、すでに発刊されていた『慶應義塾學報』を会員に送ることが定められた。[328]『慶應義塾學報』第一号の奥付では、発行所は「交詢社内　慶應義塾學報發行所」にあり、活動の主体が交詢社か慶應義塾かはっきりしないが、一九〇〇（明治三三）年一二月刊行の第三四号には発行所を慶應義塾内に移転する旨の広告が載せられている。その後、学術評論雑誌として市販を目指す動きがあり、一九一五（大正四）年第一二〇号から『三田評論』に改称され現在に至っている。後述の学生団体が発行し休刊となっていた『三田評論』と同一名称であるが、『慶應義塾學報』では一般受けがしないという理由であったという。[329]現在の『三田評論』がインターネット等でそのコンテンツをほとんど公開していないのも、掲載された情報が維持会会員に対する返礼という性格をなお有しているからであろう。

②学生団体とその雑誌：『三田評論』『三田学会雑誌』など

もう一つは、学生団体としての「学会」の系譜を受け継ぐものである。慶應義塾では、寄宿舎において教員と学生が集う会食などで教員と塾生の一体感が形成され、[330]さらに学生と教員、あるいは学生と卒業生の親睦を深める「学会」やクラブがいくつも誕生した。たとえば一八九五（明治二八）年には文科学生であった林毅陸らによって「（第一期）三田文学会」[331]が組織された。この活動は「林毅陸日記」によって知られるものだが、林らの卒業とともに振るわなくなったという。[332]一時的な団体で、活動の中心人物が留学や卒業などでいなくなると活動休止する性質のものであった。

純粋にアカデミックな活動を指向するのではなく、親睦を深め教養を高めることを目的とする他のクラブもいくつか組織された。一八九四（明治二七）年設立の「三田社交倶楽部」、一八九六（明治二九）年設立の「大学倶楽部」、少なくとも一八九九（明治三二）年には活動の記録がある「慶應義塾レクチュア倶楽部」などである。[333]これらの倶楽部は知名人を招いて例会を開いたが、たとえば「三田社交倶楽部」は大隈重信や末松謙澄（一八五五―一九二〇）らを演者とした。演者の一人である徳富蘇峰は一九〇〇（明治三三）年六月に「文学論」を展開して「純文学／美文学」を攻撃して「拍手大喝采」を得

ている。[334]

そして前述のように慶應義塾は一八九六（明治二九）年に「大学部」廃止を否決し、大学たらんと決意した。一八九七（明治三〇）年前後に行われた学制改革を受けて、慶應義塾ではさまざまに活発な学生の動きが見られた。一八九八（明治三一）年には学生自治を求めて「自治制委員会」がつくられ、一八九九（明治三二）年に機関誌の『三田評論』が発刊されているが、これは名称は同じだが、現在の『三田評論』とは異なる。この雑誌は慶應義塾の行政や人事に対する論難が激しく、ときに検閲当局からの検閲を受けながらも、次第に研究論文も掲載しながら一九〇八（明治四一）年一一月まで継続された。[335]

この動きと並行して、一八九七（明治三〇）年三月に理財科の学生および卒業生によって「三田理財学会」が組織されて、講演会や討論会が開催された。また法律科でも一八九八（明治三一）年頃から討論会が行われ、一八九九（明治三二）年五月には「大学部法学会討論会」が開催されている。[336] これらの動きに呼応して、一八九九（明治三二）年に「（第二期）三田文学会」が再興された。これも「純文学のみを研究する狭い意味での文学会ではなく、（中略）純文学は申すまでもなく哲学理学倫理学等の学理を探て見ようと云ふ広い意味での文学会」であった。[337] やはり福澤以来の「文学」の伝統を強く受け継ぎながら、学生が主体となり、文科が対象とする学問全体を傘のように覆う「学会」といっていいだろう。

一九〇九（明治四二）年に、それまで学生が発行していた『三田評論』を改組して『三田学会雑誌』が創刊された。[338] その際の三田評論社の「社告」には「學報は義塾經營上の機關なり。義塾金庫の報告なり。缺くべからず。されど純學術上の内容を充すに由なし」とし、それまでの『三田評論』の状況を反省し、「果然、茲に我社覚醒の時は來れり。即ち來年早々より義塾大學各分科の純學術機関として世に見え、毎月一回の定期刊行物」となすと宣言した。[339] その発行主体は「三田學會」だが、これは「三田法学会、三田政治学会、理財学会、三田文学会の総称」で、文科だけでなく三田全体をさらに傘のように覆う団体で、教員がリーダーシップをとった。実際、第一号の奥付を見ると、発行人は文科で国文学を教えていた神戸弥作（一八六六―一九二七）で、発行所は「三田學會」となっている。[340] そしてその『三田学会雑誌』初期の中心メンバーの一人が文科教授の田中萃一郎で、多くの論文を投稿し、第一巻一号では「會計監督」を務め、

第三巻六号より「編輯主任」と明記されている。のちに塾長代理や文部大臣を務める高橋誠一郎（一八八四―一九八二）はその指揮下にいた[341]。

この『三田学会雑誌』第一号（一九〇九年）に記載された「現計報告」を見ると、収入の約七割が寄付金（六三万円）と慶應義塾の補助（一〇万円）からなっていたことが分かる[342]。やはり資金面が大きな課題だったのであろう。『慶應義塾學報』第一七二号（一九一一年）に「義塾三田學會にては從來理財法律政治文學各科の研究機關として毎月一回三田學會雑誌を發行し來りしが十月發行の第五巻第四號より年四回發行の大册と爲し且主として經濟及政治に重きを置くことと爲せり叉執筆者は義塾教授のみならず一般知名の專門家にも依頼する筈、雑誌費は郵税共年一圓なり」と告知している[343]。そして『三田学会雑誌』第五巻四号（一九一一年）には「休刊の止むなきに至れり。（中略）茲に於てか月刊は一變して季刊となり、從來の巻數號數を繼續し、聊か面目を更新して讀者に見えんとす。（中略）故に敢て三田學會雑誌の舊倆は之を改めざるも、大方同志の公學たる慶應義塾の發行に係る本誌に協力を與へられんことは余輩の切望して止まざる處なり」との「小引[344]」が載せられ、編輯主任は理財科教授の高城仙次郎（一八八一―一九三四）に交代している。

そして『三田学会雑誌』第八巻二号（一九一四年）の「理財學會々報」に理財学会組織変更が告げられ「元來理財學會なるものは、堀切教[ママ]が未だ本塾塾生たりし頃同志の學生と共に、明治三十六年三[ママ]初めて組織したるものにして、其目的は純理經濟學を研究、時事問題を討議すると同時に時々講演會を開き、朝野知名經濟學者又は財政家を招聘して、其の說を聞く事にありき」だったが、その後振るわず学生の討論研究は行われなくなったと述べ、「飜つて三田學會雑誌を見るに、經費の都合上時々發行を停止し、明治四十三年ごろは會員組織の下に月刊雑誌たりしも、學生の入會は任意たりしを以て、經費問題の爲め、一時發行を停止し、其の後明治四十五年に至り、高城教授を編輯主任とし、裝丁を新にし、四季刊として發行を繼續するに至りぬ。然れども發行部數多からざりしを以て、常に經費問題の爲めに諸種の困難に遭遇したり。近來理財學生中に理財學會の組織目的を會得する者少なく且亦幹事も其の目的の常道を逸したるを知り、之を改正せんとの議論を生じたる所、三田學會雑誌を理財學會に於て經營しては如何との議論を生じたれば、本

會は理財科諸教授の賛同を經、會の組織を變更して、理財科學生全部を包含する會員組織のものとなさんとし、理財科學生の賛成を得、茲に新に會員組織の理財學會なるものを組織するに至りぬ」とし、理財学会は「經濟の研究を目的」とし、「理財科學生全部及び塾員有志よりなり前者を通常會員とし後者を特別會員」として会費等を定めている。[345] これ以降、なお歴史学や政治学の論文が初期には掲載されることもあったが、『三田学会雑誌』は季刊から月刊になり、理財科と理財学会の雑誌になる。

この動きは、財源問題だけでなく、日本の学術研究が発展するとともに、経済学に対する関心が高まってきたことにも関わるだろう。一九〇八（明治四一）年には年東京帝国大学に経済学科が、一九〇九（明治四二）年には商業学科が設けられていた。[346] さらに両者を統合して一九一九（大正八）年経済学部が組織され、森戸事件にともない創刊号だけで廃刊されたが一九二〇（大正九）年に経済学部機関誌である『経済学研究』が創刊された。そして一九二二（大正一一）年に改めて経済学部機関誌『経済学論集』が刊行されている。[347] 日本における経済学研究の中心と自負する理財科にとって、学術雑誌の刊行は不可欠であったろう。だが理財学会はその起源においては「学生学術団体」であり、学生と教員から構成されるという方針を現在まで維持している。[348]

（3）『三田文学』

同時に、この『三田学会雑誌』の改組には「（第三期あるいは第一期）三田文学会」が一九一〇（明治四三）年に組織されたことも影響していよう。

当時、文科はきわめて不振で、明治二五年から明治四二年までの卒業者累計が五一名に過ぎず、理財科の六一九名、法律科の一二〇名に遠く及ばず、明治三四年に最初の卒業生を送り出した政治科五一名と並ぶ数字であった。慶應義塾参事として内情に通じていた小沢愛圀は「塾の文科は物の数ではない。当時世間ではその存在する知る者がなく、塾内でも堀江教授等を初め廃止の論をなす者があったという」[349] と証言している。これは堀江帰一が留学から帰って理財科の教員となった一九〇二（明治三五）年、あるいは理財科主任就任の一九〇七（明治四一）年以降の発言であろう。

一方、慶應義塾がライバルと目す早稲田大学では商科と政治経済学科が多くの卒業生を送り出していたが、文科のなかで「最も特色もあり、勢力もあるのは、英文科

と哲学科とで、世間で普通に「早稲田の文科」といふ時には、この二科をさして居る」[350]という。当時英文科には自然主義の『早稲田文学』の旗頭である坪内逍遥や島村瀧太郎（抱月）（一八七一―一九一八）を擁し、哲学科では大西祝（一八六四―一九〇〇）が育てた金子馬治（筑水）（一八七〇―一九三七）らが活躍していた。つねに数百人のレベルで学生が在籍していたようである。[351]一方、慶應義塾で「外国語」学習ではなく、今のような意味での「純文学／美文学」が講じられるのは一九〇五（明治三八）年に詩人の野口米次郎（一八七五―一九四七）が「英米文学史」を、一九〇六（明治三九）年に馬場辰猪の弟である馬場勝弥（孤蝶）（一八六九―一九四〇）が文学科の教員に就いてからである。だが、その影響力は早稲田とは比較にならず、小沢愛圀は「済々たるたる多士によって自然派を標榜した「早稲田文学」は、わが文壇の一角に鬱然たる勢力を示していた。（中略）主任の川合先生に衷情を披瀝して塾の文科の改革と発展とを嘆願したが、なかなか埒はあかずに、一年経ってしまった」[352]という。

さらに早稲田に負けるなという思いには、野球をめぐる愛校心の過熱が影響していた可能性もあるかもしれない。一九〇三（明治三六）年に最初の早慶戦が行われたのを皮切りに、白熱した試合が続き、一九〇六（明治三九）年には不測の事態を避けるため第三戦を中止して、これ以降一九年間実施しないという事態が生じていた。[353]たかが野球というレベルではなかったようで、小沢愛圀は『三田文学』の始まりについて述べる際に、わざわざ「四十年（筆者：記憶で話しているための間違いだろう）は早慶戦で揉めぬいた年だと思うが」[354]として話を切り出しており、のちに永井壮吉（荷風）（一八七九―一九五九）も「わたくしは経営者中の一人から、三田の文学も稲門に負けないように尽力していただきたいと言われて、その愚劣なるに眉を顰めたこともあった。彼等は文学芸術を以て野球と同一に視ていたのであつた」[355]と憤っているほどである。体面においても、経営面においても、文科は危機的な状況であった。

文科のテコ入れをすべく動いたのが、石田新太郎（一八七一―一九二七）である。彼は一八九三（明治二六）年に文科を卒業し、その後陸軍士官学校や台湾総督府国語学校等の教員や教頭を務め、一九〇七（明治四一）年に大学部の教員となった。同年にその経験や識見を買われ、鎌田塾長の下で新設された「幹事」に就任した。幹

事とは「塾長を補佐し、塾務一半を処理する役職」で、その権限は大きく「塾長不在の時は其代理を為す」とされた。また一九〇九（明治四三）年に大学部各部と予科に主任（学部長に相当）が置かれると、「主任は塾長の命を承け幹事と協議し、担当部内に於ける教務に当るものとす」と規定されている。石田の業績は広範で、在任中に文科の学科課程を再編し、医学科創設に尽力し、大学令にともなう総合大学化に貢献した。[356]

石田は慶應義塾における「文学」を振興するため森林太郎（鷗外）（一八六二―一九二二）に相談した。[357] 鷗外は一八九二（明治二五）年に慶應義塾の審美学（美学の旧称）講師を委嘱され一九〇〇（明治三三）年まで講じていた。講師委嘱の前年である一八九一（明治二四）年から九二年にかけて鷗外は逍遥と「没理想論争」を交わしており、それが影響したかもしれない。すなわち記実（リアリズム）を重んじた逍遥と、理想（イデアリスム）を堅持した鷗外には基本理念の対立があったのである。[358] 当時、『早稲田文学』を中心とした「自然主義文学」に対抗して、帝国大学出身者を中心とする『帝国文学』などが力を増しつつあった。『帝国文学』は帝国大学文科大学の関係者による文学団体「帝国文学会」が編集にあたり、一八九五年一月から中断を含んで一九二〇年一月までに計二九六冊が発行され、ロマン主義もしくは反自然主義の拠点となった雑誌である。[359] 鷗外はそれらの運動の指導的人物の一人で、早稲田と対照的なカラーをつくるには最適の人物であったろう。結果として、慶應義塾伝統の「文学」とは系譜の異なる新しい血を導入して活性化しようとしたのである。

石田は鷗外を訪れ鷗外自身を招聘したが断られ、小沢によれば「三田の文科の中心となるべき人物の推挙方を鷗外先生に懇請した。鷗外先生は、然らば京都大学の上田敏（一八七四―一九一六）教授と協議の上適任者を推薦してもよいが、何人であろうと無条件で学校は承諾するの覚悟ありや否やを反問した。石田先生は私の生涯のうちで嘗て見たことのない程の果断の人であったから即座に応諾したという（カッコ内は筆者による）」。[360] 石田は鷗外の推薦を受け入れて、永井荷風らを招き、一九一〇（明治四三）年五月『（第三期あるいは第一期）三田文学』を発刊させた。

これに先立って一九一〇（明治四三）年二月一九日付けの『時事新報』には「慶應義塾大学にては昨年四月以来時勢の進運に鑑み理財、法律、政治、文科の各科課程

に夫れ〳〵改正を加へて現に新学制を実施中なるが殊に文科は英文科、哲学、史学の三科に分ち学生の志望に応じて研鑽に便ならしめ大に其発展を謀りつゝあり」と学制一新を伝え、鷗外らの顧問招聘、荷風らの教授就任、文学雑誌の刊行、さらに史学科の開講などを挙げたのちに「従て是迄は本科一年へ入学を一切謝絶し居りたるに拘らず文科に限り此際大に門戸を開放して相当の学力ある者は詮衡の上入学を許可して文学志望の学生を収容する筈なりと（傍点は筆者による）」としている。[361] 実際、一九一〇（明治四三）年三月二日の『時事新報』に掲載された「慶應義塾学生募集」には「入学資格　予科は中学卒業者文科一年は予科二年修了と同等以上の者」とあるという。[362] つまり文科だけ入学資格を大きく緩めたということになろう。

また荷風の招致には、父である永井久一郎（一八五二―一九一三）が慶應義塾にかつて在籍し、その後も鎌田栄吉などの慶應義塾の有力者たちと交友があったことも影響しただろう。[363] 塾当局の支援を受けて、荷風は高額の給与を許された。[364] また荷風だけでなく、小山内薫（一八八一―一九二八）や戸川明三（秋骨）（一八七一―一九三九）らの「反自然主義」の講師陣も招かれた。その衝撃は大きかった。「水上滝太郎」こと阿部章蔵（一八八七―一九四〇）は福澤の高弟で明治生命創業者である阿部泰蔵の四男で、『（第三期あるいは第一期）三田文学』創刊当時は理財科の学生であったが、荷風の登場によって「新しい世界が開かれた喜び」を感じ、「久しく鬱屈して居た自分の胸に、何かしら明い希望が芽を吹いて來た」[365] という。同じような喜びを久保田万太郎（一八八九―一九六三）も感じ「其時分の塾の文科といつたら、それはお話にならない位悲惨なものでした。本科と豫科とを合して學生の數がやうやく七人か八人―屋根裏の物置みたやうなところが教室で、其處に三四人の本科の學生が始終薄暗い顔をあつめてゐたのでございます。課目といつたら教育學と心理學とで萬事持ちきり、そこには一週に唯の一時間、馬場（孤蝶）先生の大陸文學の講義があるつきりでございました。（中略）豫科の二年になつたとき、急に世の中がかはつて、文科に大きな改革がありました。とにかく森（鷗外）先生と上田（敏）先生とが顧問といふことになり、永井先生の主宰で「三田文學」といふ雑誌が出るといふことになったのでございます。（中略）眞實に私どもはそのときなんだか夢のやうな氣がいたしました（カッコ内は筆者による）」[366] と述べてい

る。文科に新風が吹き、『(第三期あるいは第一期)三田文学』の部数は五〇〇〇部を超えて普通の総合雑誌を大きく上回ったという。[367]

その影響は他科にも波及したようで一九一〇（明治四三）年六月「近來本塾文學科頓に勃興し、就中純文學の發展は殊に顯著なるを以て同哲學科は稍遜色あるを見るに至りしが茲に同學專攻者十數人聊か察する所あって相結んで三田哲學會なるものを組織したり」[368]という。一方で、新しい試みは逆風を呼んだ可能性もある。慶應義塾では、福澤以来、「純文学／美文学」に対する拒否は強かったからである。荷風の回想によれば、『(第三期あるいは第一期)三田文学』第一号が刊行されると、掲載された三木操（露風）（一八八九―一九六三）の詩などをめぐって批判した新聞記事を「慶應義塾大学部教員室の壁にれい〳〵しく張付けたものがあつた。無論誰の業ともわからない。其の悪評は半年ばかりも張つたまゝになつてゐたが何時の間にやら又誰が取つつたとも知らず剥がされてしまつた」[369]という。また『(第三期あるいは第一期)三田文学』のほとんどの原稿は塾外の作家によるもので、多額の資金が投ぜられることに対する学内の反発もあったであろう。逆風は一九一一（明治四四）年に谷崎潤一郎の「颱（飈）風」のため二度目の発禁処分を受けてさらに高まった。[370]

『(第三期あるいは第一期)三田文学』は石田の主導権で生まれたと述べたが、石田自身が「純文学／美文学」を評価していたのか、それとも文科の学生数を増やすべく評議員会の意を体して行動していただけなのかはっきりしない。石田自身は『(第三期あるいは第一期)三田文学』一〇周年の際に「多くの人材を輩出して居つたにも拘らず、其当時尚文壇の上に活躍するの機運に到達しなかつたことは吾人の斉しく遺憾とした処であつた。而してまた義塾の学風としても有力なる実際家のみを養成するすることが決して目的の全部ではなく、深遠なる哲学の上に、幽玄なる芸術の上に等しく其基礎を築かなければなる筈である」[371]とその時の思いを振り返っているが、激しく石田を攻撃する人々もいるからである。

その急先鋒が水上滝太郎である。彼は『(第三期あるいは第一期)三田文学』を愛し、のちに一九二六（大正一五）年以降『(第五期あるいは第三期)三田文学』を物心ともに背負ったが、『(第三期あるいは第一期)三田文学』の休刊について、石田と思われる人物や塾当局を激しく批判している。これは一九一一（明治四四）年

「夢がたり評議員會」[372]および一九二六（大正一五）年の「三田文學の復活」[373]によく表れている。荷風も「理財科教授にして衆議院議員たる堀切善兵衛君は交詢社の或会合に於て永井荷風はいかん、中村春雨[374]を代りに入れろと遊説した事があった」[375]と実名を挙げている。

いずれにしても、福澤的な「文学」の伝統の強い慶應義塾において、荷風らの文学は想定外であった可能性は高かったであろう。当時評議員を務め、比較的文学に好意的とされる波多野承五郎（一八五八―一九二九）でさえ「何故「三田文学」を発刊したかと言ふと、慶応義塾の文科が繁盛して居なかつたからだ。それを繁盛させるには、日本第一の文学雑誌を発行したい。さうすれば素質の良い学生が全国から集つて来るからだと言ふ意見であつた。併し今になつて考へると、当時私達は果して十分に文学を理解して居たかどうか、随分怪しいやうな気がする」と述べている。[376]一九一六（大正五）年荷風は慶應義塾を去った。

このような状況で、文科の教員である澤木四方吉（一八八六―一九三〇）[377]らが中心となった『第四期あるいは第二期）三田文学』の時代が訪れる。当初は「新しき芸術の道を開拓していかなければならない」とし、新人発掘などに努めていたが、[378]『三田学会雑誌』が経済学の雑誌になった結果、「純文学／美文学」以外の教員学生にも発表の場を求める声は大きかったのであろう。一九一八（大正七）年九月一四日、「哲学科と史学科の教授学生とが万来舎に会合して、雑誌発行について談合、百五十頁位のもの、年三回発行、雑誌名は投票の結果「三田批判」と決定、しかし案は実現しなかったけれども、雑誌発行の要望のつよまってきたことを示すものであった」[379]という。これらの声に応えてか、一九二二（大正一一）年『三田文学』三月号は「従来文学上の「創作」に傾いた本誌に、更に広く芸術上哲学上の「思索」と「批判」と「研究」とを加へたいといふ希望を抱いて居りましたが、此度漸く機が熟しまして、これを実現する計画を立得るまでになりました」と予告した。実際、それ以降の目次などを見ると、「純文学／美文学」だけでなく、哲学や歴史などの論考が掲載されるようになっている。[380]

しかし、文科／文学部（一九二〇年設置）の学問についてもすでに専門化が進んでおり、呉越同舟は長続きしなかった。哲学科、文学科、史学科はそれぞれに雑誌の刊行に向かうことになる。後述のように一九二一（大正

一一）年には『史学』が、一九二六（大正一五）年には『哲学』が創刊され、その間に『（第四期あるいは第二期）三田文学』は一九二五（大正一四）年二月に休刊する。再興を目指す際に問題になったのは、『三田学会雑誌』の時にも見られたように、やはり資金の問題であった。水上は『三田文学』の復刊を目指すがなかなかうまくいかず、「三田文學の復活」（大正一五年三月『時事新報』）という記事において慶應義塾の無理解を責め、「哲學側は独立して年二回の雑誌類似のものを出す事になつた。それは勝手であるが、困つた事にはもともと不足で弱つて居た『三田文學』の補助金の幾分を資金として持つて行つてしまつた事である[381]」と述べている。「純文学／美文学」志向の水上滝太郎らからすれば、許し難いことだったろう。

それに対して哲学科の教員で戦後に理事などを務めた橋本孝（一八九五―一九七五）は「文学部が哲、史、文の三学科に分かれている以上、何時までも三田文学に依存することは、本来の目的達成から見ると邪道であるとなし、史学のように、独立の機関誌を持つべきであるという議論が圧倒的になつて来て、当局へもその旨要請すると即座に応諾され、いよいよ各学科別に発表機関を持つことになつたのである。（中略）「哲学」を発刊するに当つて、三田文学への補助金を減額するようなことを一言たりとも口に出したこともないし、また策動した覚えもなく、この点は一つに塾当局の独自の決定であることをはつきりお断りしておき度いと思うのである[382]」と反論している。文学部に許された資金を考えれば、仕方のない面もあったかもしれない。

（4）三田史学会と『史学』

史学会を最初にして、歴史学会が各地につくられていくが、これらには大学を基盤とするものも多かった。たとえば「史学研究会」は一九〇八（明治四一）年に京都大学文学部（当時は京都帝国大学文科大学）史学科の教官・学生を中心に創立された学会で、会誌『史林』は一九一六（大正五）年に創刊されている[383]。三田史学会も、日本の学術研究が発展していく中で、次々と生まれていった学会の一つであった。

三田史学会の発足は、松本信廣によれば一九〇〇（明治四三）年である[384]。同じ年の二月に「史學講演大會」が三田文学会の主催で開かれ、川合貞一の開会の辞に続いて、帝大教授箕作元八（一八六二―一九一九）、同志社

出身で「宗教改革史」などの著作があった日本女子大教授村田勤[385]（一八六六―一九四七）、当時早稲田大学教授であった久米邦武（一八三九―一九三一）という錚々たる学者の講演がなされた[386]。また『三田学会雑誌』は「史學会例會」として同年五月二八日に開かれた史学会第一回例会の様子を伝えている。この記事は小沢愛圀と阿部秀助の講演題目や内容を伝え、来会者を記録するのみで「三田史学会」の発足を伝えておらず、二月の「史學講演大會」と五月の例会の間のいずれかに三田史学会は発足したのかもしれない。

『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』には、この「三田史学会」の規約が掲載されており、

「一、本会の目的は史学研究心を鼓吹するにあり。
一、本会は三田史学会と称す。
一、本会は毎月一回例会を開き会員各々分担して、或は独創の研究を発表し或は史学界の近況を報告す。
一、本会々員は慶應義塾教授学生に限る。
一、入会せんとするものは会員の同意を得ることを要す。
一、入会希望者は左の諸氏の下まで申し出られたし。
田中教授、阿部教授、史一　石川一太郎君、予
二　間崎万里君、文三　小沢愛圀君[387]」

となっている。会員は慶應義塾関係者に限定され、間崎は「史学科の学生は少なかったので他科の学生をかり集めて三田史学会を作った。こんにゃく版の趣旨書には石川君と僕と小沢愛圀君の名前を連ねている。史学研究を目的とする者はだれでも会員になれる仕組みになっている。これが当時の写真（本稿では割愛）である。毎月例会を開き、春秋には大講演会を開いたものである[388]」と述べているが、名前から判断して、この時のことを指しているのであろう。写真には田中萃一郎、阿部秀助、石川一太郎、間崎万里、小沢愛圀とともに、政治科の村田岩次郎、のちに政治学科の教授となる及川恒忠（一八九〇―一九五九）、のちに日大総長となる法律科の呉文炳（一八九〇―一九八一）、法律科予科の山口達也の計九名が写っている。

その活動は『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』には一九一一（明治四四）年二月の第三回講演大会までが記録されているが[389]、記録の不備だけでなく、休会状態の時

もあったのかもしれない。松本信廣は「私の本科に進学した大正六（一九一七）年に田中さんの発意で復興した三田史学会例会（傍点および西暦は筆者による）[390]」と述べているからである。当初の三田史学会は、間崎が「かき集めた」というように学生団体であり、田中萃一郎が一九二三年に没するまで史学科には合計一九名の卒業生しかいなかったことを考えると、その後も会員数は多くなかったであろう。

この松本信廣が言う「再興された三田史学会例会」と、松本芳夫の日記に記された「一九一七（大正六）年五月七日の「史学研究会」（一時中絶していたのを、この時再興す）」が同一であるとすれば、三田史学会例会は史学科内の授業の延長線上にあったといってよいだろう。「隔週ごとに開かれる「史學研究會」は毎回學生卒業生教授の中から一人ずつ都合三人が研究を發表することになっていた。講演が濟むと教授も學生も番茶を啜りながら和氣藹々として歡談した。談笑の中心は何時も博士。史學科が人數が少ないわりに團結に富み機關雜誌の公刊の出来たのも、實に此研究會での絶えざる訓練の賜物であった[391]」という。地味だが、着実に実績を重ねていたといえよう[392]。

教員の研究だけでなく、学生や卒業生が育っていく中で、歴史研究の発表の場の必要は高まっていた。『三田学会雑誌』にはいくつも歴史学の論考が掲載されたが[393]、一九一四（大正三）年に理財学会の機関誌となっており、前述のように『三田批判』という雑誌も構想されたが実現しなかった。研究成果は松本芳夫『神代史研究』（国文堂、一九二〇年）のように書籍となり、あるいは松本信廣「支那古代姓氏の研究」のように『三田評論』第二八四号（一九二一年三月号）から第二八七号（同年六月号）に掲載された[394]。

松本信廣は「そこでなんとかして専門の雑誌を出したいという機運が高まり、遂に大正一〇（一九二一）年一一月三日に雑誌『史学』が創刊されることになった。その頃大正八年卒の芳夫君は、商工学校に、大正九年卒の私は普通部に教えていた。その外に一年後輩でやはり普通部の教員だった飯田忠純君が加わり、初号発刊にこぎつけたのである。創刊の辞は芳夫君が執筆し、なかなか名文であった[395]」と述べている。奥付によると編集兼発行者は飯田忠純であり、「三田史學會規約」は、

第一條　本會は三田史學會と称す

第二條　本會は史學を研究するを目的とす
第三條　本會は毎年四回雑誌「史學」を發行し會員に配布す
第四條　會費は年四圓とす（半年宛分納を妨げず）
第五條　一時に金五拾圓以上寄附したる者は以後會費を要せずして終身會員たるを得べし
第六條　會員たらんとするする者は會員の紹介によるか直接慶應義塾大學文學部研究室内三田史學會事務所に申込むべし

となっている。[396] 会員資格は慶應義塾関係者に限定されてはいなかったが、発刊の辞も、編集兼発行者も学生という態勢で出発したのである。

印刷は学生である松本信廣が担当し、「家の近所の印刷職人にぜひ引き受けさせてくれと言われ、前金で原稿を渡し、結局出来上がらず、大変困って田中先生の所に泣きつくと、座に居合わせた竹内書店の主人（塾員）が、みかねて職人との間に入り、金を立替え弁償してくれたので吻と一息ついたという失敗談がある。それから口絵費用として田中さんが毎号五円づつ寄附してくれることになり、それで創刊号には御所蔵のヘロドタス（ママ）とツキヂデスの両面塑像の写真を掲載し、先生自らその写真の為に「希臘の二大史家」という巻頭論文を執筆された[397]」という。

『史学』が刊行されると、『史学雑誌』の「彙報」に「豫て田中萃一郎博士其他慶應大學の史學者一派を以て組織せられたる三田史學會が、今回季刊雑誌『史學』を發刊するに至つたのは、斯學の爲吾人の大に慶賀する所である。其發刊の辭に『われらはありしおのれを知つて、さらにあるべきおのれに目醒めねばならぬ。けれどもあるべきおのれの目醒は、ありしおのれをただしく知つてのみはじめて可能である』といへるは、吾等の全然同感する所である。ヘロドトス、ツキヂデスの兩面像は、巻頭を飾るにふさはしきものであり、本文に田中博士の「希臘二大史家」、橋本學士の「古事記及び日本書紀の新研究を讀む」を始め、國史東西洋史に關する諸家の有益な研究が滿載されてある。體裁は京都史學會の『史林』に甚肖て、姉妹雑誌の觀がある。吾人は同誌の健全なる發達を祈つて止まない[398]」との記事が掲載された。

会員の確保も大変であったろう。年会費四円は、当時の慶應義塾の学部授業料が百円であったことを考えると、[399] 現在の貨幣価値にして数万円になろう。松本信廣が「此

の新しい雑誌を後援して入会された人々の中には京都大学の東洋史関係の先生が多かったのは、加藤（繁）さんが旧知の方々に依頼状を書いて下すったお蔭であった（カッコ内は筆者による）」としているが、おそらく単に個人的な依頼の結果だけではなかったろう。一九一六（大正五）年に会誌『史林』を創刊した「京都史学会」は「京都文学会」の下部組織として「明治四十年九月史學科開講の後間もなく同科學生生徒により組織せられ諸教授誘導の下、史學地理學に關する會員相互の知識の交換研究の補助をなすもの也」[400]であった。京都帝国大学文科大学史学科の教員・学生を中心に創立された学会として、『史学』に「體裁」だけでなく、共通する志を感じていたのではないかと筆者は考える。

学会の維持と会誌の刊行にとって重要なのはやはり資金である。その当時、東京帝国大学を中心とする史学会の名簿には九〇〇名を超える会員の氏名住所が記載され、慶應義塾関係だけを挙げても、その中には阿部秀助や橋本増吉などの帝大出身の教員だけでなく、田中萃一郎や卜部百太郎などの慶應義塾出身の教授、さらに間崎万里、松本芳夫、松本信廣、今宮新などの若手の名も見られる全国学会であった[401]。会費は「年五圓」であったが[402]、それ

でも「史學會基本金募集」を行って財源の強化を目指し、市村瓚次郎（一八六四―一八四七）以下の教授が先頭となって寄付を行っている[403]。ましてや三田史学会にはそれに比することのできない困難があったに違いない。一九〇九（明治四二）年に三田学会補助金一二〇〇円、翌年に三田文学補助金八五九円、一九二一（大正一〇）年に三田史学会補助三〇〇円、法学会補助一〇〇〇円、一九二六（大正一五）年には一本化された学会補助及奨学金七〇二六円が計上されているようだが[404]、慶應義塾からの補助は限られたものだったろう。

資金確保のため、慶應義塾維持会から想を得たのであろうか、「維持会」が設置された。間崎が繰り返し触れており、田中萃一郎追悼会において「困難な時代がありまして自分達で維持會を組織して經營を續けて參りましたが幸に皆様の御援助によりまして、今日では十八卷一號を出して近く占部先生の古希紀念號を出す運びになつて居ります[405]」と挨拶し、戦後にも「経済困難に陥り我等同人が維持会を作ったこともあった[406]」と書いている。松本信廣も「私の留守中[407]財政難で維持会を組織されたことがあったと聞く。大先輩の間崎万里さんは蔭になり日向になり、「史学」のために尽し、塾の先生方の入会をひ

ろく勧誘するなどに大いに力あった。又人形芝居のことを書かれた小沢愛圀氏も三田史学会の古い会員で、「史学」の親切な援護者であった。とにかく多くの会員の援助で雑誌は恙なく成長していったのである[408]」と記している。『史学』第一巻に示された会費は「年四円」だが、第一〇巻では「年三円」に減額されている。維持会に支えられながら、会費を下げて会員数の増加を図ったのかもしれない。戦後に『三田文学』を再興する際、同人たちが伝手をたどって三田派の財界人に援助を願ったというが[409]、同じような話を恩師の一人から伺ったことがある。今となっては分からぬ苦労は多かったに違いない。

『史学』の執筆者は、外国を直接体験した人が少なく海外情報に触れられる機会が限られた時代にあって、積極的に「新知識」を発信した。それは歴史学だけでなく、多方面の記事に及ぶ。これは戦前の歴史学者のほとんどに見られることだが、たとえば間崎万里はナチスが政権獲得した一九三三年に「餘白録　ナチスの人種觀」（『史学』第一二巻四号（一九三三年））を寄せ、さらに「餘白録　外交用語の縺れ」（『史学』第一五巻二号（一九三六年））や「餘白録　ナポレオン父子の合葬」（『史学』第二〇巻一号（一九四一年））などの海外事情分析、さらに多くの外国文献の書評を執筆している。これは学術研究というだけでなく、『三田評論』と同じように、コミュニティ（社中）の維持活動としての面もあったのではないかと考える。「訃報」などの教員や物故会員を偲ぶ記事も多い。

そのような状況でも、三田史学会は日吉矢上古墳発掘、江南踏査、歴史叢書一四巻刊行などの活動を行い[410]、「第十巻の二号（昭和六（一九三一））年から署名人は会長卜部百太郎氏となったが、此の頃から実際の編集人の名前を外に出さず史学会長の名を出すようになった[411]」。学生団体の発行する雑誌ではなく、教員を主たる構成員とする学会へと変わったのであろう。

そして第二次世界大戦の時代が訪れる。松本信廣は三田史学会を襲った災難として田中萃一郎の急逝や関東大震災と並んで「大東亜戦争」を挙げているが[412]、やはり戦争の打撃は大きかったであろう。戦時体制下にあって、国策協力へと傾くこともあっただろう。また印刷統制が強化される中で、資材の確保も難しかっただろう。召集や戦災の中で、『史学』は第二二巻四号（一九四四年一一月）から休刊し第二三巻一号（一九四八年一月）で復刊するまで約三年間の逼塞を余儀なくされた。

慶應義塾は、「一九四七年五月二四日を期して、戦後の復興に一歩を踏出すべく、創立九十年祭の式典を擧げた」。会長の間崎万里はルネサンスに譬えながら「再び劍よりも強きペンの力を復興すべく、義塾精神の本源に溯って、塾祖の提唱された文化移植のルネサンスとして、ここに先ず史學の復刊を見るに至つた。偏に大方の御支援を仰ぐ次第である」[443]と述べ、慶應義塾大学文学部のさまざまな専攻の教員の寄稿を得て『史学』を復刊した。復刊しても、第二四巻一号には一年以上の刊行の遅れが見られるなど、多くの困難になお直面したことは確かである。だが、松本信廣は「私立大学では史学科設置は無理だという世評をよそに清新な空気を斯界に注入し、官学万能の時代に自由独立の史風を三田山上に生み出し、今日の盛運に導いた『史学』の足跡は輝かしいものがあると言わなければならぬ」[444]と記している。

Ⅵ　終わりに

このように自分の能力の範囲内で、戦前期を中心に慶應義塾における歴史学の在り方と、三田史学会と『史学』の歩みをたどってきた。準備や執筆の過程で、慶應義塾や三田史学会がつねに順風に恵まれたわけでなく、明治一三年の事件など歴史的な情報としては知っていたことが考えていた以上に深刻な問題であったことを再認識させられた。先人の苦労を知ると同時に、現在についても考えざるを得なくなった。大きな課題である。

註

（1）たとえば松本芳夫「雑誌『史学』が生まれるまで」（『史学』第四一巻（一九六九年）六〇五―一〇頁）、特集「三田史学の百年を語る」（『史学』第六〇巻（一九九一年））などが企画掲載されている。

（2）本稿は二〇二一年六月二六日にオンラインで行われた三田史学会大会「総合部会シンポジウム」での報告「『史学』から読む三田史学会のこれまで（一九九〇年以前）」に大幅に加筆修正を加えたもので、また題目は内容に合わせて変更した。筆者は西洋史学が専門であり、任に堪えないとの思いを禁じ得ないが、やはりこれは慶應義塾の史学科に属する者が果たすべき責務であると考え、刊行史料と二次文献に依拠して記すものである。内容が長期に関わるため総花的で初歩的な説明に終わっていることも寛恕を乞うものである。

（3）福澤の生涯の詳細、特にその前半生については、河北展生・佐志傳編著『「福翁自傳」の研究』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六年）を参照。

（4）『福翁自伝』（『福澤諭吉全集』第七巻（一九五九年）、八〇―八一頁。以下において福澤の著作については基本

的に慶應義塾編『福澤諭吉全集』（岩波書店、一九五八―一九六四年）によることとし、文中のルビは外した。また引用全般において、原文通りの表記に努めたが、フォントの問題などにより一部行なうことができなかった。

（5）一八七二（明治五）年一二月三日までは旧暦を使用し、それ以降は新暦を使用する。

（6）『西洋事情』（『福澤諭吉全集』第一巻（一九五八年））二八五頁。

（7）『西洋旅案内』（『福澤諭吉全集』第二巻（一九五九年）一一三―一六七頁、六七二―七四頁を参照。

（8）『訓蒙窮理圖解』（『福澤諭吉全集』第二巻（一九五九年））二三三―七九頁、六七八―七九頁を参照。その特徴については、大矢眞一「明治初年の理學啓蒙書と『窮理圖解』」（『福澤諭吉全集　第八巻附録』（岩波書店、一九六〇年））六―八頁を参照。

（9）『世界國盡』（『福澤諭吉全集』第二巻（一九五九年）五七九―六六八頁、六八三―八七頁を参照。

（10）「簿記」を意味し、福澤は一八七三（明治六）年に日本に於ける西洋簿記学の最初の文献である『帳合之法』を出版している。「デジタルで読む福澤諭吉　帳合之法」（https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a09/24　二〇二二年一月四日閲覧）を参照。

（11）『学問のすゝめ』（『初編』（『福澤諭吉全集』第三巻（一九五九年））二九―三〇頁。

（12）尾佐竹猛（『維新前後に於ける立憲思想』（文化生活研究会、一九二五年）二五九―二六〇頁）は、「五箇条の御誓文」の第三項以下は「時勢の要求」であるとし、『由利公正傳』を引き、「嘉永六年米艦の来航に際し、親しく艦船銃砲の精鋭なるを見て攘夷鎖港の空論なるを悟りて泰西の學術を探査し經濟の道を探求して、（中略）國是を定めんと謀り」としている。また大久保利謙「五ヶ条の誓文に関する一考察」『歴史地理』八八ノ二（『大久保利謙歴史著作集一』「明治維新の政治過程」吉川弘文館、一九八六年に収録、三二―六五頁）を参照。

（13）サミュエル・スマイルズ（中村正直訳）『西国立志編（講談社学術文庫）』（講談社、一九八一年）。また高橋昌郎『中村敬宇』（吉川弘文館、一九八八年）七三―八五頁を参照。

（14）「福澤全集緒言」（『福澤諭吉全集』第一巻（一九五八年））三八頁を参照。

（15）当時の人口については、三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧　補訂版』（東京大学出版会、二〇一〇年）五一頁を参照。

（16）「慶應義塾之記」（『福澤諭吉全集』第一九巻（一九六二年））三六七頁。

（17）神辺靖光「学制期における東京府の私立外国語学校―その形態と継続状況についての一考察―」『日本の教育史学（教育史学会）』一七号（一九七四年）四―二五頁、および関口直佑「明治初期における東京の私塾―同人社を中心にして―」『早稲田大学社会科学研究科社学研論集』一二号（二〇〇八年）一九六―二〇三頁を参照。

（18）明六社については、大久保利謙『明六社』（講談社、

二〇〇七年）を参照。
(19) 秋山勇造「東京学士会院と『東京学士会院雑誌』」『人文研究（神奈川大学）』第一五一号（二〇〇三年）、九九―一一六頁を参照。
(20) 大阪慶應義塾、京都慶應義塾、徳島慶應義塾などが設置され、荘田平五郎、矢野文雄などが教員として派遣されたが、数年間しか存続できなかった。『慶應義塾百年史上巻』（慶應義塾、一九五八年）五〇七―四三頁、および西澤直子「慶応義塾の分校―大阪・京都・徳島―」『三田評論』第一〇九八号（二〇〇七年）三二―三六頁を参照。
(21) 『慶應義塾百年史　上巻』五六七―八二頁、および丸山信編『人物書誌大系三〇　福澤諭吉門下』（日外アソシエーツ、一九九五年）、特に二〇六―一五頁を参照。
(22) 『文明論之概略』「緒言」（『福澤諭吉全集』第四巻（一九五九年））五頁。
(23) 『西洋事情』二八五頁。
(24) たとえば「慶應義塾社中之約束」（明治六年三月）（『慶應義塾大学一五〇年史資料資料集』「基礎資料編」（慶應義塾、二〇一六年））、四一―四二頁を参照。
(25) 『文明論之概略』巻之五第九章、一五二頁。
(26) 浜林正夫「H・T・バックルの『イングランド文明史』」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第五号（一九八五年）、四―八頁。
(27) 『文明論之概略』巻之六第一〇章、二〇〇―二〇一頁を参照。
(28) アルバート・M・クレイグ『文明と啓蒙―初期福澤諭吉の思想―』（慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）を参照。
(29) 小澤榮一「文明史と福澤諭吉」（『福澤諭吉全集　第一三巻附録』（岩波書店、一九六〇年）五―九頁を参照。
(30) 『福翁自傳』九頁。
(31) 阿部隆一「福澤百助の學風（上）―その手澤本より見たる―」（『福澤諭吉全集　第二巻附録』（岩波書店、一九五九年）一頁。
(32) 宇野精一監修、荒木見悟『亀井南冥・亀井昭陽』（明徳出版社、一九八八年）を参照。
(33) 田尻祐一郎『江戸の思想史　人物・方法・連環』（中央公論新社、二〇一一年）九四―一〇五頁を参照。
(34) 『福翁自傳』一二頁を参照。
(35) 帆足図南次『帆足万里』（吉川弘文館、一九八九年）を参照。
(36) 『福翁自傳』一六頁を参照。
(37) 齋藤秀彦「福澤諭吉をめぐる人々―福澤三之助―」『三田評論オンライン』（https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201911-1.html　二〇二二年四月一七日閲覧）を参照。
(38) 『福翁自傳』一二頁を参照。
(39) 「慶應義塾之記」三六八頁。
(40) レイモンド・ウィリアムス（椎名美智他訳）『完訳キーワード辞典』（平凡社、二〇一一年）を参照。
(41) この問題については、鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社、一九九八年）を参照。
(42) 同書一三八頁を参照。

(43) たとえば金文京「福澤諭吉の漢詩」（福澤諭吉協会『福澤手帖』一三八号から連載）を参照。さらに、ひろたまさき『福沢諭吉』（岩波書店、二〇一五年）一八一―八四頁を参照。
(44) 福澤諭吉「文學會員に告ぐ」（『福澤諭吉全集』第二〇巻（一九六〇年）二六七―七一頁、特に二六七頁を参照。
(45) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』一七一―七二頁を参照。
(46) 『福翁自傳』六八―六九頁を参照。
(47) 長尾正憲「幕末洋学史における適塾の地位―「福沢屋諭吉」前史研究として―」『法制史学』第二七巻（一九七五年）四七―六二頁を参照。
(48) 前田勉『江戸の読書会―会読の思想史―』（平凡社、二〇一二年）を参照。
(49) 師岡淳也、菅家知洋、久保健治「近代日本における討論の史的研究に関する予備的考察」『ことば・文化・コミュニケーション（立教大学異文化コミュニケーション学部紀要）』第三号（二〇一一年）二五―四一頁を参照。
(50) 馬場辰猪「馬場辰猪自伝」（『馬場辰猪全集』第三巻（岩波書店、一九八八年）六四―六七頁を参照。
(51) 石河幹明『福澤諭吉傳』第一巻（岩波書店、一九三二年）六二〇―二一一頁参照。本書には当時の雰囲気を伝えるエピソードが多く記載されている。
(52) 今泉みね『名ごりの夢―蘭医桂川家に生れて―』（平凡社、一九六三年）三三―三五頁を参照。
(53) 河北展生・佐志傳編著『「福翁自傳」の研究』一九〇―九四頁を参照。
(54) 馬場辰猪「馬場辰猪自伝」六九頁を参照。
(55) 「慶應義塾新議」（一八六九年）『一五〇年史資料集』一八頁を参照。
(56) 村田昇司『門野幾之進先生事跡・文集』（門野幾之進先生懐舊録及論集刊行會、一九三九年）一二九頁を参照。
(57) 同書一三〇―三一頁を参照。
(58) 同書九八頁を参照。
(59) 石河幹明『福澤諭吉傳』第一巻（岩波書店、一九三二年）六三二頁参照。
(60) 現在の幼稚舎が小学校であるのに対し、揺籃期の幼稚舎は生徒の年齢も多様で、かなり独自の教育がなされていたようである。『慶應義塾百年史　上巻』五四四―五八頁を参照。
(61) 田中萃一郎「慶応義塾と史學の研究―三田史學會發會記念講演―」『史学』第四八巻一号（一九七七年）一二頁を参照。
(62) 白柳秀湖『中上川彦次郎傳』（岩波書店、一九四〇年）四一四―一六頁を参照。
(63) 福澤自身の英語力については、クララ・ホイットニー『クララの明治日記（下）』（講談社、一九七六年）六三頁、および慶應義塾編『福沢諭吉の手紙』（岩波書店、二〇〇四年）一六―一七頁を参照。
(64) 「先學を語る―白鳥庫吉博士―」東方学会編『東方学回想Ⅰ　先学を語る（1）』（刀水書房、二〇〇〇年）二七頁参照。

(65)「三田演説会第百回の記」(『福澤諭吉全集』第四巻(一九五九年))四七六―七八頁。また西澤直子「近代化における小幡篤次郎の役割」、池田幸弘・小室正紀編著『近代日本と経済学―慶應義塾の経済学者たち―』(慶應義塾大学出版会、二〇一五年)所収、七六―七八頁を参照。

(66) 矢野文雄「予が在塾當時の懐舊談」『慶應義塾學報』第四〇号(明治三四年)四一―四四頁を参照。

(67) 川合貞一「大學創立五十年を迎へて」『三田評論』第五一四号(一九四〇年)一頁。『慶應義塾百年史　別巻(大学編)』(慶應義塾、一九六二年)六二頁を参照。

(68) Karl Rathgen, *Japans Volkswirtschaft und Staatshaushalt* (Leipzig, 1891) pp. 115-16を参照。なお、この情報の存在は『慶應義塾百年史中巻(前)』三七二頁で知った。

(69)『慶應義塾百年史　上巻』七二〇―二二三頁を参照。

(70) 同書七二三―二六頁を参照。

(71) 三輪洋資「福澤諭吉をめぐる人々―西郷隆盛―」『三田評論オンライン』(https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201711-1.html　二〇二二年一月四日閲覧)を参照。

(72)『慶應義塾百年史　上巻』(慶應義塾、一九五八年)七二六頁を参照。

(73) 資料の欠落によって、その金額は明らかにはできないが、かなりの額にのぼるとされる。『慶應義塾百年史　上巻』五九八頁を参照。

(74)『慶應義塾百年史　上巻』七三七―五四頁を参照。

(75) 土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』(講談社、一九六二年)九〇―一〇七頁、および本山幸彦「福沢諭吉の啓蒙思想と「学制」の教育思想」『教育科学セミナリー(関西大学)』第二一号(一九八九年)一―七頁を参照。

(76) 政変後に創刊された『時事新報』は「不偏不党」の立場を取ったが(『慶應義塾百年史　上巻』七九四―八〇四頁を参照)、福澤はこの頃も伊藤博文を評価しているようで、たとえば『時事新報』「伊藤參議を餞す」(明治一五年三月二日付、『福澤諭吉全集』第八巻(岩波書店、一九六〇年)一〇―一三頁)を見ると、憲法取り調べのために渡欧する伊藤を激励している。

(77)『慶應義塾百年史　上巻』八〇七―一六頁を参照。

(78) 中野目徹『近代史料学の射程―明治太政官文書研究序説―』(弘文堂、二〇〇〇年)を参照。

(79)『慶應義塾百年史　上巻』八〇六―八〇七頁を参照。

(80) 同書七一五―一六頁を参照。

(81) 梅溪昇『お雇い外国人　明治日本の脇役たち』(講談社、二〇〇七年)二三七―四四頁を参照。

(82) 土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』四一〇―四三頁、および瀧井一博『伊藤博文―知の政治家―』四五―九二頁を参照。

(83) 梅溪昇『お雇い外国人』二二一―二四頁を参照。

(84) 同書二三七―三九頁を参照。

(85)『慶應義塾百年史　上巻』三九五―四〇六頁を参照。

(86) 瀧井一博『伊藤博文』六六―八四頁を参照。

(87) 天野郁夫『大学の誕生（上）帝国大学の時代』（中央公論新社、二〇〇九年）一〇二―一〇五頁を参照。
(88) 石附実『近代日本の海外留学史』二一三―四九頁を参照。
(89) 文部科学省HP「海外留学生と雇外国人教師」（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317601.htm　二〇二一年一月一六日閲覧）を参照。
(90) 石附実『近代日本の海外留学史』二一三―三二二頁を参照。
(91) 天野郁夫『大学の誕生（上）』一〇六―一〇七頁を参照。
(92) 慶應義塾史事典編集委員会編『慶應義塾史事典』（慶應義塾、二〇〇八年）八三三―三四頁を参照。
(93) 天野郁夫『大学の誕生（上）帝国大学の時代』一〇五―一一〇頁を参照。
(94) 水谷三公『官僚の風貌』（中央公論新社、一九九九年）七二―七五頁を参照。
(95) 三井家には藩閥や官僚との癒着ゆえに「無心状」が多数送られ、「地獄箱」と呼ばれるものに充満していたという。白柳秀湖『中上川彦次郎傳』（岩波書店、一九四〇年）二四五―四七頁を参照。
(96) 水谷三公『官僚の風貌』七六―七九頁を参照。
(97) 菅原亮芳『近代日本における学校選択情報　雑誌メディアは何を伝えたか』（学文社、二〇一三年）二三―五七頁を参照。
(98) 池田成彬『財界回顧』（図書出版社、一九九〇年）三〇頁を参照。
(99) 高橋昌郎『中村敬宇』（吉川弘文館、一九八八年）二〇五―二〇六頁を参照。
(100) 内田糺「攻玉社」『国史大事典』（https://japanknowledge-com.kras1.lib.keio.ac.jp/lib/display/?kw=%E6%94%BB%E7%8E%89%E7%A4%BE&lid=30010zz171220　二〇二一年一月一六日閲覧）を参照。
(101) 富田仁『フランス語事始―村上英俊とその時代―』（日本放送出版協会、一九八三年）を参照。
(102) 小山太輝「福澤諭吉をめぐる人々―鎌田栄吉―」『三田評論オンライン』（https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201708-1.html　二〇二一年四月一七日閲覧）を参照。
(103) 『慶應義塾百年史　上巻』七六九―七四頁を参照。
(104) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』七一五―一六頁を参照。
(105) 同書一七―二二頁、および玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯：学で富み富て学び』（有斐閣、二〇〇二年）二六五頁を参照。
(106) 『時事新報』に関わる最近の研究として、松尾理也『大阪時事新報の研究　「関西ジャーナリズム」と福澤精神』（創元社、二〇二一年）がある。
(107) この点については玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯』および西川俊作「時事新報社主　福澤諭吉」『三田商学研究』第四八巻五号（二〇〇五年）二三―三九頁を参照。
(108) 大西理平『福澤桃介翁傳』（福澤桃介翁傳記編纂所、一九三九年）、および林薫一『尾張藩漫筆』（名古屋大学

出版会、一九八九年）二七三―九四頁を参照。

(109) 玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯』一五一―七三頁を参照。

(110) 同書一七五―九七頁を参照。

(111) 白柳秀湖『中上川彦次郎傳』一七五―九六頁を参照。

(112) 『一五〇年史資料集』「基礎資料編」九五―一〇四頁を参照。

(113) 同書一―四七頁による。また『慶應義塾百年史　中巻（前）』三六―四三頁、『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』五七―六四頁を参照。

(114) 福澤のキリスト教に対する態度を含め、宣教師の教員採用の問題については、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係―』（未來社、一九九九年）などを参照。

(115) 白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち』一六一―二一一頁を参照。

(116) 同書二四七―九八頁を参照。

(117) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』四三―四九頁を参照。三教授の招聘についてはいくつかの説があるが、ここではこれ以上立ち入らない。西川俊作『大学部開設百年』（慶応義塾大学、一九八九年）、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち』などを参照。

(118) 文学科には、三専攻に分かれる以前の広義の「文学科」と、三専攻に分かれたのちの狭義の「文学科」がある。混同を避けるため、本稿では前者を「文科」と表記する。

(119) 林毅陸『生立の記―林毅陸手記―』（非売品、一九五四年）五三頁を参照。

(120) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』六八―八〇頁を参照。

(121) 西川俊作「G・ドロッパーズの履歴と業績」『三田商学研究』第二六巻一号（一九八三年）一〇八―一九頁を参照。

(122) 〈Vickers, Enoch Howard〉, Bibliographical Database of Keio Economists（http://bdke.econ.keio.ac.jp/psninfo.php?sPsnID=3　二〇二二年四月三日閲覧）。

(123) 天野郁夫『大学の誕生（下）大学への挑戦』七一―七二頁を参照。

(124) 土屋博政『ユニテリアンと福澤諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇〇四年）を参照。

(125) 岩谷十郎「ウィグモアの法律学校―明治中期一アメリカ人法律家の試み―」『法学研究』第六九巻一号（一九九六年）一七五―二三八頁を参照。

(126) 岩谷十郎「福沢諭吉と法文化」小室正紀編著『近代日本と福沢諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）二二二―二三頁を参照。

(127) 『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』（慶應義塾、一九六二年）七三―七八頁を参照。

(128) 林毅陸『生立の記』四〇頁を参照。

(129) 「幼稚舎」は現在では小学校に相当するが、これも複雑な変遷を有し、やはり注意が必要である。『慶應義塾百年史　中巻（前）』一三四―四三頁を参照。

(130) 天野郁夫『大学の誕生（下）』八八―八九頁を参照。

(131) 松永安左衛門口述、竹内文平編『松永安左ェ門 ―自叙傳―』（昭文閣書房、一九三一年）、および天野郁夫『大学の誕生』三四五―四六頁を参照。

(132) この時期の議論について林毅陸が回顧している。林毅陸『生立の記』四九―五四頁を参照。

(133) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』一八九―九九頁を参照。

(134) たとえば科目の選択制も試みられた。門野幾之進「慶應義塾の學制改革」『慶應義塾學報』第二〇号（一八九九年）一―八頁を参照。だが、実際には、財政難や入学者の偏りなどから、理財科への縮小という面は否めなかったようである。『慶應義塾百年史　中巻（前）』二六―三二頁を参照。

(135) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』三一二頁、慶應義塾編『慶應義塾史事典』六三七―三八頁、および結城大佑「福澤諭吉をめぐる人々―小幡甚三郎―」『三田評論オンライン』（https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201703-1.html　二〇二二年四月一七日閲覧）を参照。

(136) 神吉創二「福澤諭吉をめぐる人々―小泉信吉―」『三田評論オンライン』（https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201905-1.html　二〇二二年四月一七日閲覧）を参照。

(137) 白柳秀湖『中上川彦次郎傳』四一〇頁を参照。

(138) 『慶應義塾史事典』七三二―三三頁および、小山太輝「福澤諭吉をめぐる人々―福澤一太郎―」『三田評論オンライン』（https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi-fukuzawa/201804-1.html　二〇二二年四月一七日閲覧）を参照。

(139) 『慶應義塾史事典』七三三頁を参照。

(140) 池田成彬『財界回顧』三五―四一頁を参照。

(141) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』二五〇―八八頁を参照。

(142) 小山太輝「福澤諭吉をめぐる人々―鎌田栄吉―」を参照。

(143) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』三二四―二五頁を参照。

(144) 同書三一六―二四頁を参照。なお青木徹二に与えられた留学費用については分からなかった。

(145) 『慶應義塾史事典』五一頁を参照。

(146) たとえば、武田晴人『日本経済史』（有斐閣、二〇一九年）九九―一七三頁を参照。

(147) 天野郁夫『大学の誕生（上）』三五一頁を参照。

(148) 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営―近代日本私立高等教育機関における教育と財務の相克』―（ミネルヴァ書房、二〇一七年）四八―一一七頁を参照。

(149) 天野郁夫『大学の誕生（下）』二七一頁を参照。

(150) 『慶應義塾史事典』八二四頁を参照。

(151) 天野郁夫『大学の誕生（上）』二四五―七八頁を参照。

(152) 同書三―八七頁を参照。

(153) 「専門学校令（明治三六年三月二七日勅令第六一号）」、「学制百年史　資料編（文部科学省）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317930.htm　二〇二二年五月五日閲覧）。

(154) 天野郁夫『大学の誕生（上）』二四五―七八頁を参照。

(155) 同書三六九―九一頁を参照。
(156) 江津和也「専門学校令にもとづく「大学」予科から大学令にもとづく大学予科への改編について―慶応義塾大学及び早稲田大学の事例―」『清和大学短期大学部紀要』第三八号（二〇〇九年）、五四頁を参照。
(157) 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』四六―五七頁を参照。
(158) 岩田弘三『近代日本の大学教授職　アカデミック・プロフェッションのキャリア形成』（玉川大学出版部、二〇一一年）二一四―一五頁を参照。
(159) 「慶應義塾學報編輯主任　卜部百太郎」三田商業研究會編纂『慶應義塾出身名流列傳』（實業之世界社、一九〇九年、https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/777715　二〇二二年五月七日閲覧）四八七―八八頁、および慶應義塾大学三田情報センター編『慶應義塾図書館史』（慶應義塾大学三田情報センター、一九七二年）一〇五―一二頁を参照。
(160) 高木壽一「阿部秀助先生の学究的生涯」『三田学会雑誌』第一九巻第二号（一九二五年）一五四―六四頁、および慶應義塾大学 弁論部『阿部先生の追憶』（慶應義塾辨論部、一九三四年）、リースの娘で阿部の義妹にあたる吉見周子の証言を基にした金井円／吉見周子編著『わが父はお雇い外国人』（合同出版、一九七八年）を参照。
(161) 「三田の史学者プロフィール」『史学』第六〇巻二・三号（一九九一年）一七三―七四頁を参照。
(162) 廣瀬哲士「慶大回顧」『文藝春秋』昭和一〇年七月号七―九頁を参照。
(163) 『一五〇年史資料集』「基礎資料編」によると、気賀は一九〇六（明治三九）年から一九〇九（明治四二）年まで「大学部予科教務主任」を務めている。
(164) 天野郁夫『大学の誕生（下）』二八七―三四九頁を参照。
(165) 佐藤秀夫「大学令」『日本国史大辞典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=30010zz289730　二〇二二年五月五日閲覧）。
(166) 岩田弘三『近代日本の大学教授職』二一二―一三頁、および天野郁夫『大学の誕生（上）』三八五―四一四頁を参照。
(167) 岩田弘三『近代日本の大学教授職』二一四―一五頁を参照。
(168) 江津和也、前掲論文五七頁を参照。だが一方で「専門部／高等部」と呼ばれる組織も生まれ、移行の経緯は実際にはもっと複雑であったと思われる。小川原正道「専門部・高等部」『慶應義塾史事典』八五―八六頁を参照。
(169) 当時の歴史学界の状況や、リースの生涯などについては、金井圓『お雇い外国人 一七』「人文科学」（鹿島出版会、一九七六年）一〇五―一九七頁がまとまっていて参考になる。
(170) 辻善之助先生生誕百年記念會『辻善之助博士自歴年譜稿』（辻善之助先生生誕百年記念會、一九七七年）一〇九―一〇頁を参照。
(171) この講義ノートについては、幸田成友も自伝の『凡人

の半生』（共立書房、一九四八年）一五五―一五九頁に記している。

(172) 三上参次『明治時代の歴史学界　三上参次懐旧談』（吉川弘文館、一九九一年）三六頁を参照。

(173) 金井圓『お雇い外国人』一四八―四九頁を参照。

(174) 「「歴史を記述する」ということ　史学会一二五年の歩みと発展」（https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/f_00061.html　二〇二二年五月二日閲覧）を参照。その成果は『史學會雑誌』第一編一三号（一八八九年）四七―五六頁に「雑録」として掲載されている。

(175) Ludwig Riess, *A Short Survey of Universal History: Being Notes of a Course of Lectures Delivered in the Literature College of the Imperial University of Tokyo*, vol. 2, Tokyo, Fusambō, 1899.

(176) Ludwig Riess, *Notes of a Course of Lectures on English Constitutional History*, Rev. ed., Tokyo, [s.n.], 1898.

(177) Ludwig Riess, *A Short Survey of Universal History*, p. 237.

(178) Idem, p. 301.

(179) Idem, p. 319.

(180) リースの日本に対する関心や人柄については、ルート・ヴィッヒ・リース『ドイツ歴史学者の天皇国家観』（講談社学術文庫、二〇一五年）、および金井円／吉見周子編著『わが父はお雇い外国人』（合同出版、一九七八年）を参照。

(181) Ludwig Riess, *A Short Survey of Universal History*, pp. 445-541.

(182) 「先學を語る―辻善之助博士―」東方学会編『東方学回想Ⅱ―先学を語る（2）―』（刀水書房、二〇〇〇年）八三および九二頁、『辻善之助博士自歴年譜稿』一〇五―一〇六頁を参照。

(183) 『辻善之助博士自歴年譜稿』一五四―五七頁を参照。

(184) 「先學を語る―白鳥庫吉博士―」東方学会編『東方学回想Ⅰ―先学を語る（1）―』（刀水書房、二〇〇〇年）三八頁を参照。

(185) 金井圓『お雇い外国人』一五二頁を参照。

(186) 川合貞一「史学者田中君」『三田評論』五〇九号（一九四〇年）二〇頁を参照。

(187) 西脇順三郎「美しかった塾のキャンパス」奥野信太郎編『三田にひらめく三色旗』（鱒書房、一九五五年）一六―一八頁参照。

(188) 幸田成友「田中萃一郎博士」『三田評論』五〇九号（一九四〇年）二四―二六頁を参照。

(189) 戸村によると、一九二六（大正一五）年における慶應義塾の総支出に占める教育研究経費（教授用機械費・図書費・学会補助奨学金・海外等留学費など）の割合は四・二％であったという。これは早稲田大学の九・三％に大きく劣っている。戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』九七―一〇六頁を参照。

(190) 田中の生涯と人柄については、田中の直弟子で直接よく知っていた松本信廣の「史学者としての田中萃一郎先生」『史学』第四五巻四号（一九七三年）四九―六一頁が

不可欠であるが、この点については五五頁を参照。

(191) 以下の出講記録は『一五〇年史資料集』「基礎資料編」により、そうでない場合を除いて、これ以降煩瑣を避けるために註は付さないこととする。

(192) 太田雅夫編著・監訳、梅森直之・中川志世美訳『家永豊吉と明治憲政史論』（新泉社、一九九六年）を参照。

(193) 『万国史綱　上下』（三省堂、一八九二年）を参照。

(194) 『史學會雑誌』第一編一三号（一八八九年）に付せられた「史學會職員會員姓名録」には元良勇次郎の氏名が見られる（家永はなお在米）。歴史家としての関心があった可能性もあろう。

(195) 田中萃一郎「慶應義塾と史學の研究法」八頁。

(196) 以下の略歴は、川合貞一「略歴」三田史学会編『田中萃一郎史學論文集』（三田史学会、一九三二年）一―四頁による。

(197) 田中萃一郎『近古伊豆人物志』（村上留次郎、一八九八年）「序」を参照。

(198) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五〇―五一頁を参照。

(199) 高橋誠一郎「田中萃一郎先生追懐―エピメーテウス（一〇七）―」『三田評論』第七二一号（一九七一年）四九―五〇頁を参照。

(200) 三田史學会編『田中萃一郎史學論文集』の「著作目録」を参照。

(201) 田中萃一郎『東邦近世史（上）』三頁を参照。

(202) 田中萃一郎「歴史新教授法の一例」『慶應義塾學報』第二〇号（一八九九年）五〇―五五頁を参照。

(203) 鈴木錠之助「田中先生の追憶」『三田評論』第三一五号（一九二四年）二三―二四頁を参照。

(204) 間崎万里「初期の史学科（史学科創立五十周年記念）」『三田評論』第六〇〇号（一九六一年）二八頁を参照。

(205) 小泉信三「田中萃一郎先生博士」『三田評論』第五〇九号（一九四〇年）一七―一八頁を参照。

(206) 間崎万里「田中萃一郎先生を憶ふ」『三田評論』第三一五号（一九二三年）二一頁を参照。

(207) 田中萃一郎「История политических учений 政治学史 Чичерин 著 モスクワ発行」『三田学会雑誌』第一巻（一九〇九年）四〇六―四〇八頁を参照。

(208) 田中萃一郎「歐文史籍便覧」『三田学会雑誌』第四巻（一九一〇年）二〇五―一〇頁を参照。

(209) 田中萃一郎「近世史研究案内」『三田学会雑誌』第四巻（一九一〇年）五九三―六〇三頁を参照。

(210) 佐藤正幸「歴史学家としての田中萃一郎」『近代日本研究（慶應義塾福澤研究センター）』第七号（一九九〇年）六三―八八頁に多くを負っている。

(211) 川合貞一「史学者田中君」『三田評論』第五〇九号（一九四〇年）二一頁を参照。

(212) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五一頁を参照。

(213) 田中萃一郎『東邦近世史（上）』（東邦協会、一九〇〇年）二―三頁を参照。

(214) 井上哲次郎『巽軒日記―自明治三三年至明治三九年―』(東京大学史料室、二〇一二年) 三頁を参照。
(215) 同書四頁を参照。
(216) 同書九頁を参照。
(217) 同書四四頁を参照。
(218) 『巽軒日記』には他に慶應義塾に関する記述として「明治三五年二月二二日「慶應義塾レクチューア倶楽部に於て「人格の価値及び自我の発展」を演述す、了はりて宮森麻太郎と会見す」」(三一頁) の記述があるが、これは『慶應義塾史』の記述で確認できる。簡単ではあるが、面会など、日常のスケジュールとは異なる事柄について几帳面に記録したことが伺える。
(219) たとえば島田英明他「第五回「思想史の対話」研究会井上哲次郎とその時代」『日本思想史学』五二号 (二〇二〇年) 三九―五五頁を参照。
(220) 明治から昭和時代初期にかけての語学者、評論家 (一八五六―一九三五)。キリスト教に近い『国民之友』(同二十年刊) では多彩な書評を寄稿し、「教育と宗教の衝突」事件の際は「偽哲学者の大僻論」ほかで井上哲次郎に詰め寄ったことで知られる。大内三郎「高橋五郎」『国史大辞典』(https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=30010zz299890 二〇二二年五月四日閲覧) を参照。
(221) 山路愛山「明治文学史」、大久保利謙編『山路愛山集』(「明治文學全集 三五」) (筑摩書房、一九六五年) 一九七頁。
(222) 水野博太「「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義」『東京大学文書館紀要』三六号 (二〇一八年) 二〇―四九頁、および三浦節夫「「井上哲次郎口述東洋哲学史」の翻刻 井上円了の東京大学文学部二年生の聴講ノート」『井上円了センター年報』二七 (二〇一九年) 一二七―六八頁を参照。
(223) 田中萃一郎『東邦近世史 (上)』二―三頁。
(224) 中見立夫「「元朝秘史」渡来のころ―日本における「東洋史学」の開始とヨーロッパ東洋学、清朝「辺疆史地学」との交差―」『東アジア文化交渉研究 (関西大学)』第四巻 (二〇〇九年) 一〇―一一頁を参照。
(225) 中見立夫「「元朝秘史」渡来のころ」三―二六頁を参照。
(226) 田中の号「金嶺」は故郷の日金山に因んでいるという。松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」四九頁を参照。
(227) 那珂通世と田中萃一郎のつながりについては、志水正司らが指摘している。森岡敬一郎「西洋史の先学たち (二)」『史学』第六〇巻二・三号 (一九九一年) 五一―五二頁を参照。
(228) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五二頁を参照。
(229) 『中等東洋史 上巻』(大日本図書、明治三一年) 一頁。
(230) 『東邦近世史』(丸善、一九〇四年) の扉裏を参照。
(231) 河村一夫「東邦協会報告」『国史大辞典』(https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=

30010zz343130　二〇一二年五月九日閲覧）を参照。

(232)　少なくとも一八九五（明治二八）年の『東邦協會報告』に付された「東邦協會會員姓名」四頁に田中萃一郎の名がある。

(233)　『東邦近世史（上）』三頁を参照。

(234)　『東邦協会会報』九四号（一九〇二年一二月）。頁数は振られていない。

(235)　『東邦小鑑』（東邦協会、一九〇〇年）を参照。

(236)　松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五〇―五一頁を参照。

(237)　松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五一頁を参照。

(238)　松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五三―五五頁を参照。

(239)　三辺金蔵「明治時代の塾生々活」、奥野信太郎編『三田にひらめく三色旗』一三―一四頁を参照。

(240)　東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史　部局史一』（東京大学出版会、一九八六年）四〇―四二頁を参照。

(241)　松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」六一頁を参照。

(242)　堀江湛［述］『福沢先生と政治学科開設九十年』（慶應義塾大学、一九八八年）一八―二〇頁を参照。

(243)　川合貞一「史学者田中君」一二一―一二二頁を参照。

(244)　堀切善兵衛「政治に精通せる田中先生」『三田評論』第五〇九号（一九四〇年）二六―二七頁を参照。

(245)　今宮新「田中萃一郎先生（慶應義塾出身人物列伝　その三）」『三田評論』第六一八号（一九六三年）七五頁を参照。

(246)　間崎万里「田中萃一郎先生を憶ふ」二二頁を参照。

(247)　小泉信三「田中萃一郎先生博士」一八頁を参照。

(248)　林陸毅「序文」三田史学会編『田中萃一郎史學論文集』（三田史学会、昭和七年）二頁参照。

(249)　松本芳夫「田中先生の政治思想について」『三田評論』第三一五号（一九二三年）二四―二六頁を参照。

(250)　松本信廣「田中博士を悼む」『三田評論』第三一五号（一九二三年）二八頁を参照。

(251)　「著作目録」三田史学会編『田中萃一郎史學論文集』（三田史学会、昭和七年）一―二八頁を参照。

(252)　『實業』第一巻一号（一九二二年）の「奥付」は、「發行兼編輯兼印刷人」として「春名高義」を挙げている。春名（一八九七生）は慶應義塾理財科を卒業し、北陸自由新聞、三井銀行、千代田生命などに勤めた人物（「日本研究のための歴史情報『人事興信録』データベース」、https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-1258　二〇二二年六月三日閲覧）で、『實業』創刊号の執筆者には鎌田栄吉、林毅陸など慶應系の執筆者が並んでいる。

(253)　小泉信三「田中萃一郎先生博士」一八頁を参照。

(254)　田中萃一郎「台湾人同化論」『三田学会雑誌』第一〇巻七号（一九一六年）一―一七頁を参照。

(255)　松本芳夫「田中先生の政治思想について」二四―二六頁を参照。

(256)　田中萃一郎「慶應義塾と史學の研究法」八頁を参照。

(257) 小泉信三「田中萃一郎先生博士」一七頁を参照。
(258) 今宮新「田中萃一郎先生」七〇頁を参照。
(259) 間崎万里「田中萃一郎先生を憶ふ」二一頁を参照。
(260) 松本信廣「田中博士を悼む」二八頁を参照。
(261) 間崎万里「田中萃一郎先生を憶ふ」二一頁を参照。
(262) 鈴木錠一郎「田中先生の追憶」二四頁を参照。
(263) 佐藤正幸「歴史学家としての田中萃一郎」八一頁を参照。これは間崎の述べているものと同じ著作だろう。
(264) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五八頁を参照。
(265) 田中萃一郎「歴史新教授法の一例」五〇―五五頁を参照。
(266) 松本芳夫「雑誌『史学』のうまれるまで」一〇七頁を参照。
(267) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五八頁、および河北展生「草創期の三田史学（二）―国史学を中心に―」『史学』第六〇巻二・三号（一九九一年）二四頁を参照。
(268) 飯田正純「恩師故田中萃一郎先生を偲ぶ」『三田評論』第三一五号（一九二三年）三〇頁を参照。
(269) 松本芳夫「史学科今昔談」奥野信太郎編『三田にひらめく三色旗』二〇―二一頁を参照。なお「必修」のニュアンスについては、後述の間崎万里の思い出も参照されたい。
(270) 河北展生「草創期の三田史学（二）―国史学を中心に―」二二頁を参照。
(271) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』六〇一頁を参照。
(272) 服部一馬「福田徳三」『国史大辞典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=30010zz413160　二〇二二年五月九日閲覧）を参照。その影響は、福田徳三先生記念会編『福田徳三先生の追憶』（福田徳三先生記念会、一九六〇年）に見てとれる。
(273) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』二一一―三五頁をを参照。
(274) 山路愛山「明治文學史」、大久保利謙編『山路愛山集』一九二頁を参照。
(275) 間崎万里「初期の史学科」二九頁を参照。
(276) 小沢愛圀「明治末年の塾文科の発展」『三田評論』第五七五号（一九五八年）三〇―三三頁を参照。
(277) 「三田學會記事」『三田学会雑誌』第四巻五号（一九一〇年）六〇七頁を参照。
(278) 服部之總「史家としての愛山」、大久保利謙編『山路愛山集』四二六―二八頁を参照。
(279) 山路愛山「現代金權史」、大久保利謙編『山路愛山集』三―八六頁を参照。だが、もっと早い時期の著作においては批判的な調子も見られる。「明治文學史」、大久保利謙編『山路愛山集』一九七―二〇〇頁を参照。
(280) 幸田の弟子である増田四郎「幸田成友博士の歴史学」『三田評論』第七一〇号（一九七一年）五〇―五二頁、吉田小五郎「幸田先生のことども」同五三―五五頁、太田臨一郎「幸田成友著作集の編集」同五五―五七頁を参照。
(281) 林基「三田の国史学と幸田成友」『史学』第六〇巻

二・三号（一九九一年）二七―三三頁を参照。

(282) 「史学科旅行」には伊木の影響があったと伝えられるが、「史学科旅行」には史料編纂所の「史料採訪」旅行と似た面があるように見える。たとえば『辻善之助博士自歴年譜稿』一二五―三二頁を参照。

(283) 清水潤三、高橋正彦、河北展生「伊木寿一先生の訃」『史学』第四三巻第四号（一九七一年）六四九―五四頁を参照。

(284) 川合貞一「史学者田中君」二一―二二頁を参照。

(285) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五九―六〇頁を参照。

(286) 「向軍治」三田商業研究会編纂『慶應義塾出身名流列傳』（實業之世界社、一九〇九年）四七三―七四頁を参照。

(287) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五九―六〇頁を参照。

(288) 鎌田栄吉が亡くなったのは一九三四年で、一九二二年（大正一一年）には加藤友三郎内閣の文部大臣となるために塾長を辞任しているので、「辞められた」の誤記と考えられる。

(289) 名取和作「直情径行の人」『三田評論』第五〇九号（一九四〇年）二三頁を参照。

(290) 詳しくは、戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』一一九―四八頁を参照。

(291) 同書五一―五二頁を参照。

(292) 同書一三〇―三二頁を参照。

(293) 同書六三―六八頁を参照。

(294) 松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」五九頁を参照。安倍は「（妻の叔父である）芦野（敬三郎）叔父の紹介で、慶応義塾大学の幹事石田新太郎に逢ひ、更に予科主任の田中萃一郎氏に逢つて、慶応義塾予科のドイツ語を担当することに（カッコ内は筆者による）」と述べている。安倍能成『我が生ひ立ち―自叙伝』（岩波書店、一九六六年）四七一頁を参照。芦野敬三郎（一八六六―一九四一）は慶應義塾幼稚舎を経て東京帝国大学理学部を卒業し、長く海軍大学教授を務めた人物という（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%98%86%E9%87%8E%E6%95%AC%E4%B8%89%E9%83%8E　二〇二二年五月二二日閲覧）。

(295) 松本信廣「史学」『三田評論』第六七二号（一九六八年）四四頁を参照。

(296) たとえば民族学に関する講師については、鈴木正崇「慶應義塾における文化人類学の研究と教育」『三田社会学（慶應義塾大学）』第一四号（二〇〇九年）五八―七〇頁を参照。

(297) 川上多助には短い回顧（「一学究の思出」『思想』第三七二号（一九五五年）七二九―三七頁）があるが、そこに慶應義塾への言及はない。

(298) 鈴木俊「松本・鳥山両先生の古希の賀を迎えて」『中央大學文學部紀要　史学科』第三号（一九五七年）一七三―七八頁を参照。

(299) 松本信廣「故橋本増吉教授の追憶」『史学』第二九巻（一九五七年）四六六―七〇頁、および竹田龍兒「橋本増

吉教授略年譜」『史学』を参照。第二九巻（一九五七年）四七一―七四頁を参照。

(300) 榎一雄「加藤繁先生小傳」、加藤繁著・榎一雄編著『中國經濟史の開拓』（櫻菊書院、一九四八年）一八〇―一八五頁。

(301) 「先學を語る―加藤繁博士―」東方学会編『東方学回想Ⅳ―先学を語る（3）―』（刀水書房、二〇〇〇年）一八頁を参照。

(302) 松本信廣「史学」四五頁を参照。

(303) 岩田弘三『近代日本の大学教授職』二二三―二六頁を参照。

(304) 坂井達郎「二人の福澤門下生と彼等が創った学校―奥愛次郎・宮澤順定と広島県日彰館―」『近代日本研究（慶應義塾福澤研究センター）第四号（一九八七年）一二九―三二頁に言及がある。

(305) 松本芳夫「雑誌『史学』のうまれるまで」一〇七頁を参照。

(306) 西澤直子「間崎万里」『慶應義塾史事典』七五〇―五一頁を参照。

(307) 志水正司「松本芳夫」『慶應義塾史事典』七五五頁を参照。

(308) 近森正「松本信広」『慶應義塾史事典』七五四頁を参照。

(309) 村山光一「今宮新」『慶應義塾史事典』六一七―一八頁を参照。

(310) 間崎万里「初期の史学科」三一頁を参照。

三田史学会と『史学』のこれまで

(311) 松本信廣「間崎万里教授を悼む」二四三―四六頁を参照。

(312) e-Stat「人口推計／長期時系列データ 我が国の推計人口（大正九年～平成一二年）」（https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&tstat=000000090001&cycle=0&tclass1=000000090004&tclass2=000000090005&stat_infid=000000090261&tclass3val=0 二〇二二年五月一六日閲覧）を参照。

(313) 『慶應義塾史事典』の「卒業者数」八二四―二五頁に依拠した。

(314) 間崎万里「史學科及び三田史學會の現状―一〇月一三日故田中萃一郎氏追悼會席上に於ける挨拶―」『三田評論』第五〇九号（一九四〇年）三一頁を参照。その二〇年後の一九六〇年に史学科創立五十周年記念祝賀会が開かれたが、翌（一九六一）年の『三田評論』に「本年は国史、東洋史、西洋史合せて三専攻で二百十余名、その中二年の西洋史が男女合せて六十三名、かく多数はいって来たのは全く空前のことであった」と感無量の様子である。間崎万里「初期の史学科」二八頁を参照。

(315) 「学会」『精選版 日本国語大辞典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=200200db319bBn4OVT5H 二〇二二年五月一五日閲覧）。

(316) ハンス・ボーツ、フランソワーズ・ヴァケ『学問の共和国』（知泉書館、二〇一五年）を参照。

(317) 水田紀久「木村蒹葭堂」『国史大辞典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=30

010zz134860　二〇二二年五月一五日閲覧）を参照。

(318) Cf. James E. McClellan, *Science Reorganized: Scientific Societies in the Eighteenth Century*. New York, Columbia University Press, 1985, especially. pp. 1–40.

(319) 大矢真一「東京数学会社」『日本大百科全書（ニッポニカ）』(https://kotobank.jp/word/%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E6%95%B0%E5%A7%A6%E4%BC%9A%E7%A4%BE-1188772　二〇二二年五月一六日閲覧）を参照。

(320) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史　通史一』（東京大学百年史編集委員会、一九八四年）一〇二〇—二二頁を参照。

(321) 清水藤太郎『日本薬学史』（南山堂、一九四九年）四四七—五一頁を参照。

(322) 『東京大学百年史　通史二』一〇二三—二二五頁を参照。

(323) それぞれ The Royal Historical Society のＨＰ記事(https://royalhistsoc.org/about/history/　二〇二二年五月一六日閲覧)、The American Historical Association のＨＰ記事 (https://www.historians.org/about-aha-and-membership　二〇二二年五月一六日閲覧）による。

(324) 「史學會規則摘要」『史學會雑誌』第一編一三号（一八八九年）七四頁を参照。

(325) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』三四八頁を参照。

(326) 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』一五一—一八四頁を参照。

(327) 『慶應義塾學報』第一号（一八九八年）を参照。

(328) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』五二四—三二頁を参照。

(329) 同書二四五—四七頁を参照。

(330) 同書三三七—三四二頁を参照。

(331) 通常は一九一〇（明治四三）年創設の三田文学会を第一期とするが、本稿ではそれをとらず、通常「第一期　三田文学会」と呼ばれるものを「第三期　三田文学会」とする。

(332) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』三四六頁を参照。

(333) 同書三五一—五八頁を参照。

(334) 徳富猪一郎「文學論」『慶應義塾學報』第三〇号（一九〇〇年）四—一三頁、および『慶應義塾百年史　中巻（前）』三五二頁を参照。

(335) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』三六一—七五頁を参照。

(336) 同書三四三—四六頁を参照。

(337) 同書三四三—四八頁を参照。

(338) 以降の議論の詳細については、小室正紀「『三田学会雑誌』百年史—創刊から昭和戦前期に至るまで—」『三田学会雑誌』第一〇〇巻一号（二〇〇七年）一四一—一六八頁を参照されたい。

(339) 『三田評論』第四九号（一九〇七年）を参照。

(340) 「第一巻第一号　奥付」『三田学会雑誌』第一巻一号（一九〇九年）を参照。

(341) 「第五巻第一号　奥付」『三田学会雑誌』第五巻一号（一九一一年）、および『慶應義塾百年史中巻（前）』六二四頁、高橋誠一郎「田中萃一郎先生追懐」五〇頁を参照。

(342) 「現計報告第一回」『三田学会雑誌』第一巻二号（一九〇九年）を参照。

(343) 『慶應義塾學報』第一七二号（一九一一年）八六頁を参照。
(344) 「小引」『三田学会雑誌』第五巻四号（一九一一年）を参照。
(345) 「理財學會々報」『三田学会雑誌』第八巻二号（一九一四年）二五二―五三頁を参照。
(346) 東京商科大学との「競争」も影響したようである。天野郁夫『大学の誕生（下）』七一―八一頁を参照。
(347) 東京大学経済学部・経済研究科のホームページ「沿革」（http://www.e.u-tokyo.ac.jp/kenkyuka/enkaku.html　二〇二一年五月二九日閲覧）を参照。
(348) 小室正紀「『三田学会雑誌』百年史」一五九―六四頁を参照。
(349) 小沢愛圀「明治末年の塾文科の発展」三一頁を参照。
(350) 天野郁夫『大学の誕生（下）』二七二―七六頁を参照。
(351) 浅沼薫奈『日本近代私立大学史再考―明治・大正期における大学昇格準備過程に関する研究―』（学文社、二〇一九年）五一―五五頁を参照。
(352) 小沢愛圀「明治末年の塾文科の発展」三一頁を参照。
(353) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』四二二―三三頁を参照。
(354) 小沢愛圀「明治末年の塾文科の発展」三一頁を参照。
(355) 永井荷風『澤東綺譚』（岩波文庫、一九四七年、一九九一年改版）一六六頁を参照。
(356) 『慶應義塾百年史　中巻（前）』五六三―六七頁を参照。
(357) 松村友視「鷗外・敏・荷風―荷風招聘をめぐる経緯―」『三田の文人』（丸善株式会社、一九九〇年）四四―五八頁を参照。
(358) 長谷川泉「没理想論争」『国史大辞典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=30010zz439260　二〇二二年五月二二日閲覧）を参照。
(359) 「帝国文学」『ブリタニカ国際大百科事典』（https://kotobank.jp/word/%E5%B8%9D%E5%9B%BD%E6%96%87%E5%AD%A6-100043　二〇二二年六月一日閲覧）を参照。
(360) 小沢愛圀「明治末年の塾文科の発展」三一頁を参照。
(361) 武藤康史「『三田文学』の歴史　第四回」『三田文学』第六五号（二〇〇一年）二三八―二三九頁を参照。『三田文学』の初期の活動については、『三田文学』第六二号（二〇〇〇年）から第一一五号（二〇一三年）にかけて五二回にわたって連載された武藤康史の詳細な「『三田文学』の歴史」を参照されたい。
(362) 武藤康史「『三田文学』の歴史　第五回」『三田文学』第六六号（二〇〇一年）二六四―六五頁を参照。
(363) 秋葉太郎『考証　永井荷風（上）』（岩波現代文庫、二〇一〇年）三四―八二頁を参照。
(364) 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』一四一頁を参照。一九一二年の時点で、荷風は年間給与として一八〇〇円を受け、全教員で一一位の高給取りだった。
(365) 水上滝太郎「永井荷風先生招待會」『貝殻追放　第三』（東光閣書店、一九二五年）一八三―二〇四頁を参照。
(366) 久保田万太郎「半生」『駒形より』（平和出版社、一九一六年）一―二五頁を参照。

(367)「（座談会）三田文学の人々」『三田評論』第六三一号（一九六四年）三四―四九頁を参照。
(368)「三田學會記事　三田哲學會講演大會」『三田学会雑誌』第四巻一号（一九一〇年）一二四頁を参照。
(369)永井荷風「文明發刊の辭」『荷風全集』第十四巻（岩波書店、一九六三年）三四〇頁、および『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一六三頁を参照。
(370)武藤康史「「三田文学」の歴史　第三三回」『三田文学』第九五号（二〇〇八年）二四〇―五八頁および同「「三田文学」の歴史　第三四回」『三田文学』第九六号（二〇〇九年）二三八―四八頁を参照。
(371)『慶應義塾百年史　中巻（前）』六一〇―一一頁を参照。
(372)水上滝太郎「夢がたり評議員會」『水上滝太郎全集』第八巻（岩波書店、一九四一年）二七―四七頁。
(373)水上滝太郎「三田文學の復活」『水上滝太郎全集』第十巻（岩波書店、一九四一年）七三―九二頁を参照。
(374)中村吉蔵（春雨）（一八七七―一九四一）はアメリカ留学を経て劇作家として当時脚光を浴びつつあった人物であった。永平和雄「中村吉蔵」『世界大百科事典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=1020005450600　二〇二二年六月二日閲覧）を参照。
(375)永井荷風「文明發刊の辭」三四〇頁、および『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一六三頁を参照。
(376)同書一六二頁を参照。
(377)三田英彬「澤木四方吉」『日本近代文学大事典』（https://japanknowledge-com.kras.lib.keio.ac.jp/lib/display/?lid=5221010000022266　二〇二二年六月二日閲覧）を参照。
(378)『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一六四―六七頁を参照。
(379)松本芳夫「雑誌『史学』のうまれるまで」一一〇頁を参照。
(380)『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一六七―七〇頁を参照。
(381)水上滝太郎「「三田文學」の復活」八九頁を参照。
(382)橋本孝「回想七十年」『哲学』第四六号（一九六五年）E一五―一七頁。
(383)史学研究会のHP（http://www.shigakukenkyukai.jp/gaiyou/index.html　二〇二二年五月二二日閲覧）による。
(384)松本信廣「史学」『三田評論』第六七二号（一九六八年）四四頁を参照。
(385)この情報はラディカルリフォメーション研究会のHP（https://rrstudies.exblog.jp/24109824/　二〇二二年六月三日閲覧）などによる。
(386)『慶應義塾學報』第一五一号（一九一〇）年七六頁、および『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一七二頁を参照。
(387)『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一七二―七三頁を参照。
(388)間崎万里「初期の史学科」二九―三〇頁を参照。
(389)『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一七三―七五頁を

参照。

(390) 松本信廣「史学」四五頁を参照。

(391) 松本信廣「田中博士を悼む」二七頁を参照。

(392) この時期の「史学研究会」と「史学科旅行」の活動については、松本芳夫「雑誌『史学』のうまれるまで」一〇九―一一二頁を参照。

(393) 『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一七七―七九頁を参照。

(394) 松本信廣「史学」四五頁、および『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一八〇頁を参照。

(395) 松本信廣「史学」四五頁を参照。

(396) 『史学』第一巻一号、および『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一八〇―八二頁を参照。

(397) 松本信廣「史学」四五頁を参照。

(398) 『史学雑誌』第三三編一二号（一九二一年）八九六頁を参照。

(399) 『慶應義塾史事典』八三五頁を参照。

(400) 『藝文』第一号（一九一〇年）一五八頁を参照。

(401) 「史學會會員名簿（大正十年十月現在）『史学雑誌』第三十二編第一一號付録」（一九二一年）を参照。

(402) 「史學會規則」『史学雑誌』第三三編第一一号（一九二二年）を参照。

(403) 「史學會基本金募集」『史学雑誌』第三三編第一一号（一九二二年）を参照。

(404) 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営』一〇四頁を参照。

(405) 間崎万里「史學科及び三田史學會の現狀」三二頁を参照。

(406) 間崎万里「初期の史学科」三〇―三一頁を参照。

(407) 一九二四（大正一三）年から一九二八（昭和三）年の松本信廣の留学期間を指しているとすれば、初期から経済困難が生じていたことになる。

(408) 松本信廣「史学」四六頁を参照。

(409) 坂上弘「並木通り留守番記」、慶應義塾大学文学部・古屋健三編『三田の文人』（丸善株式会社、一九九〇年）七五―八一頁を参照。

(410) 『慶應義塾百年史　別巻（大学編）』一八三―八六頁、また間崎万里「史學科及び三田史學會の現狀」三二―三三頁を参照。

(411) 松本信廣「史学」四六頁を参照。

(412) 松本信廣「史学」四六―四七頁を参照。

(413) 間崎万里「ルネサンスと『史學』の復刊」『史学』第二三巻（一九四八年）七―八頁を参照。

(414) 松本信廣「史学」四七頁を参照。

〔付記〕 本稿脱稿後に、二〇一七年三月に立教大学で公開シンポジウム「史学科の比較史：草創期から一九四五年」が開催され、その成果である小澤実／佐藤雄基〈編〉『史学科の比較史―歴史学の制度化と近代日本―』（勉誠出版、二〇二二年五月）が出版されたことを知ったが、参考にできなかった。